
IS ~強制の適合者~

ほのか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS→強制の適合者

【Zコード】

N7087V

【作者名】

ほのか

【あらすじ】

ISを動かせる男「織斑一夏」

そんな彼とは同じくISを動かせる男が現れた！
しかし、彼はイレギュラーな存在で・・・

オリ主人公設定

オリ主人公設定
黒時 クロトキ
刹那 セツナ

年齢 不詳（過去の事をあまり覚えていない為）

性別 男

性格 面倒事には関わりたくない急け者

「しかし事の重要度によって行動的になる」

本人曰く才能が無い駄目人間…らしいが I.S 操縦技術や
その他の色々な面で（無駄な所まで）高いスキルを持つ

『結局、面倒臭いの一言で大半を済ませてしまう…』

見た目 まあ… 女装が可能な位に顔立ちは良い

目の色が蒼

I.S の適合者？なのだが、一夏とは違つて昔、軍事力増強の為に何
処かの国が

身体を改造（国際法違反であり原因不明の適合）をしてるので I.
S を動かせる

病弱ではないが時々、心臓に原因不明の痛みが走る

専用 I.S 『シルバリオ・ゴスペル』
『鐵』

機体は『銀の福音』の漆黒色 ver. に 2 対の翼

「黒月」 太刀 『クロゾキ』

絶対防御無効化能力（但し、雪片・雪片式型よりも威力は遙

かに弱い)

ついでにエネルギー消費が無い武装

オリ主人公設定（後書き）

変じや…なかつたですか？

初投稿なので大目に見てください

m (ーー) m

始まり

IJSはIJS学園

IJS適正者の育成を行う教育機関だ

そして、そのIJS学園に輝かしい新たな春の到来が来た。のだが・・・

「ゼ、全員揃つてますね～…それじゃSHR始めますよ～…」

うろたえてるというか、困ってる?というか…

副担任の「山田 真耶」先生が

先生なのか疑わしい学生みたいな身長で出るとこ出てる田の前の人さつき空間投影ディスプレイに映し出して自己紹介をしていた

「これから一年間皆さん仲良くして行きましょうね～…」

・・・・・・シーン

新入生だから緊張をしているのかといえばそうではない

「IJSは女性にしか扱えない」なので此処にいるのは女性だけかと言つと違つ

その定義をブツ壊してIJS学園にいる男子生徒が2名、いる。いち

やつてる

クラスの女子全てが2人の男子生徒を凝視している

そんな異常な光景を前に山田先生は口を開いていく

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いしますねー出席番号順で始めてください」

そして不思議な空気感が漂つ教室で自己紹介が始まつて行つた・・・

一夏 side

「（こ）、これは想像してたよりキツイな。絶対に俺と後ろの『黒時
刻』^{クロクトメ} 刹那』^{セツナ} だっけ？」

に注目してるよなあ。後で話しかけてみないと俺、この場所で過ごして行く自信が無いぞつ……」

この席順にだけは内心、感謝している一夏だった

刹那 side

「（ああ・・・面倒だ。何故か知らんが女子達がメッチャ見てくるんだが？

ゑ？俺なんか悪い事したかなあ？まあ前の席に男子がいるのは良かつたな。

後で話しかけてみるか・・・）

だいたい同じような事を考えている2人の内、一夏の方に山田先生が声をかけた

「…ん。…らくん。織斑君つ」

「は、はいい！？」

急に呼ばれ驚いたのか一夏は裏返つた声が出てしまつていた

クスクスと辺りから笑い声が聞こえて落ちつかない一夏

「あ、あの大聲出しちゃつて「ゴメンね？」「ゴメンね？」い、今くあゝ～始まつて

「おゝの織斑君なんだよねつ！じ、自己紹介してくれるかな？」

イレギュラー男子2人は本当に先生だらうかと疑わしくなつた瞬間だつた

「えつと・・・やりますから、自己紹介しますから謝らないでぐださい」

「ホントですか！？ 本当ですね？ じゃあお願ひします」

自己紹介をする前に一夏はチラリと窓際の幼馴染

「篠ノ之^{シノノホウキ} 篇^{ホウキ}」を見たが視線を外されたのでショックを受けながら

後ろを振り向く

「えつとー… お、 織斑 一夏です。 よろしくお願ひします」

礼儀正しく斜め45度に体を折り挨拶を終えた一夏

正直言つて自己紹介なんだから、 もっと聞かせてよ（キラキラの目

で見る女子一同）

の空気が漂っているので一夏は再度幼馴染を見るが目を逸らされる

一夏 side

「（… っくー マズイー ）のままだと暗い奴って思われちまつ… 」 いつ
なつたら）」

刹那 side

「（お？ ）の空気でまだ発言出来んのか。 やるねえー 僕は耐えられ
んぞ… ）」

関心したのも束の間

「以上です！」

ガタタシ。 半数の女子と刹那は軽くずつこけていたが一夏にはこれまで
以上

どうする事も出来ないようだ

数人がずつこけて、 それを見ていた一夏の後ろから何かが振り下ろ
されるのを

刹那は見た

パーンッ！ ！ ！ 一夏の頭に激痛が走る

すかさず振り向くと、 そこには誰もが知っている女性がいた

それは

始まり（後書き）

ストーリーの構成に自信が全く無いねっ
・・・Me頑張るよ

出逢い

一夏の後ろに現れた

「げつ、関羽！？」

パンツ！

再び四角い何かで　もとい、出席簿アタックを喰らつ

「誰が三国志の英雄か馬鹿者」

そう言つて教卓に向かう人物は「織斑オリムラ千冬チフコ」IS世界大会大1回

優勝者だ。このIS学園に通う者が知らぬ訳が無い

「山田先生、クラスへの挨拶を押しつけて済まなかつたな」

「い、いえ副担任としてコレくらいは・・・」

頬を染めながら話す山田先生。はにかんでるなー

「諸君、私が織斑 千冬だ。君達新人を1年で使い物になる操縦者に育てることが

仕事だ。逆らつてもいいが私の言つ事は聞け。いいな」

この台詞だけを聞いたらただの傍若無人にも程がある普通の人ならドン引き。「ブチ切れかもしねーが！」

「キヤ————！千冬様、リアルの千冬様よ！」

「私、お姉様に憧れて、隣の県から來ました！」隣県つて近いな！？

「ずっとファンでした！」

「はあ…毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心する。」

「（これがポーズじゃなくて本当に鬱陶しがつてゐんだよなあ・・・）」

刹那 side

「（まあ……）人の事だから本心から そう思つてゐるんだがーな

」

一夏＆刹那「（人気は買えないって知つてんのかな？千冬姉（この人は））」

しかし甘かつたのはこの2人

先程よりも黄色い声が挙がつたのは割愛させて貰おう

「で？お前は挨拶も満足にできんのか、お前は」

辛辣。千冬が一夏にかけた言葉は辛辣であつた

「いや、千冬姉、俺は 」

パンツ！「織斑先生と呼べ」

「・・・はい」

このやり取りでクラス中に疑問が浮かぶ

「「「織斑君つて千冬様の弟？」」「「ならそれが関係して工Sを？」」

「なら黒時君は？」

女子一同は情報伝達速度が素早く、色々な話が浮かび上がつていた

「あー…騒ぐな。まだ自己紹介が終わつてない。次は、黒時 お前の番だ」

織斑先生の一言で静かになつていいくクラスで自己紹介とは鬼か！さつきの騒ぎの中済ませたかったよーと、思わずにはいられない刹那だが

愚痴を言つても仕方ない。自己紹介をするとしそう

「えー… 黒時 刹那です。趣味…は一特に無いんですけど、何もない時間が好きです

特技は一徹夜をするなら2日3日は余裕です。よろしくお願ひします」

ペコリと頭を下げクラス中を見回す。

よし！さつきの織斑みたいにくもつと言つてゝみたいな目の奴はない

もつとも今の自己紹介ってどうなの？感がハンパなかつたが

心中でガツツポーズ。よしこれでこの場は乗り切つた！
その後は順調に全員分の自己紹介を終えて休憩へと入った

ここで一夏は後ろの席の刹那に声をかけてみることにした

「えっと、黒時だつて？俺、織斑一夏。一夏って読んでくれればいい

「ん？ああ！俺は黒時 刹那 僕も下の名前で刹那つて呼んでくれ

「よろしく。つて聞くけどさこの状況（女子に囲まれる）辛くな
いか？」

「まあ何かと視線が集まるのは勘弁したいけどな

休憩に入り（それでも女子からの視線は絶えず）、一夏は刹那と挨拶を交わし雑談をしている処に

「お2人方ちょっと、よろしくて？」

「「ん？」

声をかけられた2人が声の主に顔を向ける

そこには鮮やかな金髪の女子がいた。わずかにロールがかつた髪は『いかにも』

高貴なオーラが出ていた

「訊いてます？お返事は？」

「聞いてるけど何？」「何か用事か？」

一夏と刹那が普通の返事をしたはずなのだが、目の前の女子はワザとらしく声をあげた

「まあ！なんですか、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも

光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「…………」正直、この2人はこの手の人には苦手だ

何が偉くて威張るのかが理解できない。そして刹那はこういった偉そうにしている奴が

心底苦手である 話しかけられたので、一応言葉を返しておく

「悪いが、俺は君の事を全く知らないから話す態度なんて知らない」「刹那に同じくだな」

刹那 side

そりやだって初対面の人に敬語つてのは礼儀として解るが、相手が上から目線話してくるなら…ねえ？

それとも何か？コイツの国の言語で話せつて？日本語で話してきたのは そつちなのに

一夏 side

確か自己紹介で何か言つてたけど…正直、千冬姉が担任だった事の方がショックだ

お互いがつまらない考え方をしてると田の前の女子は田を吊り上げて

「わたくしを知らない？このセシリ亞・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「あ、質問いいか？」一夏が聞く

「ふん。下々の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「・・・代表候補生って何？」

がたたたつ！聞き耳を立てる周りの女子や刹那までもがずつこけた

「お前、本気か？マジか？リアルでか？」

「おう。知らん」セシリ亞が「信じられない」って顔をしたな…今
つづーか言いきったよこの子・・・知らない事は素直に言おうって
顔してるよ

「代表候補生ってのは、まあ要約すると国家代表の候補生。つまり…

エリートってトコかな？」

「そう！エリートなのですわ！本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、
クラスを同じくする事だけでも奇跡・・・・・幸運なのよ。
その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」「あー幸せー（棒読み）」

「……馬鹿にしていますの？」

お前が幸運だつて言つたじやん

「大体、あなたは知識が少しあるよつですが（刹那を睨みながら）

あなたはＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね

あなた方がＩＳを動かせるとの事で期待をしていましたけど、期待はずれでしたわね

「俺に何か期待されても困るんだが…」

「期待する意味が解らんな…」

嫌味を混ぜて返事をする刹那にセシリアはこめかみに何かが浮かんでいたが

気にする事は無いだろ？。うん

「まあでも？わたくしは優秀ですから、あなた方の様な人間にも優しく接してさいあげますわよ

何せわたくし、入試で唯一教官を倒したのですから」「唯一をかなり強調し、自慢げに語ったセシリアだったが…

「入試つて、あれか？ＩＳを動かして戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は・・・・・？」

「ああ、俺も戦わされたが勝つたぞ？」

「は・・・・・？」

そんなに2人の言葉がショックだったのか、目を見開いて驚きながら

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」　おおうっ人の声がモニ

つたよ

ピシッ！ん？何か音が聞こえたな

「わ、わたくしだけではない、と？」

「えつと多分?」「女子限定だつたらだろ」

「ツ
！」

声にならない音を出して偉く立腹の様子。そこへ一夏が

「えーと、落ちつけよ。な？」

ブチッ。「こ、これが落ちついていられ
きーんこーんかーんこーん。

次の授業開始のチャイムに言葉を遮られたセシリ亞は

「また後で来ますわ！逃げないことねーよくつて！？」

逃げゼリフを吐きながら席へと戻つていった

それと同時、織斑先生が入つてきて先程までの空氣は一変して
次の授業へと入つていった・・・

出逢い（後書き）

いやあー…恐い。

自分のすとーりー構成力の無さが恐いねb

ゴホン！

ご覧になつてくださいって、どうもです

英國の人、憤慨。（前書き）

チューートハンパですが大目に見てください・・・

英国の人、憤慨。

「これから実戦で使用する各種装備の特性について説明する」織斑先生が教壇に立つてゐる。よほどの大事な事なのか山田先生まで手にノートを持っていた。不意に織斑先生が

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな

クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の會議や委員会への

出席・・・まあクラス長だな。誰かいないか？自薦他薦は問わないと

「はいっ織斑君を推薦します！」「私は黒時君を推薦します！」
おや？このクラスにはイレギュラー男子と同じ名字の人があるのか・
・

「ふむ・・・なら候補者は織斑一夏と黒時刹那の2人だな？」

一夏「お、俺！？」刹那「ちょっと待つてください先生！」

何で俺達なんですか！？と尋ねる前に一夏は出席簿により強制着席刹那は「黙れ」の一言と空飛ぶ出席簿攻撃で黙らされた

「推薦された者に拒否権は無い。諦めろ それで？他にはいないのか？」

「いないならこの2人のどちらかがクラス代表だぞ」

仕方なく鬼く千冬」の言つ事に逆らえず一夏は刹那に、刹那は一夏に
クラス代表を擦りつけてやるうと考へている所・・・

「納得いきませんわ！」

バアンツー！と大きい音を立てて立ち上がるセシリ亞

そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥晒しですわ！

このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか？

いきなり立ち上がったセシリアが憤慨している最中

一夏 side

「（おお！さつき仲良く話していたお陰でセシリア・なんとかさんが変わってくれるっぽくなつ…大体、男がクラス代表だなんていい恥晒しですわ！

このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか？…た？あれ？）

刹那 side

「（おお…あのセシリアって奴、クラス代表を俺がやらなくともいい様に説得でも…大体、男がクラス代表だなんていい恥晒しですわ！

このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか？…してくれる訳無いよねー）」

馬鹿な考えをしている2人に更なる罵る声が聞こえてくる
「実力からして、わたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいという理由で極東の頭の悪い猿と

得体の知れない猿に任されては困ります！」

頭の悪い猿＝一夏 得体の知れない猿＝刹那

この言葉で一夏は人間扱いされてない事に驚いているが、もう1人のイレギュラー存在は

ブチツ「…おい」

「？なんですか？得体の知れない…」「ガタガタ煩えんだよ」…？」

「俺は人だ。人以外の何者でもねえんだ。古いだけが取り柄の国のがキが喚くな」

彼が何故キレているのか、周りの誰にも理解不能であり（千冬は理解して様に眺めていたが）

彼が怒つている事に少しばかりビビつていた。

セシリ亞は怯えながら同時に自國の侮辱をされ怒つて

「な、なんですって！？」

「だから五月蠅いって言つてるだろ？理解できないのかエリートさん？」

その光景を眺めていた一夏が止めに入る

「おい刹那、言い過ぎじや…「だ、大体文化としても後進的な国で暮らさないと

いけない事自体、私にとつては耐えがたい苦痛で

チン×2

「「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」」

声が重なり、一夏はやつてしまつたの顔と刹那のドヤ顔…何故ドヤ顔？

の2人にセシリ亞の「わたくしの祖国を侮辱しますの！？」という声が

聞こえた次には「決闘ですわ！」の声と彼女の指が2人に突き出されていました

刹那は「最初からそのつもりだ」と「一夏はどうする？」と聞かれたので

「おう。いいぜ。四の五言づくり解りやすい」

「言つておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い　　い

え！

奴隸にしますわよ」

「テメエの奴隸になるぐらになら本氣で相手してやるよ。手加減しねえぞ？」

と、刹那と一夏く手加減^{ハンド}へと口にするとクラス中の女子から大きな声で笑われた。

「2人ともソレ、本氣で言つてるの？（笑）」 と。
そう、今は女尊男卑の時代・・・まあここで言い争つよりちゃんとケリをつける

2人は「ハンデは無くていい」と言い、織斑先生の締めの言葉での場は収まった

授業終了後

「なあ刹那..さつきは、なんであんなに怒つてたんだ？」

一夏聞かれて、正直に話す必要は無いと感じた刹那は
「なんとなくだよ」とはぐらかしていたが、

彼はく人として生まれて来なかつたのだ..ただ、軍事増強の為に作られたく兵器へ

だから怒つた。自分はもうく人なのだから、く人以外のモノ以外と、

呼ばれたくないから・・・と、「おーい」一夏に呼ばれ思考を中断。

「（にしても、猿呼ばわりされただけでキレるなんて大人げなかつたな）」

少しばかり自重気味に薄い笑いを浮かべながら返事をする

「どうした？」

「俺、IISの事よく解つてないから、刹那がIISに詳しいなら俺に教えてほしいんだ」

「イツはISの事を理解せずにここに（IS学園）いるのか…
呆れながらも、まあいいか。と思ひ了承をして雑談を開始したのだ
つた

雑談中に

「……ちよつといいか？」

誰かに声を掛けられ、2人は声の主へと振り向いた

英國の人、憤慨。（後書き）

ところで、ふと思つたもですが…
主要キャラの登場が、このままのスピードでは遅くなるので
これからは、なんとか投稿スピードを上げていかなくちゃ…と
がんばりますっ！

ファースト登場

「…… 篠？」

一夏に篠と呼ばれた人物はポニー・テールで、少々田つきがキツそうな子だった

「ん？ 一夏、知り合いか？」

「ん？ まあ、幼馴染だからな」

幼馴染という言葉に、篠と呼ばれた子は不服そうにしているが…理由など知らんわ。

「それで？ 何か用か？えっと… 「篠ノ之 篠だ。」篠ノ之…無愛想な奴っぽい

俺、く刹那>が『篠ノ之』と呼ぶと、篠は先程みたいに不服そうにしているが…（以下同文）

…んー名前を呼んだだけで睨まれるとは… 何故だ？ 聞いてみるか

「なあ 篠ノ之？」

ギロリ。また睨まれた…

「なんで睨まれるんだ俺」 一夏に聞いてみると言い難そうにしておられる。

これは名字を嫌つてるとかか？なら本人にどう呼べばいいか聞いてみる

「えつと篠ノ之？なんか呼び方が嫌だったか？なんか怒つてるようにな見えたんだが」

「う・・・別に嫌…といつかあまり名字で呼ばないで欲しいのだが

…」
「ならなんて呼ばいいんだ？さつきから睨まれるのが気になつてな」

「す、すまん。ワザとではないんだ。・・・ そうだな、下の名前で呼んでくれればいい」

本人から許可が下りたので、下の名を呼ぶ事にする。と

「篠ノ…じゃない、なあ篠？一夏に用事があんのか？」
さつきから気になっていたのだが、休憩時間なくなるぞ、そろそろ
「あ、ああ一夏ちょっと話がある。」「（刹那）俺がいなの方がいいか？」

「そうなのか篠？」「う…うむ」「なら移動するわ」
「いや外で話してくるさ。いいだろ篠」「解った」
「遅刻しない様に戻つて来いよー」

2人は廊下へと出て行き話を始めた（ぶつちやけ声がでかくて全部聞こえていた）

そして授業も終了。放課後に早速、一夏にI.Sの事を教えていると
(面倒臭いが1時間で100円で教える事になった)

「あ、黒時君に織斑君。まだ教室にいたんですねー」

顔を上げると山田先生が資料を片手に立っていた

「2人の部屋割が決まりましたよ」

「なんですか唐突に…つて俺等は家から通学じゃなかつたんですか
？」

「千冬ね…織斑先生に聞いた話と…・・・」

2人して首を傾ける

そうしたら山田先生が小声で2人は特殊だから、
家からの通学は色々とホニヤララらしい。らしい
「解りました。それで俺達の部屋は何所なんですか？」
「あ、いえ、その…お2人は同じ部屋でなくて…」

おや？これは1人1部屋の予感か？寮生活で同室の住人を気にせず
に個室とは！

そんな期待も露知らず。山田先生は・・・

「お2人の部屋なんですが…黒時君と織斑君は違う部屋で
女子と同室になってるんですよ」

・・・・・・・・・

「はあ？」

何を言つているのだ？2人部屋なら片方の女子を移動させればいい
のに？

「わざわざ、女子と同室？・・・困るんですけど！」

「えつと…」これは織斑先生が決められたので変更は無理だと思いま
す

「流石、千冬姉…あ、でも俺は家に荷物があるんですけど」「俺も
です」

鬼むら…違つ、織斑先生が決めたなら逆らえないと判断したが、荷
物に

関しては家に帰らないとならない。しかし、

「私が手配しておいてやつた。ありがたく思え」

音も無く気配を消して近寄つてきたぞ、この鬼先生

「織斑先生、俺は家に戻る必要があるんですが」

「妹から。と張り紙付きのダンボールが届いていたぞ」

……余計な事しやがつてアイツめ

「2人とも事態を把握したなら自室に戻れ。下校時間だ」

「織斑先生は、そう告げて去つて行つた

「なら私も失礼しますねー」山田先生も去つて行つた

「なら俺等も部屋に言つてみるか」「おう、教えてくれてサンキュー

な

教室に残っている2人もIISの勉強を止めて各自個室に向かって行く

一夏 side

「ここか1025室。」

彼が入つて数十秒後にドアから木刀が飛び出すという事件?があつた
・・・何故だらうね

刹那 side

「えーと、1021室 ここだな」廊下の突き当たりである
コンコンとノックをするが、返事は無い。留守か?と思いつつ
ガチャ ドアを開け入室。電気は付いているが、人は いな
いや気配を感じる

何処にいるのか解らず、その場に立つていると背後に気配がツ!
と、何故同居人に対して いつも気構える必要があるのか解らない
が 同居人は
暗殺術に長けているっぽい。ってか速ツ
飛び出てきて
後ろを獲られる!かと思うと急に視界が暗くなる。

「だーれだ?」少し大人びている声が聞こえるが・・・
「知らん。解らない」そう言つしかないだらう
視界をふさいでいる指はさらさらとして、すこし冷たいのが気持ち
いい
「はい、不正解」

指が離れて刹那が振り向くと、困惑する刹那を楽しそうな笑顔で眺

めている、

2年のクリボンの色から、女子だった

ファースト登場（後書き）

あー…大丈夫！ワタクシめの妄想力だけは、もう末期さつ？
文章力皆無でスミマセン…
がんばりますよー

ところで、刹那君の同居人が解りましたか？かなり早い登場ですが
アノ人です

オリ設定で刹那君に妹つけたけど、出てくるのか?
出てこないです…・・・いつか伏線回収しよう

同室の不思議な人

振り向いた先の2年生女子は何故だか不思議な雰囲気を纏っていた
「……何者ですか？」少しばかり睨んでみる
相手の名を確認する前に相手の素性を聞いてみる
「ん？どうして警戒してるのかな？」

顔を合わせる前に瞬速で後ろから視界を奪う人が言つ台詞ですか・・・

「いやいや警戒しない方がおかしい…ですよ。いきなり視界を奪わ
れたら」

見たところ上級生なので敬語を使つ

「ああ、最初の出会いでインパクトがないと、忘れられると思って」

「IJKの部屋にいるって事は同室の人ですよね？普通忘れないでしょ
う普通」

「けど、キミは普通じゃないからね」

「・・・根拠も無いのに失礼ですね」少しイラついた
先程よりも警戒心を高めておく

「つうん、今の動きから私に背後を獲らせない様に構えてたからね
良い動きだよ」

？俺の知られたくない過去の事じやないのか？
しようたい

少しばかり警戒を解いてソフティイー？に会話を始めよ…「流石、
ISによる軍事力増強のせいで強制のエス適合者になつたキミは普
通じやないね」

「！…アンタが何故知つている！？」
いきなりの不意打ちに声を荒げてしまつ。

「トトは織斑先生と学園の理事長くらいしか知らない筈だ
「やん。声を荒げないで」フザけているのか、落ちついているのか
解らない

「いいから答える！ 答えなければ」

「あんまり大きな声だと他の部屋の人達に聞こえちゃうよ？」

「ちつ……何故、俺の正体を知っている？」セシリ亞との事があり、
すぐにキレはしない

聞かずにはいられないのだが、ここは落ちけ俺。口封じは後で出来る

「その前に、自己紹介させて貰うよ。私は更識 楯無
こここの生徒会長よ。よろしく」手に持つ扇子に自己紹介と書かれて
いる…

「いきなり自己紹介？…まあいいか。俺の事は知っているみたいだ
から
自己紹介は必要ないな？だから早く俺の質問に答える。何故知つて
いる」「

上級生だからって、俺の秘密を知る者には容赦なんか無い。口封じ
するべし

「焦らない焦らない。私だけが名乗つてキミが名乗らないのは不公平だよ」

何を呑気に話を聞いているんだ俺は…なんかペースを乗つ取
られた感じだ

「…俺が名乗つたら質問に答えるか？」

目の前の人物は「もちろん」と答えたので名乗つた

「俺は黒時 刹那。」我ながら、それだけか…？と思つたね。

人が折角、名乗つたのに「知ってるよ」とかほざかれた…殴りてえ
「うん、じゃあキミの質問に答えようか。私は生徒会長であり更識

家の人の間なの」

更識家 確か対暗部用暗部の裏世界のプロフェッショナルだった
つけ

「更識家……ああ成程、裏世界の奴を裏世界の奴が知るのは当然、
か」

「私が全部を言う前に納得しないでほしいな」

知るか。俺の秘密を知ってる奴には容赦なんか（以下同文

「で？ 例え更識家の奴が俺の事を知つても何故接觸する？ 監視の
為か？」

「うーん… キミと話してるとペースが乱されるね」

アンタが言うか・・・・・さつきから流れを乱すようにしゃがる
「私がキミに近づいたのは理事長から任されたんだよ。後は私個人
で興味があつたからね」

「ああ十蔵さんか…」

入学前に織斑先生と理事長と俺の3人で俺の今後の話しをした時に
仲良くなつたアノ人か：美味しいお菓子を有難う。十蔵さんウラのセカイ
つて違う。あの人が心配だからつて更識を向かわせたのだろう
「わかつたかなあ？」何か年上目線の様なコトバだった。あ、年上
か・・・

「理解は出来た。だが俺の秘密を内密にするかどうかアンタを信用
してない」

「大丈夫よ、そんな暗い話はウラのセカイこっちの世界でしかしないわよ」
・・・信用、するのは不安だが信用している2人の内1人が任せた
のだ。
・・・アンタを信用してみる「十蔵さん…今度、お菓子たか集りに行
くからな

自分でもかなり簡単に決めてしまつたが、信頼してみようとした

「よひしー。なら」

先程までの張り詰めた空氣から一転。楯無は

「というわけで、同室の更識 横無よ。よひしーくね黒時 刹那君」

あ、そうか同室の人だつたつけ

「俺の事は刹那でOKです。名字はあまり好きじゃないんです
よ楯無先輩」

わざとまで焦つていて?から敬語を忘れていた。

「もう。では私も楯無と呼んでもらおつかな。たっちゃんでも可」

「解りました、楯無さん」たっちゃんと呼ばないらしい

このやり取りから、2人は先輩と後輩の仲になつた

「そーいえば楯無さん?」

「何かな?」

「ここつて1年の寮ですね?何で2年の楯無さんが此処に?十歳
さんに頼まれて?」

そう、ここは1年生寮。2年の楯無がいる筈がないのだ。

しかし、楯無は当たり前のように

「それは生徒会長権限で、ね。ついでに面白やつだったから

いきなりの「joke」だつた

「・・・さいですか」

その後は楯無さんと親睦を深めるためにお互いの事を少しけじ話して合
つた

翌日、樋無さんが「刹那くん起きてー朝だよー」とか言つて刹那に声をかける

「ん~…まだ時間…あります…から寝させてください」

学園に行く時間はまだまだなので刹那は起きると言われても起きないのは、

やはり朝の睡魔は格別に強いからだろう。しかも刹那は朝に弱い

「むー抵抗するわねえ。こうなつたら…」

スタスターと樋無さんが近づいてくる音がする…

正直、眠いので寝返りをして朝日が指す方から体を背ける。すると

「うりや。こちよこちよー」

「うわー? やめつ、あ、うわ、ひいいい!」

Let'sくすぐりTIME

「さあさあ、起きなさい」

「ちよ、やめ、起きて、起きてまつ、あははー」

起こされた。だから今、機嫌が悪い。だが、反論したら、また悪魔の行為が…

「それにしても樋無さん、なんで俺を朝早くに起こしたんですか? いきなりだったので効果は2倍、そして刹那はくすぐりが大の苦手「まだ刹那君にくすぐりをしてなかつたから」

答えになつてないし、意味が解らない。

「兎に角、くすぐりは止めてください」

樋無さんは返事をしてくれなかつた…・かと言つて笑顔を向けられても…・

この様な事がたつた1日(夜と朝の数時間)で数回あつて、樋無さんの事を

言動、雰囲気、態度などは大人びているのに稀に子供っぽい一面を持つ不思議で自分の事をわからせない。俺には何と無く自分と似ていると思つた

朝早く起こされ、眠氣も無くなり特にやる事が無いので学食へ行こうと

「刹那くーん」ガチャ

先程、俺を弄った後に部屋を出た楯無さんが戻ってきた
「なんですかー？：ってどうしたんですか？その料理」

手に持つトレーラーには見た目が綺麗で香りも良い料理が乗っていた
「うん。さつきのお詫びと親睦を深める為に楯無お姉さんが朝御飯を作つてあげました」

正直、朝御飯はいつも野菜ジュース・コーンの俺には「金が無い訳じゃないぞ」

とても眩しく見えた。最近は料理をまともに食べてない「金が無い訳じゃないぞ」

「（確かに最近はずーっと野菜ジュースとコンバットトレーショングだけしか食べてないぞ）」

楯無さんが俺の口に箸でつまんだ料理を持つてくる

「はー、あーん」

もぎゅもぎゅ。「うくん。うん美味しい美味しい。寝ぼけているのか、

食べさせられた事に何も言わない

「つて楯無さんが全部作つたんですか？」

「私以外に誰もいないわよ？で、美味しい？」

「あ、はい美味しいですよ。ありがとうございます、こんなに」

「どんどん食べてね」

何故、こんな事をしてくれるのか解らないが美味しいので良しだす
る。

・・・色々と気になる事が多いが、悪い気はしないのはなんだろ
うね

「さあ今日も授業頑張つてね」

楯無さんの言葉でアノ光景が蘇る。

・・・・・一夏と共に生き延びるとしようか

「・・・ありがとうございます」

楯無さんのスキンシップ?の陰で女子に對して変に緊張しなくて
済みそうだ

俺と楯無さんは朝食を済ませ、2人で互いの教室に向かって
行つた

同室の不思議な人（後書き）

橋無さんのキャラあつてる?
自分では解らないです・・・

でも大丈夫！頭の中ではIn a delusionだからね
・・・頑張りますっ！

朝、女子達が元気よくキャイキャイ会話をしている所に挨拶をする

「おはよー」

「！？く、黒時君！？お、おはよっ」

集まつて会話中の女子達に俺が笑顔で挨拶をしたら顔を背けられた。

をいをい。全く…親から教わらなかつたのか？人の目を見て挨拶しろつて

俺は教わつた事無いけどね。つづーか何故、皆顔を赤くしてんの？風邪か？体調管理くらい出来ないと駄目だぞ、若いんだから

「お、刹那だ。おーっす」

オッサンみたいな思考を中断。一夏の後ろの席なので、席まで行き話を始める。

「おはよっさん、一夏。何か眠たそうな顔してるや」

「あ…昨日の夜にけよつと、な

「ふーん…どーでもいいか

「いや、そこで何があつた？つて聞いてくれよ

ぶつけやけ、苦労話の感じだから興味ないが…

「一応、聞いてやう。何があつた？」

「実は…・いややっぱり聞かないでくれ

そう言つて一夏は視線を窓際に送る。視線を移すと座りながら口を

ラを見て…

基、睨んでいる篠ノ…篠がいる。何故睨んでる？

「何かあつたみたいだが、聞かないでやるよ」

「悪いな、助かるぜ刹那」

少し、興味が沸いたが…そつとしてやろう

「俺と比べて刹那は眠くなさそうだな」

「そりゃ、一悶着があつて朝早くに起こされたからな

「?同室の人とトラブルでもあつたのか?」

「違う違う。同室の人は不思議で面白い御方でしたよ」

「何故に敬語?…ふーん面白い人なら良かつたじゃないか」

不思議過ぎて対応に困るし、マイペース?な人だつたがな

「そういう一夏は仲良くやつていけそうな人だつたか?同室の人」

「笄だつたから大丈夫…だと思つ」

・・・コイツはホントに何があつたんだよ

「頑張れよ?」

「サンキュー」

キンコンカンゴーン

一夏が元気になつた所で予鈴がなり響き、織斑先生と山田先生が入ってきて授業が開始された

1時限目の終了時には一夏を見る限り、集中して授業を聞いている様に

見えたが2時限目終了の鐘が鳴り響き、一夏を見ると・・・

「おーい…グロッキー一夏?」

「…駄目だ。理解不能だ」

「そんなんじや上から目線の奴との勝負に負けるぞ」^{セシヨア}

「そつは言つてもなあ、刹那は理解してるので?」

「ん？俺か？理解してるつもりだぞ。多分」

多分、たぶん、タブン、^{天国}ヘブン…何考えてんの？俺

馬鹿2人を放つておいても授業は3时限目に入つていつた

「ISは常に操縦者の肉体を安定に保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、

脳内エンドルフィンなどがあげられ

「先生、それって大丈夫なんですか？なんか、体の中をいじられてるみたいでちょっと怖いんですけども・・・」「

クラスメイトの1人がやや不安げな面持ちで尋ねているが…

「（別に体に悪影響なんか出ねーと思うがな）」「

刹那にはISの授業を聞く必要が無いのだ。何せ彼は感覚で

ISを乗りこなす兵器だから・・・

まあ普通の人には不安なのだろう。先程のクラスメイトに返答をする山田先生

「そんなに難しく考へる事はありませんよ。そうですね、例えば皆さんは

プレイヤーをしていますよね。あれはサポートこそそれ、人体に悪影響が出ると

言つ事は無いわけです。もちろん自分サイズのものを選ばないと

「

おや？健全男子の前でして欲しくない会話の最中、山田先生と俺の目が合つ。

一夏め、田を合わせない様に顔を背けあつて…

刹那と目が合つた、山田先生は一度キヨトンとしてボツと顔を赤くした。

「え、えっと、いや、その、黒時君や織斑君はしませんよね。解らない例えでしたね」

天然巨乳先生の「まかし笑いは教室中に微妙な雰囲気を漂わせた。2人の男子よか、女子の方が意識をしているみたいで、腕組みのフリで胸を隠そうとしていて、3時限目の終わりまで余所余所しい空氣だつた

キーンコーンカンコーン

「ねえねえ黒時君さあ！」 「はいはーい質問ーーー！」 「今日のお昼暇？放課後暇？夜暇？」

昨日までの様子見は終焉を迎えたのか、一夏と刹那が談笑している所に口ケットスター！

「いや一度に聞かれても」

「おい、その前に商売をするな。そこ」

刹那が気付いた整理券販売はかなりの金額が貯まっていた
「千冬お姉様つて自宅ではどんな感じなの！？」

お、それは気になるぞ。案外、駄目人間（笑）っぽ ヒュンッ！
スパッ！

「え。案外だらしな」 パアンッ！

「休み時間は終わりだ。散れ」

いつの間にか後ろに立つ鬼斑先生が出席簿×2（片方は刹那に飛んできた）

「織斑先生？なんで俺が攻撃されるんですか？」

「自分の心に聞いてみる」・・・読心されたぞ

まったく、あの出席簿は何製だ？鋼か！？

先程の攻撃で頬の横を出席簿が突つ切つて、血が出ていた

危ないです。いやホント

「ところで織斑」何事も無かつたが如く、会話し始めた

「お前のIDSだが準備まで時間がかかる」「へ？」

「予備機が無い。だから少し待て。学園で専用機を用意するようだ

「（へえ…専用機持ちか。ま、データの採取とかも目的なん
だろうがな）」

一夏がティンパンキャンパンでいると、教室がざわめいた

「専用機！？1年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出てるって事で…・・・

「私も早く専用機欲しいなあ～」

一夏が意味がわかつてなさそなので織斑先生がつぶやく。+溜息

付きで

「織斑、教科書六ページ。音読しろ」

「え、えーと『現在、幅広く・（以下 省略』」

「理解できたか？」「なんとなく」

一夏の納得では、つまり…

1・IDSは世界に467機しか存在しない

2・コアは篠ノ之博士しか作れない。博士はコアをもう作つていない

3・俺と刹那が特別待遇。但し実験体

「あ、れ？織斑先生、刹那の専用機は？」

先程、先生は一夏1人に専用機の話をした。けど刹那には？

「ああ。黒時には専用機は必要ないからな」

? 皆が「何故?」といった視線を刹那に向けるが、刹那は返事で無く笑顔を向けたから

(「いえ、話す事はありませんよ?」の笑顔だが)
女子達は顔を赤くして、疑問をあやふやにされていた。
一夏は疑問を持ったままだったが・・・
あ、ちなみに篠ノ之博士というのは

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか・・・?」

「(ああ... そういうえばアイツの名字つて篠ノ之だったつけ。あの天才は)」

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

せんせーい、個人情報保護法知つてます?

「ええええーっ! す、すごい!」このクラス有名人の身内が2人のいる!」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人! ? やつぱり天才なの?」etc・・・授業中だが、筈の元にわらわらと女子達は集う。

一見、おもしろい光景である

しかし、筈と束さんは

「あの人は関係ない!」

突然の大声。皆は何が起こったのかわからない様子だった

「大声を出してすまない。だが、私はあの人じやない」

そう言つて、筈は窓の外へ顔を向けてしまう。

女子達の興味が削がれた所に先生達の一聲で授業に戻つていた
後で筈に話しかけようと思つた一夏だった

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかつたでしょ？ けど。

あなたに関してはよく解りませんが。」

休憩＝睡眠時間にしようとした刹那と一夏の前にセシリア参上

「まあ？ 一応勝負は見えていますけど？ 流石にフェアじゃありませんもの！」

「なんで？」一夏が首を傾げる

「代表候補生だから専用機でも持つてるんだろ？」

「へー！」

「馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーなと思つただけだ、どうすげーのか知らんが」

それを一般的に馬鹿にしていると、セシリアが机を叩く。うん。煩

い…

「つまり全人類六十億超えの中でもエリー…」

なんか、めちゃくちゃ語ついていたが眠いので寝た。

…休憩時間〇∨ＥＲで寝てしまい、授業開始に先生から出席簿が飛んできただ

お昼

一夏が箸+を誘つて学食へ行つたらしい。置いて行かれたぞ俺正直、楯無さんの料理が食べたいなあ…と、一瞬だけ思った。

ともあれ昼飯はーうん。野菜ジュースだ。学食にでも売ってるかな？ 行つてみる事にした

授業の中で（後書き）

すみませんスマッシュン…中途半端なトコで終わりました。
次回、次次回でセシリアとの戦闘に入れるか、な?

がんばりますよ。m

特訓、頑張れ！一夏b

「お、一夏はつけーん」

見知らぬ女生徒と篠が会話している近くに寄る

「ですでの、結構です」

「そ、そ。それなら仕方ないわね・・・」

なんか人の良さそうな先輩っぽいのが去って行つた

「一夏に篠ー、何があつたんだ？」

一夏が説明するに親切な先輩が一夏をI.S特訓をしてあげよ。と
申し出たが
篠が束の妹で、特訓は結構です。私が彼に教えてあげますよ。それ
では

といふことじりしい。わざは何か怒つてた感じなのに…。よーわから
ん奴だ

「それで篠、教えてくれるのか？」

「そう言つてゐる

「なら刹那も一緒にやろうぜ。」

ん、構わんぞ、と口を開こうとするときの「ひひひ」いつまき

…刹那は怯んだ。じゃない 少し怖いので

「い、いや俺はいいや遠慮しとく」

篠の口つきが元に戻つた。何だったんだ今のは？

「でも刹那もI.Sの事、教えてくれるんだよな？なら一緒にしよう

また篠に睨まれたが逃げる事が出来そうにないので一応OKした

「ぜ

「今日の放課後」

۷۰

むすつとした感じの簫が言つ

「剣道場に来い。腕がなまつてないか見てやる」

「いや、俺はIISの事を……見てやる。」わかつたよ。刹那も一緒に

・・・・・どうあっても俺を連れて行く氣らしい

バシン！

ר' יונה ר' יונה ר' יונה

「ニキ、アリス、おまけに舐められても……」

— 夏の一 本負けの状態である

「エーハーハーで弱くなつてこぬー?」

「駄馬強してたからかな?」

「帰宅部。3年連続皆勤賞だ」

幕が腫然としてるので、刹那は学校の部屋の一つを知りがつ

帰宅部とは何か聞いてみた

「なあ一夏、帰宅部って何だ？」

「マジで？ お前の通りてた学校つて真面目な奴

?

刹那が通つたことのあるのは小学校だけなのでマジで理解していな

い。

「何故、小学校だけなのかはイロイロあったので割愛させて頂こう。
「？結局、帰宅部とは何だ？」
「え、つと学校の部活動をせずに学校が終わると直ぐに家に帰る人の事かな」

そもそも部活の事をあまり知らないので話を聞いても理解不能だった
「？帰宅部の事は解らんが、家に帰るだけの活動なんだろ？」

なんで部活動の事を笄が聞くのか？と聞いてみたら
一夏は昔、道場で剣道をやっていて、中学校でも剣道はおろか、運動もしていないようだから
らしい。つまり

「笄は一夏が弱くなってる事に怒っている？」

そうだ、と笄が目で伝えてくる。いや口で言えよ…でも、
「まあ運動なんて面倒だからなあ…一夏が家に直ぐに帰るのも納得
だ。

それに剣道つて防具とか着けるのダルそうだし」

「…なんだと？」

あれ？笄が怒ってる？なんで？

「おい刹那、今のは笄に」

「そこに直れ！そのフザけた根性を叩き直してくれる！」

直れ！とか言つてるけど、その前に竹刀で襲い掛かつてくるな！

「つー！」

一夏の近くにあつた竹刀を掴み、笄の一撃を防ぐ！
「なにつー？このあ！」

バシバシと猛攻を仕掛けてくる笄。

剣道？何それ？おいしいの？竹刀？堅そうだね。の刹那は防戦を強いられる

2つの竹刀が弾き合って一瞬の隙を見た刹那は「（）」で決めれば
「イツは落ちつくか？」

筈の竹刀を上方に吹つ飛ば あれ？スカッ：

「あまい！」

刹那の竹刀は空を裂いた直後、筈の強烈な一撃が彼の頭へ叩き込まれた

「ツ 「！」

痛え…脳を搖さぶられた感じがして気持ち悪かった

「ふう…」と息をつき、竹刀を収めた筈

「おー…痛い痛い。スゲーな筈、滅茶苦茶速いじやん。それに強いし」

ケロッとした態度に一夏と筈は少々驚いていた

何せ剣道の全国大会優勝者の攻撃を防ぎ、一撃を喰らっても平然としているから。

しかし、周りのギャラリーには
「織斑君と黒時君て結構弱い？」

「IS動かせるのかなあ？」

好き放題言いやがっていた

それを聞き、一夏は「トレーニング再開するか…」と呟いた。

そこに、筈は興が覚めたのか「それがいいだろ」

これから1週間、放課後の3時間を持て（ISと関係なく）にする

と言った。頑張れ！一夏！と心の中で敬礼をしておいた

先程のく一夏、地獄の特訓決定おめでとー事件から自室に辿り着く
ドアを開けると

「あら刹那君。お帰りー」

楯無さんが・・・・・

「ただいま戻りました。いや、てか、なんで下着姿で歩いてるんだ
すか?」

田のやり場に困る格好でいる

「なんでって、自室なんだし大丈夫でしょ?」

「そうじゃなくて人の田を少しは気にしてください」

「刹那くんのえつちい。」

なあ!/?冤罪だ!俺は悪くねえ!俺は悪くねえんだ!……ソレは置
いといで。

「えつちって言われても楯無さんがその格好でいたら否応が無しに
見えます。

何か着てぐだねー」田を背けながらベッドの方へ歩いて行く

「ぶー。仕方ないわねー」

「変な声出さないでください子供じやあるまいし。生徒会長なんで
しょーが」

「むー…そんな事を言つ子にはコレね~」

十指をワキワキと動かしながら近づいてくる…

「あ、あの?楯無、さん?ソレだけは止めませんか?」

「こんなのに耐えられなかつたら来週の決闘で勝てないわよ?」

何で知ってるんですか?ー?と聞く前に止めた。何故か聞く必要は
無さそうだ

「つて、ソレに耐えられなくても俺は勝ちますよーだから止めてくれさーー！」

「解らないわよ～？セシリアちゃんが脇腹を狙つてくるかもしけないじゃない」

「あああ！」
一 絶対 防御で 効きませんては……って、うわ、せめ、うわあああああ

「いやよ、こちよ、こちよ、こちよ」
櫛無さんの操りは數十分くらい続いた

特訓、頑張れ！一夏b（後書き）

短かかつたですね～
感想待つてますー

頑張りますー（・。・）y

「夏の試合、そして・・・

イロイロすつ飛びして6日が経過

おお、今日はセシリアとの決闘の日じゃないかー（棒読み）

「なあ 笹、刹那

「「なんだ? 一夏」」

波乱の学園生活を送る事、約1週間。時間はスグに去つて逝く・・・

「気のせいかもしれないんだが」

「一夏、気のせいだろ? なあ? 笹」

「そうだな。気のせいだろ?」

そう。たつた1つだが、大事な問題が解決していいない

「ISの事を教えてくれる話はどうなったんだ?」

「・・・・・・・・」

「目を逸らすな」

この前の へ一夏クン。特訓、頑張って（笑）へから6日。

刹那は暇を潰す為に一夏の特訓を見に行つていた。

笹は剣道の稽古をみっちり付けてくれた。

ISの事に関しては一切、何一つ行つてない

「いや、仕方ないだろ? お前のIS、無かつたんだし」

「まあ、そうだけど ジやない! 知識とか基礎とか教えてくれてもいいじゃん!」

「ごもつとも、だが? 教えるのダルいし? 感覚でなんとかなるって!」
と刹那は考なぞとなえ中。

筈は視線を逸らす

「目をそらすなつ」

」」」」」」」」

ま、簡潔にすると

一夏の専用機は今だ来ていない。

— 1 —

一夏殺那籌、沈默

一
お
繕
玻
く
ん
繕
玻
く
ん
繕
玻
く
ん

無駄に3度も呼ぶ山田先生が駆け足でやってきた。

転びそうな先生を刹那が落ちつかせる

はいそじてノート

۱۵۷

三田先生はあるある顔が赤くなつて、「ぐ

山田先生はみるみる顔が赤くなつてしゃべらなくなつた。

「（何時まで止めてんだ？一夏も簞も冗談だつて教えてやればいいの！」

「・・・ぶはあつ！ ま、まだですかあ？」

冗談ですから本気にならないでください

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」！？背後に殺気！

言つが速いか、遠くから声が聞こえた瞬間に首を逸らす

ヒュンツ！ チツ！・・・髪の毛が数本、散つて逝った
「千冬姉・・・」一夏が「織斑先生」と呼ばずに叩かれた
・・・なんで俺だけf1 yin go出席簿？（殺傷性アリ）

「ど、ど、来ました！織斑くんの専用ＩＳ！」

遂にお出ましらしい。一夏の専用機が。

ポカンとしている一夏に鬼先生が準備をしろと言つ

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せや。一夏」

「頑張れよ、一夏。俺はお前の後で試合から」

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナの使用時間は限られているからな。

ぶつつけ本番でモノにしろ」「え？　え？　なん・・・」

「――早べ!」「――

一夏以外の声が重なり、ピット搬入口が開く。
その向こうには・・・

そこには、「白」がいた

白。真っ白。飾り気のない。無の色。

その「白」は操縦者　一夏を待つていてる様に感じられる

「これが……」呆然とした一夏が口を開いた

「はい！織斑くんの専用ＩＳ「白式」です！」

「（俺のＨＵとは正反対の見た目だな）」そう感じている内に、一夏はピットを飛び出した

一夏 side

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。また、腰に手を当てたポーズも様

になつてゐる

「（けど、俺にそんな関心は無い）」

鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。その外見は、特徴的な
フィン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士のよつたな気高さ
を感じる。

それを駆るセシリアの手には2メートルを超す長大な銃器
六十口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』が握ら
れている

すでに試合開始の鐘は鳴つてゐるので、いつ撃つても不思議で
はない

「最後のチャンスをあげますわ

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボ
ロの惨めな姿を

晒したくなれば、今ここで謝るといつのなら、許してあげないこ
ともなくつてよ」

そう言ひつて目を笑みに細める。警戒、敵IIS操縦者の左目が射
撃モードに移行

「そういうのはチャンスとは言わないな

「そう？残念ですか。それなら

「

警告！敵IIS射撃体制に移行。トリガー確認、初弾エネルギー
装填。

「お別れですわね！」

セシリ亞の『スターライトmk?』より、エネルギーの弾が射出さ
れた

刹那 side

「（あーあ…武装も何も展開していない一夏に攻撃つて…少しくらい待つてやればいいのに）」

そんな事はセシリアに『届くハズも無く、一夏はひたすらセシリアの攻撃から逃げていた

「（…打鉄を使わせて訓練してやればよかつたかな…？）」必死に頑張る一夏を見て、刹那は少しだけそう思った

「二十七分。持った方ですわね。褒めて差し上げますわ

「そりゃどうも…・・・」

一夏の機体『白式』は実体ダメージが中破。近接ブレードを辛うじて使える程度。

圧倒的に不利な状況だった

セシリ亞の駆るブルー・ティアーズは4つの自立機動兵器が装備されている。

その装備に苦戦を強いられる所、セシリ亞より

「では、閉幕^{フィナーレ}と参りましょ^う」

彼女の右腕が横に動き、命令を受けたビットが一夏に接近してくる

「くつ・・・！」

「左足、いただきますわ

直撃する。そう感じて、一夏は一か八か

「ぜあああああっ！－！－！」

セシリ亞のライフル銃身に正面からぶつかり、何かを理解したよう

に動いて行く

一夏が理解したのは
ガスツー・ビットから穿たれるレーザーを抜け、ビットを蹴りで吹き
飛ばす

「なんですかー！？」

「！」の兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない！しかも　「
一夏のよろびシット落しでセシリ亞のビットは地面上に叩き付けられて
いく

「（やれる。後は集中するだけだ）」
見え始めた勝利に僅かに胸を踊らせた

教師たちのいるピット

「あの馬鹿者。浮かれているな」
千冬が唐突に言つ

「？何故そういうんです？」山田先生が聞く
「さつきから左手が閉じたり開いているだらつ？あいつの昔からの
クセだ。

あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

その場にいた、山田先生と刹那が感想を持つたが、刹那の方が：

「（へえ…流石、姉弟だな）。まさか…ブラッコ」「ヒュン！サ
ツ！ザクウ！」

空飛ぶ出席簿 避ける 壁に突き刺さる出席簿…

「すみませんでした」

「わかれいい」

なんで読心されるんだ？と思つた

刹那が馬鹿やつてる時に試合はまた動いた

獲つた！

一夏がセシリ亞との間合いに近接ブレードを振り下ろす確実に勝利への一撃を前に ヴンツ。

「おあいにく様。まだまだでしてよー。」

ドガアアアツ！

『弾道弾』^{ミサイル}が現れ、一夏へと直撃をした

だが、

「ふん。機体に救われたな馬鹿者め。」

「これは ああ：一次移行か」^{ファースト・シフト}

刹那の言つ通り、一夏のIJSは煙が晴れて姿を示す

試合中の両者ですら驚いている

つまり、この一次移行で先程までの『白』は

一夏専用の『白』と化した

セシリ亞による攻撃が再度始まり、それを交わして進む一夏

その手には一次移行による能力「零落白夜」を発動した「雪片式型」がある

「おおおおおつー！」

最後の一撃を叩き込む 直前、

『試合終了。勝者 セシリ亞・オルコット』

ピットにいる千冬と刹那を除いた誰しもが一夏の敗北に疑問を持った

「お疲れさん。一夏」

「あ、ああサンキュー、刹那…」

「どうして負けたんだ俺？」

やはり本人は理解していないようだ

「織斑、それは後で話す。その前に黒時、次はお前の番だ」「オルコット、連戦だが行けるか?と、伝えると「だ、大丈夫ですわ」と返事が返ってきた

「よし、なら休憩を挟んで黒時との試合まで待機している」セシリ亞に休憩をさせている間、千冬は刹那と2人でピットを出て行つた

休憩時間、刹那とセシリ亞の試合が始る前。

試合開始前に千冬は刹那を連れてピットから出て、話を始めた

「黒時。」

「なんですか、織斑先生?」

「1つだけ守つてもらう事がある」

「なんでしょう?」

「相手は代表候補生。そこの奴とはレベルが違う。だが、お前はレベルが違うなどという次元では無い」

そう。「恐らく」などではなくて、刹那是代表候補生の実力などよ

りも

遙かに上を行く存在なのだ

「……たかがISを動かした時間が人より長いだけですよ」

「……ふつ。まあいい。だが、1つ言つておく」

千冬は冷たい眼光で刹那を見、告げる。「殺すなよ？」

絶対防御があつても、彼には出来る事だ。だが彼は

「大丈夫です。俺は兵器でも人殺しでもない。人、なんですから」

「そうだったな。済まない、いらない心配だつたな」

「いえ、気にかけてくれて有難うござります。安心してください先生」

「解つた。……行つて来い、黒時」

「はい」

そう告げて彼は漆黒のエスを纏いアリーナへ向かって行つた・・・

—夏の試合、そして……（後書き）

さあーようやく次回、刹那君のバトルです！
チート存在の彼を頑張って弱くさせてみます。

感想待つてます（ロード）

彼の戦法。彼の戦闘。

「出て」^{クロガネ}、「忌々しい兵器」

刹那の専用機が姿を現す。

それは、一夏の専用機『白式』とは正反対の色…

漆黒色の『^{クロガネ}鐵』

黒。真っ黒。視線が吸い込まれる様な黒。

全てを飲み込んでしまった。その黒だった

2対の大きなウイングスラスターが特徴であった

ただそこに存在するだけで不思議な感覚を覚えてしまう

武装はまだ展開をしていない

「お~いセシリアさんよ~」

軽い口調でセシリアに話しかける

「・・・なんですか？」

「休憩時間は十分に取れたか？完璧な状態じゃねえのに俺に勝てんのか？」

「ふんつー！あなたに心配されることがなくつてよ」

「そーか。……なら」

「ええ……それでは」

「「始めますか！（わよー）」」

ギュンッ！

セシリ亞の『スター・ライト』からエネルギーが放たれる！

「一夏と同じ戦法じや勝てねえぞ？も少し頭を使えって

「お黙りなさい！」

刹那が攻撃を避けながらセシリアを挑発する

「あなたこそ、逃げ回つてないで攻撃をしてはどうです！？」

「逃げてない逃げてない。自由にフランフランしてるだけだ」

「ふん！わたくしの華麗な攻撃に見とれてしまったのでしょうか？」

セシリアも負けじと挑発する

「それは無いな。いやマジで。つかハッキリ言つて攻撃パターンが單調だぞ？」

「ツーもう許しませんわ！」

「おお怒つた。恐い恐い」

ピック

「・・・なんで刹那は攻撃しないんだ？」

一夏が皆の疑問を口に出す

「黒時くん…なにかするつもりでしょ？つか？」

山田先生が誰に言つたのか呟く

「……あの馬鹿者が」

「千冬ね 織斑先生、なにか知ってるんですか？」

「いや、なんでもない」

珍しく前言撤回をした織斑先生。

「（あの馬鹿者、オルコットの疲労が溜まるまで遊ぶつもりか…？）

半分正解、である。刹那是攻撃をいきなり仕掛けるつもりなど元より無い。全く無い

「ほら！当たらないぞ！？それとも休憩が足りなかつたか？」

「減らす口を…」

「やつは当ててから言いなつ」

ヒョイ。ヒョーイ。ヒョイ。ヒョーイ。ヒョイ

避ける。当

たらない。

ピットにて

「ええい！何故あいつは攻撃を仕掛けんのだ！見ている方が苛々する！」

籌がキレていて、

「なんで避けてばっかなんだ？…まさか、攻撃を仕掛ける事が出来ないくらい

セシリ亞が押してるとか？」一夏が壊れる

そんな事は無いのは誰しもが理解している。

だが、何故彼が攻撃を仕掛けないのか解らない

彼が攻撃を仕掛けないワケ。

それは

「（……よし、『黒月』の攻撃力はもう少しで一定値だな）」

近接用太刀『黒月』は攻撃力が極小な武器であるが、一つの特殊能力がある

それは一夏の零落白夜と同じ、バリア無効化能力を備えている。

しかし『黒月』の特殊能力はエネルギー消費が無い武装。一度召喚させ、その刃に触れるだけで

相手のバリアを消す。それだけ。バリアを消す以外は棒切れ。

だから攻撃力を蓄える為の時間が必要となる。気紛れな意思を持つた様な武器である。

バリアを消してそのまま『黒月』で攻撃しても生身の人間にボール

がボコつて当たるくらい痛い

「（ホントはシールドエネルギーを消費させれば攻撃力も瞬間的に上昇するがな）」

「いい加減にしなさいっ！」・・・これぐらいで十分か？

「わかったよー！こつから攻めてやる。目え瞑んじゃねえぞ！」

「！？」

『イグニッショングースト』瞬時加速並の加速でセシリ亞の周囲を駆ける

刹那の専用機がスピード重視の機体だから。2対の大きな翼があるからこそ出せる速度

「消えた！？」

セシリ亞の視界から刹那の姿が消え、彼女のI-Sから敵機確認と表示され

ハイパー・センサーで周囲を確認する

いた！

と確認したがもう遅い。

それは彼の名前の如く刹那に現れ セシリ亞の身体を傷付けない様に

『黒月』を振り下ろす！

ブルー・ティアーズのバリアが消え、攻撃力が高まつた太刀で切り裂き、

彼女のI-Sより『シールドエネルギー残量0』と表示される。

上からの負荷を掛けられたセシリ亞は地へと落ちて行く

「さやあああああ！」 このままでは絶対防御が無い状態で地に落ちる

「殺すな。」千冬の言葉に「大丈夫です」と答えたからに

は助ける。

イグニッシュンブースト

瞬時加速を使い、空より墜ちるセシリアを

お姫様だつこの形で拾つ

「悪いな……やりすぎた、スマン」本音を告げたが…

「 気絶していらっしゃった

「あ～…後でちゃんと謝つとくか」

『勝者、黒時 刹那。』

試合終了のブザーが鳴り響いた

彼の戦法。彼の戦闘。（後書き）

刹那君の機体

『鐵』と、『黒月』の説明…わからぬでしょ？
上手く伝える術がないので勘弁してくださいな

ついでに、今回は自分で何を書いてんだ？と感じた文で書かれています

感想、待ってます（・3・）。

彼に なん戦えと? (前書き)

眠気！ 疲労！

かなり溜まつてますので駄文の可能性アリです…

彼に ひつ戦えと？

「う…」

ピットの一画にてセシリ亞が目を覚ます

「お。起きたか？」

先の試合 セシリ亞を負かした勝者^{せつな}の姿があった

「いや、ホントやり過ぎた。絶対防御を少しづつ削って勝つつもりだつたんだが、黒月の攻撃力を高め過ぎたみたいでな。傷は無いと思つが大丈夫か？」

・・・今だ意識がボンヤリとして、あまり理解不能なセシリ亞だが彼が謝つている事は理解できた

「?よく、わかりませんが…わたくしは負けてしまったのですわね？」

「一撃で、な。」

ムカツ…彼が少しおちよくなった様に言ったのが伺える

「そう、ですの…」

勝負に敗北したといつの悔しさは余り込み上げない

「一つ、ようじくて?」

「何か?」

セシリ亞が彼 刹那 のISと先程の戦闘に何があつたのかを尋ねようと

「1年1組、黒時 刹那。至急、職員室まで来い。急げ。繰り返す

「

鬼先生…じゃなくて織斑先生からの↙お呼び出し ↘

「・・・なんで?」

「あなた…なにをしましたの？」

「心当たりは皆無なんだが…しゃーない。呼びだされるか…」

刹那は立ち上がり、職員室へと赴く 前に、

「黒時さん」

「何？俺、職員室、行く。NOT行く、死ぬ。」

「いえ、この前はあなたの方の事を挑発してしまって すみませんで
したわ」

何で謝るのか解らずにキヨトンとし、

「ならソレと今日の事はお互い様つて事にしてくれ。俺の方こそ悪
かつたな、さつきは」

「フフッ」

「何で笑つてんだ？」

「そんなに謝らなくても別に氣にしていませんわ。勝負に負けたの
はわたくしですので」

「・・・そうか？それならいいが…」

彼は何とも不思議な人だと思えたセシリ亞だった

ピンポンパンポーン

「 黒時 刹那。黒時 刹那。後、1分以内に職員室へ出頭しろ。
そもそもなぐば 」

「出頭かよ！？やつべえ！？と、それじゃあなセシリ亞！」

彼は全力疾走でピットから出て行つた

「はい。それではまた。刹那さん。

ですが…ここから1分では職員室には到着しないでしょうね」

彼女の言葉は届いたのか、彼だけが知る事となつた

「惜しかつたな黒時。13秒OVERだ」

千冬により呼び出された刹那は3～4分の時間を1分13秒と、驚くべき速さで

職員室へとたどり着いた。

「（わざー）HSの部分展開して飛んでも間に合わなかつたか？…」

躊躇うことなく学園内重要規約を破りやがつた。彼はHSを出しておじ、千冬に怒られたくないらし…しかし

「ん？…先程までピットにいたのだから…セレからでこの時間…」
おや？何か嫌な予感が…

「お前、HSのP-HCを使つたな？」

「ばれちゃつた…。」・・・イイH、ツカツテイマセン」

「本来なら今すぐ『罰を』貰えるのだが…まずは私と話しえおつか」
完璧にバレているが…よし…これはお咎め無しか！？

「ヤッと千冬は笑い、「武術組手でもしながらな」
結局、話しえいという形での罰が始まった

「・・・は」

逃げられない様に首を掴まれ、処刑場へと連行された

「黒時、何故先程はあの武装で戦つた？」

「何故ってヒュン、そりやとつとと ブンツ 終わらせたかった
からで シツ す！」

千冬による猛攻を避けながらの会話…・カオスである？

「あの武装を使えば並大抵の IIS は速効で勝負が決まるがつ！」

あれを使って操縦者に重傷を負わせると考えなかつたか？」

「黒月の威力を低めにして攻撃すればっ！ シュツ 大丈夫だと思つたんです」

「だが、それで加減を見極めれず、あの一撃で終わつたのだろう？ 他の武装の事は考えたか？」

「そう ガッ！ ですが、けど俺の IIS にはっ！ 黒月と防御専用に使う武装しかないんです！」

ピタッ。 猛攻が止まる

「なに？」

「ですから、黒月と防御の武装しかありません。前に話しませんでしたつけ？」

「初耳だ」

「あれ？ そつでしたつけ？ いや、でも攻撃を行ひ武装は黒月だけですよ」

「本當か？」

「ホントですつて。なにか問題でも？」

特に気になる事は無いハズ・・・

「大ありだ、馬鹿者。あの武装は危険だ。貴様も理解しているだろう？」

「そりや、対 IIS 用 IIS 武装なんですし... 当然かと」
仕方がないでしょ？ 僕が作ったワケじやないし

「あの武装 黒月 の使用は禁止する」

「はい？ 僕の唯一の攻撃武装を禁止？ どう戦えと？」

「なんでですか？ 先生だって黒月と同じような力の雪片を扱つてま

したよね？」

「ああ、そして一夏もその能力を持つている」「なら何故ですか？」

「黒月にはエネルギー消費が無いだろ？ 雪片の様にエネルギー消費が

あるのでは話は別だが、」

「何が問題だつてんだ？ ハッキリと書いてくれ、早く！ 僕は体力の限界なんだよ。」

「これから一夏とお前を見に世界各國のIJS研究者などが学園に来るだろ？」

「IJSに？ ですが合法的には見に来る事は難しいハズです」

「そうだ。しかし学年別トーナメントなどで本国のIJS性能の確認の為に来れる。」

「それと同時に他国のIJSの性能の確認を行うだろ？」

「俺や一夏のデータを盗みに来るって事ですか？」

「言い方が悪いが… そつなるな。そこでお前の武装が出てくる。」

「まさか… ああ、黒月の能力… あれは唯一^{ワンオフ}使用ではなく、武装自体が異質なので」

「簡単に、とはいかないだろうが能力をコピーされるかも知れない、か…」

「気付いたと思うが、その武装は絶対に、外部は愚か、誰にも知られる訳にいかない」

「…確かに、こんな物が出回ると口クな事になりませんね」

「理解したか？ 理解したなら黒月は使用するな」

「バツサリ。反論など聞かない。そんな言葉だった

「もし… もしも俺が黒月を使って戦闘をしたら？」

「信頼はしているが、そつだな…それで相手に怪我を負わせる、又は相手を死なせる事があるその時は」

続く言葉は刹那が絶対に黒月を使わなくなる言葉だった…。
「（俺の弱いところをよく知つてやがる…でも俺は人として生きる為に黒月を使わない様にしないとな…）」

彼に なん戦えと? (後書き)

刹那くんの武器に使用禁止令発令!
さて、今後はどうやっていけるか考えて無いや
頑張ります(ーー)ゞ

感想待つてます

ふうー…。黒月の代用武器、か。うーん
そーだ！黒月の変わりに新しい武装でも用意は…時間かかるしなあ…
つーか…嫌だ。黒月以外は使いたくない
一瞬、「ぐつどあい」が浮かぶが、意味を成さない。

そして刹那のHS『鐵』の武装を作るには時間がかかる
何故ならば

「（あの天才と『鐵』を作った所でしか『鐵』に適応する武装は作
れないし）」

はあ～…深い溜息を零していると、背後に忍び寄る悪意の気配ッ！

「わっさから溜息ばっかりだから　　つりや。じーじゅじゅ。こ
ちよ。こちよー」「

「つて、ちよ、やめ、こきな、あははははー…」

楯無が溜息ばかりで気になつた刹那の気分を変える為

いや趣

味の操りにより彼を苦しめた

「楯無さんーもつ操るのは止めるつてアナタは何回言つたんですか
俺に！？」

かれこれ1週間の間、彼は同室の楯無に何十回以上、操りを受けて
いた

そして「もう止めてくださいよー？」涙目の中は最後にそう呟く
が聞いてもらえないのだ

「そんな約束、覚えて無いわよー」その繰り返しで次回の操りにな
つていいく…。

現在、悪魔の様な行為から解放された彼は契約書でも書かせてやろう。破つたら部屋から追放しよう。
と考えてみて 寝た。不貞寝した。黒月の事は今度考えよつ……

一夏の敗北。セシリ亞の一勝一敗。刹那へ『鬼との組手』。あれから翌日。

昨日、セシリ亞に負けた一夏は気合いを入れ変えた様ないい表情であつた。

その対象となる様に刹那の表情は暗いモノであつた……
しかし、それは朝のHRが始まるまで……

一夏と刹那、2人の顔は先程と逆の表情に変わる事となつた
「では、1年1組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がりで
いいかんじですね！」

「先生、質問です」手を挙げて発表。おお、偉いぞ一夏
不思議な事にクラス代表戦に敗北した彼がクラス代表となつていた

「はい、織斑くん」

「なんで俺がクラス代表になつてるんでしょう？」

「それは……」

「あ、そーだ一夏。クラス代表、お前に譲るから。ガンバレ！」

一夏の後ろから声が聞こえる

「は？」

「いや、俺はクラス代表なんてメンド……じゃない、相応しい人間が
なるべきだつて
思つたんだ。」

「（刹那の奴！面倒だからって俺に代表の仕事押しつけやがったな！？）」

そう、刹那が着任する筈だったクラス代表は昨日の夜

『刹那くん、クラス代表就任おめでとー』

楯無によるお祝いの言葉がかかる

『クラス代表？なんでしたつけソレ？』

『何つて、今日はその為に試合だつたんでしょう？』

『そうだつた気がしますねえ…すっかり忘れてました。で、代表つて何をするんですか？』

『こひら。先生の話はちゃんと聞きなさい』

『すみません・・・で、代表の仕事つて？』

『生徒会の開く会議や委員会などへの出席などよ』

『ふむう…それなら』

メンドーだから一夏に押しつけてやるつと…

思い立つたがスグ行動。メンドーな事をしたくない為にも彼は職員室の山田先生へと「クラス代表は一夏に譲ります！俺より一夏が適任ですっ！失礼しました」

セシリ亞の部屋 天蓋付きのベッドがある 行き「クラス代表つて一夏に決定な！

んじゃバイバイ！」一方的に伝えていたが伝わっていたようだ

「黒時くんが代表でも私たちは構わないけど、織斑くんでも構わないよ」

「折角、黒時くんに任されたんだから織斑くんガンバってね

「このクラスには男子が2人もいるから貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。

「一石二鳥×2だねつ」おい、情報料の一部は俺にくれよ？一夏に代

表、譲つてやつたんだし

バンバンと机を叩き、千冬が口を開く

「静かにしる。クラス代表は織斑 一夏。依存は無いな」

はーいと（一夏を除く）クラス全員が元気よく返事をしたのだつた
「（うん、団結力つて大事だよな！いやあ～ホントに一夏、代表オ

メテー）」

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらひつ。織斑、
オルコット、黒時。

試しに飛んでみせろ」

四月の下旬、桜の花びらが全て散つた頃。

刹那たちは鬼教官 千冬 の授業を真面目に受けていた

「早くISを展開しろ」

ISの待機状態は操縦者の体にアクセサリーの形状でいる
白式の待機状態は右腕ガントレット。セシリアは左耳のイヤーカフ
ス。

刹那は首から下げる・・・ネックレスの先にミニチュアサイズの黒
月。

イレギュラー2人はアクセサリーではない。防具と武器である

「織斑、オルコット。黒時はもう展開し終わつたぞ」

一夏は右腕を突き出し意識を集中する

「（確か右腕を突き出すポーズが一番集中できるんだつけ？）」

クラス代表戦より放課後の時間を使い、一夏と刹那は偶に特訓をして
いたのだ

全員分の展開が終了し、千冬より「飛べ」との指令が出され
言われた後のセシリ亞と刹那の行動は素早く、急上昇、遙か上空で
制止した

「何をやつていい。スペックでは白式と鐵はスピードは同じだ。^{ブルーティアーズ} Tより上だぞ」

一夏がおぼつかない飛行で2人の元へ飛んでくる

「一夏さん、自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ
? そうでしょう刹那さん」

「そうだな、自分に合う方法を見つけた方が賢明だな。」

「なら刹那はどんな感じで飛んでんだ?」「ん?なんとなくだ」

・・・ますます理解不能になりそうな一夏だった。

「織斑、オルコット、黒時、急降下から完全停止をやれ。目標は地
表から10?だ」

「了解です。刹那さん、一夏さん、お先に」

「お。よし俺も行くか。一夏、先行つてるぞ」

先に降りて行った2人は難なくクリアした 通信回線より「多分、
地表から10mでなく、目標から1?と8?の誤差があると思いま
す」刹那はミリ単位まで確認したらしい…細かいなっ! らしい
「うまいな2人とも。刹那は細かいな…よし、俺も行くか」

一夏が集中し、ロケットファイアーガン噴出するイメージを思い描き
急降下・・・

ギュンッ!

ズドオオンッ!—!!

「一夏?地面に着いたけど、そりゃ墜落だぞ・・・?」
「馬鹿者。誰が地上に穴をあけろと言った。」
「…すみません」

体を起こした一夏に簫が近寄り、

「情けないぞ、一夏。昨日あれほど教えてやつたらうつ」

「簫…一夏が失礼な事考えてやがるぞ」

「解つていい。まったく…大体だな一夏、お前と喧嘩は

」

簫の愚痴が始まるが、

「織斑、武装を開ける。それくらいは自在にできるだらう」千冬
に遮られる

「は、はいっ」

彼が周りに人がいないか確認し、腕を突き出す
パアアアと光の粒子が集い雪片式型が召喚された

「遅い。0・5秒で出せるようにしろ」

怒られていた…呼び出し練習していたが、確かに実戦でのス
ピードは遅すぎる

「セシリ亞、武装を開ける」「はい」

彼女は一夏よりも素早く、狙撃銃くスターライトマークを呼びだ
した。のだが、

「おい、セシリ亞…俺に銃を向けるな」

「す、すみませんでしたわ刹那さん」

「黒時の言つ通りだ。横に向かつて仲間でも撃つ氣か?そのポーズ
はやめる。いいな?」

セシリ亞も怒られていた。その後、近接用の武装呼び出しの遅さに
また怒られていた。

2人の専用機武装を出した後は刹那の番だが、

「黒時…あの武装を開ける」

やはり千冬は黒月の使用を認めていないらしい。彼女の目が、強く語っていた

「（でも、俺には黒月が必要だ。誰が何と言おうと、使わない訳にはいかないんだよ…）

そりや、人を傷つける為に使わねえけど…俺が気をつけて使えば大丈夫だろ。

今度、黒月の使用制限の事で話しあってみるか。」

彼は黒月に何か特別な思いがある様だった

使用禁止は困るから…（後書き）

うん。なんとか黒月の事とか考えたよ！
でもそれは次回から…：

ヒロインは今のところ樋無です。
リクエストなら年上の人物がシャルだけです（・・・ゞ

私は年上好きであるが、シャルだけは許せてしまった人間だったの
です
守備範囲が広くて広くて

感想待つてます

さて、想に立つたが向いやう（前書き）

後半の方がグダグダかもです。

よし、思い立つたが何とやら

「ふうん、じこがそなんんだ・・・」

夜。IS学園の正面ゲート前に…
サイドアップテールの黒髪が夜風になびかれている少女が立っていた。

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「「「おめでとー！」」「
ぱん、ぱんぱーん。クラッカーが一夏を田掛けて乱射される…。結構な量だから重そうである

ちなみに今は夕食時の自由時間。場所は寮の食堂。1組フルメンバーが揃っていた。

「…………」

一夏は、心底めでたくない…なんだこのパーティーは。と、溜息を零していた

彼がチラリと壁を見る。『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と紙がある…

「いや~、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」「ほんとほんと」

「ラッキーだつたよねー。同じクラスになれて」「ほんとほんと」
先程から相づちを打つていてる女子2組だった氣もするが、気のせいだろう

「つたく・・・」一夏はクラス代表を押しつけてきた張本人の行動に目をつけた

「ん？」盛り上がってる女子達と一緒に楽しく会話しながらお菓子を頬張ってる刹那が顔を上げた

「どうした一夏？ 黒時くん、お菓子ビーぞ！ ありがとね（
）」コツ。代表就任よかつたじやないか

「私のもビーぞっ！ サンキューな（ニッコ）。オメデトさん
「・・・・・はあ…負けたのは俺だからな…頑張るか、クラス代
表」

「まあ困った事があれば多分、手伝つてやるよ」

刹那は一夏を手伝う事は無さそうであった

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生2人に特別インタビュー
ーに来ました～！」

「オーと、女子一同が盛り上がる

「あ、私は2年の黛 薫子。ようしくね。新聞部副部長やつてま
す。はい名刺」

受け取った名刺に一夏と刹那は「（|画数の多い漢字だな。書く時
タイヘンだろ）」「

「ではまず黒時くん！セシリ亞ちゃんに勝つて織斑くんに代表を譲
つたのか、コメントを」

「レコードが近いですし、何故に無邪氣な目をするんです？…えつ
と、

試合に勝てたのは一夏の後で戦つたからでしょうか。セシリ亞は強
かつたですよ？

もし俺が先に戦つてたら負けてたかもせんし」

彼は流石に、最初から勝負になつてなかつた。とは言えなかつたの
でテキトーに答える

「えー本当？ここは セシリ亞を負かすのは俺だけだ、とかさあ…
「意味がわかりません。はい、次は一夏だぞ」

もつと「メンスト」が欲しそうな黛先輩の視線を一夏へと向かせる

「じゃあ織斑くん！代表になつた感想どうぞ～！」

「えーと、まあ、なんといつか、がんばります」

「えー。もつとここの「メンスト」ちょうどいいよ～。」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！じゃあまあ、適当にねつ造しておくからここと
して」

・・・情報で成り立つてこの世界はひつして毒された逝くのか…と
刹那は感じた

「ああ、セシリ亞ちゃんも「メンスト」ちょうどいい

先輩の近くに控えていたのだから、髪型のセシートは写真対策っぽくなつてゐ

「口ホン、ではまず、じりじりわたくしがクラス代表を一夏さんこ
したかと」

「ああ、長そうだからこいや。『真だけちゅうだい』
そもそもセシリ亞が一夏に譲つたのでなく、刹那の一方向的な決定だ
つたが？」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いこよ、適当にねつ造しておへから。ん…よし、黒時くんに惚
れたからってことにしどく」

「なつ、な、ななつ…！？」

急に話を振られた刹那だが、

「そんな馬鹿な。何を言つてんですか？」

バッサリ。言いきつた彼をセシリ亞が睨む。

「はいはい、とりあえず3人で並んでね。写真撮るから。注目の専
用機持ちだからね」

先輩の指示通りに並び

「それじゃあ撮るよー。 $35 \times 51 \div 24$ は～？」

なんですか、それは。

「え？えつと… 2？」 「74・375」

刹那が即答正解。てか一夏、奇数がある時点で2は違つだろ普通

「黒時くん正解」

パシャカリとシャッター音が鳴る。って、すごいな。

見事にクラス全員が撮影の瞬間に集結していた。

「あ、あなたたちねえ！」

「まーまーまー」

「セシリ亞だけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になつていいいじやん」

「ねー」

口々にセシリ亞を丸めこむように女子達が囁く。

その後、10時過ぎまで続いた後、一夏と冂の2人と別れ、刹那は自室へと向かうと

「（ん？あれは…鬼教師じゃないか）」

寮の見回りだろうか、千冬がいた。

「（そーだ、黒月の事で話があるんだ）」

彼は禁止令が出された武装について考えた話があるみたいだ。

「織斑先生」

呼ばれて振り向く織斑先生。

「ん？ああ黒時か、何の用だ」

「ええ…ここでは難しいので移動しましょー」

「？」

「織斑先生、俺のI.S武装『黒月』の使用禁止を止めてもうれますか？」

「その話か…何故だ？」

「俺に必要なモノだからです」

「理由を答える」

「理由？言つ必要はないだろーが。解つてんだろ？」

「お前・・・」

刹那の言動に綻び^{ほころび}が生じる。

「アンタ知ってるだろ？黒月にはやつてもうつ事がある。」

このI.S学園に入る前の刹那に関係している事らしい。

「…それは知つていい。だが、今は必要ではないはずだ」「そう。刹那が行おうとしている事の時以外は黒月は不必要。しかし、「えーっと…落ちつかないんですよ。持つてないとね」寝る時に又イグルミが必要みたいに言つ

正直、答えになつてない。というか、意味がわからないのだが：千冬は刹那の成すべき事を知つてるので深く追求するのを止め、深い溜息を吐いた

「だが、やはり使用を許可はしない」

「そう言つと思いました」

なら何で話を持ちかけた？と思わずに入れないと

「？お前の考へてゐる事がわからないぞ」

「んーと、俺は黒月の代用なんて作れませんが改造くらいなら可能

かと「

「改造だと？あの武装の何を？」

「前にアンタがエネルギー消費があるなら大丈夫、って言つから改造してエネルギー消費の機能をつけてみる」

なんとも簡単に話す彼に

「確かに、お前の言う通りになるならば唯一^{ワンオフ}使用と誤魔化せるが…お前に出来るのか？」

「俺一人では無理です。同室の生徒会長さんに手伝つてもらいたいですね」

楯無さんの事は理事長の十蔵さんに聞きに行つた。彼女は1人でISを完成させたと

「更識か…確かに任せても安心はできる、か…更識に相談をして許可を得れたら改造をしろ。

問題が改善されたら使用を認める」

千冬に告げられ刹那は即座に行動を起こしに同室へと向かった

はじ、思ひ立つたが向ひやう（後書き）

精一杯、考えての結果です（Ｔ－Ｔゞ
温かい田で見てください。

感想、待っています。

ヤカンド登場（前書き）

グダグダになつてゐると・・・

セカンド登場

「あ、おかげ」

楯無さんがベッドに寝転がり、下着姿で雑誌を呼んでいた。だが刹那は特に何も言わない事にしていた。

（服着てくださいにて言うたひに見え
も困るし…言つても聞かないだらうし…）

「寒つ葉」。ひと箇所に詠があるんでナビ。

「実は

先程の会話の内容と例の武装について話してみた

… まずは糸那くんの卫衣を見てから考えましょ」「

2つ返事で承諾をしてくれた樋無さんだった

「織斑くん、黒時くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

轉載於《田期刊》

今はまだ4月だ。
何故、入学ではなくて、転入なののかは一夏も疑問を持ったようだ

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「心」

そーだ代表候補生といえば。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしり」

我がクラスの英國代表候補生、セシリ亞・オルコット。今朝も腰に手を当てたポーズが決まっている。

「このクラスに転入していくわけではないのだひつへ騒ぐ事でもあるまい」

おおう、一夏の幼馴染こと篠が窓際の席から来ていた。女子とは音も気配も無く動けるのかつ！？

「おい一夏、転入生の方より来月のクラス代表戦を気にしどけよ」

「そりや、転入生も気になるけどわあ」

「そうですわ、刹那さん。クラス代表戦に向けてより実戦的な訓練をしましょう。

なにせ、専用機を持つているのは3人だけなのですから

「だつてさ一夏。代表なんだから頑張れよ？」

「まあ、やれるだけやってみるか

「やれるだけでは困りますわ！」「そつだぞ。男たるもの弱氣でどうする」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表つて1組と4組だけだから、余裕だよ」

クラスの士気が高まっている所に

「…………その情報、古いよ」

「ん？教室の入り口から声が聞こえる

「2組も専用機持ちが代表になったの。そう簡単に優勝できないから」

腕を組み、ドアにもたれていた少女がいる。

「鈴・・・・？お前、鈴か？」

一夏が声をかけていた。知り合いかな？

「そうよ。中国代表候補生、鳳 鈴音。今日は宣戦布告に来たつてわけ」

なんか、無駄に格好つけてる奴のツインテールが左右に揺れた。

「何格好つけてるんだ？ すげえ似合わないぞ」

「んなつ・・・！？ なんてことを言うのよ、アンタは！」

先程の態度と違い、かなり碎けた話し方に変わっている。

「おい」あ、織斑先生じゃないですか。そこのツインテ少女、後ろに気を配れ

「なによ！？」

バシンッ！ 聞き返した鈴に痛恨の一撃。クリティカルヒットだらうか。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生だ。さつさと戻れ、そして邪魔だ。」

「す、すみません・・・またあとで来るからね！ 逃げないでよ、一

夏！」

「さつさと戻れ

「は、はいっ！」

・・・・・嵐の様な騒ぎを起こした鈴は猛ダッシュで2組へ戻つて行つた。

「なあ、今のつて一夏の知り合いか？ 騒がしそうな奴だったが

「その話は後だ。馬鹿者」

バシンバシン！ 何一つ悪くない一夏と刹那が叩かれた。

「（うう…音速LVの空飛ぶ出席簿よりは怖くないが）コッチの方がレベル

痛え）」

千冬からの攻撃は結局、危ないと学ぶ刹那であった

授業の終了、クラスメイトを引き連れ学食へレッスンGO
しかし、どーん。学食入り口に立ち塞がるは先程の鈴。つと一夏に
話なら俺に関係なし！

「ちょっとどいてくれる？ 食券がオバチャンに渡せないんだ」
「さうだぞ鈴。普通に通行の邪魔だぞ」

「ひ、ひるさいわね。わかってるわよ」

食券をおばちゃんに渡し、日替わり定食をG E T。席へと移動する
刹那は一夏より少しばかり離れて食事。同時に『鐵』の武装調整を行っていた

「（後で一夏に何があつたか聞けばいいか）」自分のHSUの事に興味を向けていた

放課後の教室。

「ああ一夏、俺は今日特訓に参加できないから」
学食での事柄を聞いた刹那が言つ
「何があるのか？」

「ちょっと用事が、な

「了解。んじやーな」

刹那は楯無の待つピットへと向かつた

「すみません、遅くなりました樋無さん」

「構わないよ。早速刹那くんのISを出してもらおうかな」
樋無に言われ、即座に展開。『鐵』のデータを呼びだした
「これが刹那くんのIS…それで? 問題の武装はどれかな」

「これです。この太刀。黒月です」

黒月のデータをまじまじと見る樋無。

それから一息ついて、

「私の意見を言つ前に刹那くんの意見を聞こつかな」

「そうですね、意見と言つた問題点は…黒月は俺がISを展開していない時にエネルギーを蓄えているんです。待機中の鐵から

「それはどうゆうこと?」

「IS待機状態の時に『鐵』と同時にエネルギーを貯めているんです。俺の意思に関係なく。そしてその

エネルギーと、黒月の材質ですかね。それらが交わってバリア無効化能力>が発動するんです。」

「刹那くんが発動させていないのに?」
ええ。と頷き、説明を続けた。

つまり

・黒月は『鐵』の待機状態にエネルギーを蓄えている。

・蓄えたエネルギーと黒月を形成する特殊な材質が交わり、バリア無効化が発動

・改善点は、黒月の勝手なエネルギー泥棒を止める事。
バイパス

この問題を解決する事により黒月使用時にエネルギー消費が行われる

「 つて事です。」

「 ふむ。なら何処を直すのか解つてるんだね
「ええ。1人では難しい所もあるので樋無さんに手伝つて欲しいん
です」

「わかつたわ。なら早速始めましょ~う?」

「ありがとうございます樋無さん」

「うんうん。樋無おねーさんに任せあれ
2人は夜まで改造に勤しんだのだった・・・

セカンド登場（後書き）

主要キャラが全員出るのほこりの事や、
なんとか…頑張ります（ゆめ・）ゆ

感想、待ってます

彼は健全でした（前書き）

短めになりますた

彼は健全でした

最つつつ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて男の風上にも置けないヤツ！
犬に噛まれて死ね！

何処からかそんな声が聞こえた気がする。

黒月の改造を今日は終え、樋無さんには先に部屋に戻つてもらい、刹那は『鐵』を片づけて自室へ向かっていた

「（ふう…まだまだ黒月には時間かかるだらつな。樋無さんが手伝つてくれて助かった）」

思つた様に改造が進まずにいるようだ。

「（数週間くらいかかるかもな…）」

ドンッ。刹那が歩いていると誰かにぶつかった。

「お、つと…スマン。だいじょ…つて、お前は」

一夏の幼馴染、鈴だつた

「いたた…」

頭を打つたのだろうか、頭を押さえていた。

「危ないでしょーがーさつやどぞきなさいよー！」

「ん？スマン。どいてもいいが、この先に用があるのか？こんな夜遅くに…」

「あんたに関係ないでしょー！」

まあ…関係無いし興味も無い…。ならなんで聞いたのかね俺は

「ああそうだな。それじゃ。見回りの織斑先生とかに見つからないようにな」

「う・・・」

今、露骨に嫌な顔をしたな」「イツ。朝の一撃を思い出したか？
「ま、何処に行くのか知らんが夜遊びはそこそこにして、早く寝な
さい」

「あんたはオカンか！」

「オカン？ おかん？ やかん… あかん…」

「あんた今、つまんない事考えたでしょ？」

「つまらない？ ふと、頭ん中に思いついただけだ。てか心ん中を読むな

「一夏と同じレベルね」

「はあ。と溜息を吐かれた。一夏と同じレベル？ 失礼な。

「つて、そーいや一夏の幼馴染なんだってな。えっと」

「鳳 鈴音よ。なに？ あんた一夏の事知つてんの？」

「あ、俺は黒時 刹那だ。知つてる… てか今日、学食で一夏と一緒にいたの見なかつたのか？」

「そういうばいいたわね… つて、なんで男のあんたがいんのよ？」

「知られていなければ普通の反応だろう。一夏がISを動かせるつて話題になつた時、俺も

『織斑くんが入学するから、ついでに君も極秘で入学して来いバー
力。』

つて俺の事を知る、じく僅かな関係者から強制に入れられたつけ

「一夏みたいにISを動かせるから」

「ふうん… そうなんだ。まあいいわ

あんまり興味が無さそうである

「そつか。俺は部屋に戻るから。あんまり夜遅くに出歩くなよ~」
正直、帰つてシャワー浴びたいし。

「はいはい、わかつたわよ。それじゃあね
鈴は俺の横を通りて行った。

「ペットに用事でもあつたのかな?」

鈴が何をしに出歩いているのか解らなかつた。

「ただいま戻りました」

「あら刹那くん。随分遅かつたね」

「ええ、少し話をしてまして」

ふうん、と言ひ櫛無は話を変える

「とにかくで刹那くん、あの武装なんだけ改造成するのに時間がかかるわよ?」

「でしようね。俺の見る限り、数週間は必要です」

「なら 櫛無お姉さんは数週間も忙しい中、刹那くんを手伝うのね」

「ああ…生徒会長だから生徒会の仕事もあるのか…。」

「すみません、忙しい中」

「私は生徒会活動で疲れてるの」

「だから感謝してるじゃないですか。 櫛無さんが忙しいのは解つてますよ」

「と詫びの事で、」

・・・唐突に何を?

「何ですか?」

「刹那くん」

「はい?」

「私にマッサージをしなさい」

意味がわかりません

「だから、私は生徒会活動で忙しい中、刹那くんの手伝いをしているの」

ええ、さつきから言つてますね。

「疲れている私の体にマッサージを頼んでいるの。刹那くんに

「・・・俺はマッサージの仕方なんて知りませんよ。やつたことないですし」

「んふふ、刹那くんを知つてる関係者は『人体のツボとか急所とか知つてますのでマッサージをさせてみたら最高でしたよ』って言つてたわよ?」

・・・・昔、人体の弱点・ツボなどを覚えさせられ、その知識を元に俺の知り合いに

強制的にやらされた記憶が浮かび上がる。

「・・・なんで樋無さんが知つてるんですか?」

「あら、刹那就くんが私の事を調べた様に、私も同じことをしただけだよ」

裏の世界は相手の事を探る事から始まる。

理事長や情報屋を通じて樋無さんの事を危険人物か、どんな人物か、調べたつけ。

その反対の事をされたまで、か。

「(いや、樋無さんにマッサージ?色々とマズイ氣がする。スタイル抜群だしなあ、この人)」

「あ、エロい顔」

「してませんてば!」

「なにせや〜。」

何故だらつか、櫻無さん^{さくらむ}に反抗すると魔の十指^{マジハチ}が発動されそうである。

思い返すだけで背筋が凍る・・・

「わかりました…けど、何か穿いてください。下着だけは馴染^{なじみ}です」

「刹那くんのいiez」

「なら止めましょう」

「えー。それはひどいなあ。じゃあ何かズボン的なもの穿いてくるわね」

是非、やつしてください。俺がどれだけ田の向け場に困ってる事か・

・

「パンツじゃないから恥ずかしく

」

「パンツですからね」

本当に勘弁してください。名称なんて関係なく、パンツに見えたらパンツです。

「これならいいーい？」

見せつけてきたのは、ヒップラインのくつきり出たスペツツだった。

当然、下着のラインも浮いている

「(やつきとあんまり変わってないじゃないですか…)

「あ、Hロゴ顔」

「だから…してません…」本当に困ってるんですよ?

「まあ、とうあえずよろしくね

「はいはい…」

ベッドに転がる櫻無さん。反論する気力の無い、刹那。

「じゃ、はじめますよ」

「ん。お願い。今より美人さんになれるよ！」としてね
「（ハードルが高すぎるでしょ！）」
むにゅっ。

（足の段階でこれですか・・・）

脂肪の柔らかさではなく、しっかりと筋肉を感じられる。
「ねー、早くお尻～。すわってばっかりでこつてるの」
「はあ・・・」流石にお尻には抵抗があるが、

無の境地を目指し、刹那は樋無のお尻に手を伸ばす。
むにゅう。

「・・・・・」

柔らかい。そしてかなりのボリュームである。

「刹那くん」
「はい」
「鼻血でてる」
「・・・はい」

彼は健全な青少年であった

彼は健全でした（後書き）

感想、待っています

ぐだらない事考えて悪いかい？（前書き）

出来があまりよくないかもしません・・・

ぐだらない事考えて悪いかい？

5月。

刹那が楯無さんと黒円を改造し始め、数週間。一夏が鈴を怒らせたらしい。と耳にした。クラス対抗戦の日程表が張り出された。

そんな事があつても刹那は今田も引き込もう。否、改造をする筈だった。

「で？俺は忙しいんだけどよお、一夏くん？」第3アリー・ナ・ペッ

トへ向かう中

「いや刹那じやないと困るんだ」

「なんで？」

一夏が口を開けつつあると・・・

「ふん。中距離射撃型の戦闘法（メンツク）が役に立つものか。第一、一夏のISには射撃装備がない」

「それを言ひなら篠ノ之さんの剣術訓練だって同じでしょ。ISを使用しない訓練なんて、時間の無駄ですわ」

「な、何を言ひつかー！剣の道はすなわち見といふ言葉を知らぬのか。見とは

「

：成程。理解した。

「2人がこんな感じだから練習にならない、と」

「ああだから刹那に練習相手を頼んだんだ」

「丁重に断」

待てよ？白式の零落白夜と同じ様に黒円を改造するんだから白式の能力を

確認する良い機会じゃないか。

「いや、やるが。田式と鐵で模擬戦しようが」

「ホントかー? なら着いたら

「

始めよ! と続ける瞬間。

「聞いているのか、一夏! 」

「刹那さんも剣術の特訓は無駄だと仰ってください」

「俺は聞いてるっての! 」

「てかセシリアー! 僕に話を振るんじゃない! 」

騒がしくも Aピットのドアの前に着き、OPEN

「待つてたわよ、一夏! 」

ピットには腕を組み、立派の鈴がいた。

一夏と鈴に何かあつたらしいが、鈴は不敵な笑みを浮かべている。
「で、一夏。反省した? 」

「へ? なにが? 」

「だ、か、ら、つーあたしを怒らせて申し訳なかつたなーとか、

仲直りしたいなーとか、あるでしょうが! 」

「いや、そう言われても… 鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんたねえ… ジゃあなたに、女の子が放つておいてつて言つたら放つておくわけ! !? 」

「おう。刹那もそうだろ? 」

「いや? 放つておいてつて言われたら逆に放つておきたくなこと思つ」

「

「あんたはよく解つてんじやない。一夏つて… ああ、もうつー焦れたよつて頭をかく鈴。ああ… 髪の毛が飞ばにならぬ。女性は髪が命とか何とかつて言つだろ。女性は

「謝りなさいよ。」

一方的に鈴が謝罪を要求するが、一夏は素直につんとは言えない。

「だからなんでだよ！約束覚えてただろうが…」

「あつきてた。まだそんな寝言言つてんの！？」約束の意味が違うの

よ、意味が！？

意味が？豚を使った沖縄料理か？あれはミミガ。

「ぐだらないこと考へてるでしょ！？」

どうやら一夏も刹那と同じ事を考へたらしい。
と、まあ鈴との痴話喧嘩も長引きそうなので密かに鐵の調整をして
おく

「（ふむ…今日は樋無さん無しで改造、か。大変だろくな）」

実際、刹那が全て黒月の改造をしているのではなく樋無に半分を任せ
ているといつても過言でなかつた

「（いやあ一樋無さん、黒月の5割くらじ任せひやつてスミマセン）」

樋無がそれほど優秀であると、刹那は感じて任せたのだ。
まあ、彼が樋無を信頼している証拠もあるが…

「つるわこ、貧乳」

不意に一夏の声が聞こえる。そして発言した言葉が危険だと、彼の
頭が告げた。

それは的中する

ドガアアツンッ！…！

爆発音、衝撃で部屋が揺れる。鈴がIFSの部分展開で右腕をIFS装
甲化させていた

「い、言つたわね…。言つてはならないことを、言つたわね…」「誰が見てもヤヴァイ。そう、本気で怒つている。

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かつた。すまん」

一夏による謝罪があるが、

「今の『はー!』?今の『も』よーいつだつてアンタが悪いのよ!」

無茶苦茶な理由だが、一夏に反論の余地は無いだろ?。

それから鈴は、鋭い視線を一夏に送つてピシトから出て行つた

「・・・一夏」

「ああ」

「謝つとけよ?」

「・・・ああ」

一夏と特訓最中に白式のデータをこいつそりパクつ・・・閲覧したり、参考になるデータを盗・・・コピー?したりした。
しかし、白式には黒月に必要なデータはあまり無かつたのだが…。
一休みあるつもりで自室へと戻つて来た刹那がドアを開ける

ガチャ

「お帰りなさい。」飯にします?お風呂にします?それともわ・た・し?」

「スミマセン!部屋間違えましたっ!」

おかしい。樋無さんに似た人が変な格好をしていた。あんな不思議な趣味の人ヒトがI.S学園にはいるのか…

一度、学生寮を全力疾走で出て、再度入る。さつきのは偶然間違え

ただけだ。自室の場所を間違えたんだ。さつと。さうに違いない。

ガチャ

「お帰り。私にします？私にします？それとも、わ・た・し？」

「なにやつてんだああああ！？」

敬語を使う事さえ忘れて叫んでいる刹那。

「何、つて裸エプロン？」

「なんで疑問形!?俺は何でそんな格好してんのか聞いたんだ！」

「まあまあ、そう言わずに」

「答えるよおおおー！」

彼のキャラがかなりブツ飛んだ。

「はい、刹那くん。落ちついて。深呼吸」

すー…はー。すー…はー。

「楯無さん。何でそんな格好してるんですか？」

冷静になつた彼は疑問を投げ掛ける。何事も即座に対応できるのは良い事だ

「たまたま発見して、ね 刹那くんを驚かせようと思つて」

この人の考えでこら事を理解できる奴はいるのか?いや、俺はいいな
いと思つ。

「楯無さんには何処から電波でも飛んできっこりんでしょうね、
きつと」

ついつつかり、思つていた事を口にしてしまひ。ああ…これはオワ
タ…。

「むひ。年上を小馬鹿にする子には……」うだ…」

結果、楯無のくすぐり30分コーナー wuth 刹那。の始まりであ
つた

ぐだらない事考えて悪いかい？（後書き）

感想、待っています

めごめこ……。鹽だねへ。(漫畫)

おじおじ…。嘘だろ？

クラス対抗戦^{リーグマッチ}当日、第2アリーナ第一試合。

初戦をする一夏と鈴。

刹那、筠、セシリア、山田先生、織斑先生はピットにて試合開始を待っていた

2人の会話が始まる。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

「一応言つておくけど、IISの絶対防御も完璧じやないのよ。シリードエネルギーを突破する

攻撃力があれば、本体にダメージを貫通せられる」

鈴の言つ事は脅しでは無く、本当の事であった。刹那のIISにも、それは当てはまる

『殺さない程度にいたぶることは可能である』

ところが事実は変わりようがない。

試合開始のブザーが鳴る。

ガギィンッ！！

鈴による初撃を防ぐ一夏。直後、初撃を防いだ筠の一夏は飛ばされた。

見えない何かに吹き飛ばされた様に

「なんだあれは・・・？」

リアルタイムモニターを見ていた筠がつぶやく。

それに答えたのは、同じくモニターを見ていた刹那であつた

「『衝撃砲』だろ。空間に圧力をかけて砲身の生成、余剰で生じる衝撃を打ちだす。」

セシリ亞と同じ第3世代型兵器だな、と彼は付け足す。

猛攻を避ける一夏を見ている筈はすでに聞いていなかつた。

「（あの『衝撃砲』完成度が高いな…砲身の角度は不可視で無制限か）」

弾丸も見えない筈なのだが、刹那は見えている様である・・・。

鈴の青竜刀「双天牙月」と一夏の「雪片式型」が弾き合ひ。距離が離れば鈴による砲撃が襲い掛かつて来る

そのパターンを2・3度繰り返している内に事態は急転した

ズドオオオオオオンッ！！

「それ」がアリーナのシールドを貫通したのを刹那は見逃さなかつた。

「正体不明のIISがアリーナへ侵入！」

普段はドジな一面を持つ山田先生が一段と輝いて見える。

「織斑先生、アリーナの観客を避難。山田先生、遮断シールドの解除を早く」

「もうやっている」刹那の対応策は千冬も同じだつたようだ

「な、なにが起きますの！？」

「セシリ亞。緊急事態だ。一夏と鈴に正体不明なIISが襲撃した」

息を呑むセシリ亞。状況の把握は即座に行う事こそ最良の道だ。

「織斑先生、俺に出撃許可を」

「お前に何ができる？遮断シールドがある限り　　」

言葉を中断して刹那に問う。

「行けるのか？」

「行けますよ。黒月の使用許可、降りたと思つて行動します」

「わかつた。許可する…できる事ならば「あの」IISの「ア」を破壊せずに再起不能にしろ」

「了解」

山田先生 side

「（このよつな緊急事態に馴れているかの様な動きで出て行きましてけど…黒時くん何者なんでしょう）」

千冬 side

「（ふむ…。黒時が向かつたならば問題は無いと思つが…。しかし、あいつ…黒月の改造は終わったのか？）」

アリーナのシールドを黒月で消し、そこから一夏達に加勢。まずは

「鐵！」

漆黒のIISを纏い黒月を展開。少しばかりの違和感を感じられたが、機能に問題は無い様だ。

ツ！…・・よし、シールドは消えた。突入開始。

「一夏！鈴！下がれ！」

突然の声に驚いたのか、2人揃つて振り向いてくる。をい、戦闘中だぞ。

ハイパーセンサーで確認しろよ。よそ見してる暇が

「鈴！」

「だ・か・らつ！余所見をする暇は無えつて言つてんだろが！」

刹那は向けられたビーム兵器による攻撃から鈴を抱きかかえてさう。

「ちよ、ちよっと、馬鹿！離しなさいよ！」

「離脱したら離すつて　つて馬鹿はお前だ！暴れんな！殴つてくれるな！」

「つ、つるやこつるやこつるやこつ！大体、何処触つて　このガキ、緊急時くらい大人しくしろっての！」

「… 来るぞ！」

一夏より警笛の一音が飛んでくる。

「さんざゅ。さて、このヒス…」

強襲を仕掛けてきたヒスは外見が『全身装甲』である。フル・スキン

しかも、手は異様に長く、首が無い。

「（これは　やつぱり人が乗つてないな。なら）」

「一夏、鈴！」

「何よ！」「なんだ！？」

「鈴はサポート、一夏は俺と一緒に突つ込め。武器、雪片だけなん

だろ？」

「何勝手に決めてんのよ…たづく。いいわ、援護は任せなさい

「なら俺と刹那で突つ込むか」

こうして、即席トリオが結成された

「黒時くんが参戦しましたけど…大丈夫でしょうか？」

山田先生が千冬に聞いた。

「安心しろ、あいつは強い。そう簡単に負けはしないだろう

」

「ですがこんな緊急事態に生徒一人の増援でどうにかなるとは思えません！」

「落ちつけ。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからライライラするんだ」

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

ぴたりと千冬の動きが止まる

「なぜ塩があるんだ」

「や、ああ？ でもあの、大きく塩つて書いてありますけど」

「…………」

「あつ…やつぱり黒時くんを向かわせた事が心配なんですか！？それに弟さん……」

「…………」

「ピジトイイヤな空気が漂う。

「あ、あのですね」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「え？ それ、塩が入ってるやつじや」

「どうぞ」

「口ごとにした笑顔の裏に無慈悲なる悪魔がいた

「（しかし、黒時には何か違和感を感じたが……一体？）

その予感は的中する事となる・・・・・・

「おい……嘘、だろ？」

「刹那…どうした！？」

「…いや、早く決めるぞ！ 鈴、衝撃砲の連射！ 夏、エネルギー

「全部使って零落白夜だ！」

「お、おうー」「了解！」

刹那が疑つてしまつた、起こる筈のない事態。それは、黒月の改造はまだ終わつてない。それなのに鐵のエネルギー残量がかなり減つている。

それはただ、攻撃を避けるだけでは減る量では無かつた。

「（まさか、黒月がエネルギー消費をし始めた！？）」

そのまさかである。しかし、彼が思い描いていた結果と違い、自分が必要な時だけエネルギー消費を行うモノでなく、黒月を呼びだしているだけでエネルギーを消費してしまうモノとなつていた

「なんつー不良品になつたんだよ… 黒月」

愚痴を言つても事態は変えられない。

「一夏、あのIISを無人だと思え。それなら全力で行けるだろ」「ちょっと待ちなさいよ！なんで無人機つて決めてんの？」
「お前等も気づいてるだろ？あの動きは人じや無理だ」

「・・・」

「人も薄々感じていたのだろう。なら話は早い

「一夏。やる事は解つてるな？この前教えた瞬時加速の事だ」「ああ！解つてるさ！」

「一夏、私はどうすればいいの？」

「俺が合図したらアイツに向かつて衝撃砲を撃つてくれ。最大威力

で

「いいけど、当たらないわよ？」

「いいんだ。じゃあ早速

「

「一夏あつ！」

キーン…アリーナ全体に響き渡るような声が聞こえる。声の主は筹のものだつた。

「な、なにしてるんだ、お前…？」

「男なら…男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする…」

またキーンとした筹の声。

「…」

敵ISは筹を見る。

「筹、逃げ　」

一夏が叫ぶが間に合わないだろ？。なら、一夏がする」とほーつ。

「鈴、やれ！」

「わ、わかつたわよ！」

一夏に促され、衝撃砲を構える鈴。そして一夏はその射線上に躍り出る

「ちよ、ちよっと馬鹿！何してんのよ…？どきなさいよ…」

「いいから撃て！」

「ああもうつ…どうなつても知らないわよ」

衝撃砲のフルパワーが白式の背に直撃する。

刹那が一夏に教えた事、それは瞬時加速の原理。
イケニッショノ・ブースト

後部スラスターからエネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する。

その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。それはつまり、外部のエネルギーでもいいということ。

そして、『イケニッショノ・ブースト瞬時加速』の速度は使用するエネルギー量に比例する。

「オオオオオッ！」

『零落白夜』。必殺の一撃は、敵IISの右腕を切り落とす。だが、その反撃で敵IISの左拳が一夏にモロに直撃した

「「一夏つ！」」簫と鈴の叫ぶ声が聞こえる。

しかし、もう一人 刹那は叫びはしない。それは

「狙いは？」

『完璧ですわ！刹那さん』

よく通り、「うるさい」ときもある声が聞こえる
突如飛来する、ブルー・ティアーズの四機同時狙撃が敵IISを打ち
抜いた。

遮断シールドは刹那の突入時に破壊している。

『ギリギリのタイミングでしたわ』

『セシリ亞ならやれると思つてた』

確信じみた口調で刹那是答える。

「セシリ亞…助かった」

「礼には及びませんわ、一夏さん」

「よし、これで終わつ」

警告！敵IISの再起動を確認！警告！

「「「！」」「」」

片方のみ残った左腕。それを最大出力形態に変形させ、一夏と刹那
を狙つていた

(黒月のせいでエネルギーが少ないけどつ！やるしかねえ！)

「一夏！エネルギー全部使って突つ込め！」

白と黒を纏つた2人は放たれたビームへと飛び込む

視界が真っ白に覆われながらも、2人の手に敵の装甲を切り裂く手

「」たえを感じた

「う・・・?」

「やつと起きたか、一夏」

「せ、つな?」

「あ。… やつきの戦い、なんとかなったみたいだぞ」

保健室のベッドに寝てこる一夏に、もう一つのベッドに寝てこる刹
那から声がかかる

「そうか・・・」

「どーせ千ふ…織斑先生が説明に来るだらうから俺は寝とへ

「お、おお。おつかれ」

一方的に話を切り上げ、寝る。

大体は説明されなくても理解してゐから寝るか

とつあえず、刹那は寝た。

まあ…結局は事態の結果や何があつたかなびね千冬の声や、いつもさ
い幕の声などのせいで日が覚めて
聞こえてしまったのだった…。

ねこねこ……。嘘だれへ。（後書き）

こんな感じになりました。

感想、待ってます（・_・）ｙ

感謝します（前書き）

短めになつました。
これから展開せひやんと想えましたよー。

感謝します

保健室で休憩しきて夜になった

「刹那くん、退院おめでと～」

「樋無さん。俺は退院じゃなくて保健室から戻つただけです」

にしても…お見舞いに来てくれてもいいじゃないですか。

「な～に?お見舞いに行って欲しかった?」

心を読むと書いて読心^{よくじん}と言つ。なんで読めるの?樋無さん。それと
千冬さん。

「そんなわけないでしょつ

「ホントかな?」

「う・・・」

「う・・・」

「図星だつたんだ」

「自分でも不思議ですよ。実際は誰でもいいんですけど、誰かに逢
いたいつて そんな感じは」

「寂しかつたの?」

寂しい・・・それが何なのかよく解らない。でも、寂しかつたのか
な?一人で居る事は。

「よく解りませんけどね」

愛想笑いをしてみたが、昔と違つて1人でいると嫌な感じはした。
鬼教師め…保健室を出る時に声かけてくれればよかつたのに。いや、
あの人は怖いからいいや

「そんな寂しくて泣き出しそうな刹那くんに晩御飯のプレゼント～

「樋無さんが作つたやつですか？」

「ん~そつしたかつたんだけど、あの一人の事で忙しくて。

刹那くんは おねーさんの料理が良かつた?」

「ええ」

そりやねえ?一度しか食べた事無いけど、美味しかったから。

「嬉しい事言つてくれるわね」

「事実ですか?」

「刹那くん・・・どうしたの?なんか変よ?」

・・・おかしいのは解つてゐる。それは

「樋無さん」

「なあに?」

「黒月の改造。手伝つてくれてありがとうございました」

「?もう改造はお終い?」

「いえ...もつ手をつけられません。これ以上、改造は無理です」

「どうこいつ」と?..」

「今日の戦闘で黒月を使用しました。その時に気づいたんですが

」

黒月を呼び出しそう^{ハーネル}いるだけで『鐵』のエネルギーが消費した事。

自分の意志ではエネルギー消費を抑えれない事。

黒月の異変について、全て話した。

「そう。残念だつたわね」

「ですね。でもこれなら織斑先生に使用許可が貰えます」

「あり、前向きなのね」

「あ～…いえいえ、俺が言いたいのはですね？」

「武器の事はもういいの？」

「あの能力が使えるなら別にいいんです。で、俺が言いたいのは

「

絶対、絶対にこれだけは言いたかった。

「楯無さん。もうマッチサーボしなくていいですよね？」

楯無さんにマッチサーボは俺の理性がヤヴァくなるんだ。なんて言つ
か…」」う、イロイロと。

いやー誰か変われるなら変わつてみてー…」」うーアツいパトスが、
こづー・・・ゴホン。

「…・・・刹那くん

むむむ？なんだ？楯無さんに極上の笑顔が浮かんでる。

「あ・れ始めましょーか

」「コリとした笑顔、それと

「楯無さん？何を？ははは…十指が忙しく動いてますつてー」

「観念しなさい、刹那くん

くすぐり。それは楯無の出世術…基、趣味である。

「ちよ、やめ、たて、うわ、あああああああー！…！」

いつもの倍、軽く1時間以上はくすぐられた。

でも

「（手伝ってくれてありがとうございます。樋無さん）」

本当に感謝します。

少し不貞腐れた樋無に心の中で呟いた。

感謝します（後書き）

黒円の使用に気をつけて戦う事になつた刹那クン。
今後の展開、ちや～んと考えました。

感想、待つてます（・8・ゞ

ひと時（前書き）

自分で何を書いたか理解が
・
・
・

ひと時

6月頭、日曜日

一夏が家に戻るついでに友人の家に寄るから～とか言って俺も誘つてきた。

最初は乗り気じゃなかつたが最近、自室の冷蔵庫の野菜ジュースのストックが減つたので、
買いに行くついでに一夏について行つた。

「お、ついたぞ。刹那」

「ん？ 着いたつて…えっと『五反田食堂』つて」

「おう。こここの料理は美味しいんだよ」

いや、知つてんだよ。俺、此処に結構来てんだよ。友人の家つてこ
こか？」

中へ入つて行く。

「いらっしゃい。つて、一夏じゃねえか。それにお前さんもか」

「久しぶりですね厳さん」

「え？ 厳さん、刹那と知り合ひ？」

「おう。『コイツは』の常連だぞ」

「そうなのか刹那？」

常連つて言われるほどじやないけどな

「まあ偶に『業火野菜炒め』を食いに来てるだけだ」

五反田食堂鉄板メニュー『業火野菜炒め』を刹那は

「コイツめ、何が『偶に』だ。前は2日に1回くらいで來てたるう
が」

かなりの頻度で食べに来ていた。てか野菜好きだよね刹那。
レモン

「バラせないでくれよ…別に隠す事じゃないけどさ。まあ美味しいからな」

「嬉しい事言つてくれるじゃねーか。今日こそタダで食つてけ」「あんな美味しい料理に金を払わないのは失礼だつて。いつもビーリ 払わせて貰つよ」

・・・とつあえず、一夏の出る幕はなそつだ。

「」馳走さん

パンツと音を立て、両手を合わせ合掌。

「おう、お粗末さん」

「ふう。そーいえば一夏、友人の家つてのはここか?」

「おう。あ、そうだ 厳さん弾います?」

「ん? 家の方にいると思つた」

「わかりました。刹那、行こうぜ」

「会計済ませたらすぐ行くから待つてね」

会計を済まし、食堂を出

ペペペシ…む? 携帯か・・・

「はいもじも

「おい黒時。今何処にいる? 学園に戻つてこい。お前に用事がある」

千冬さん…一方的に話さないでください。今なんて? よし、

「りぴーと、あふたー、みー」

「おこ黒時。今何処にいる? 学園に戻つてこい。お前に用事がある。 もう一回か?」

「…これ以上続けるとヤバそうだ

「はあ…わかりました。10分くらいで戻ります。それじゃ
通話終了を押して一夏を呼ぶ。

「悪いが急用ができた」

「そうなのか？」

「ああ。だから敵さんにアロシク叫んで戻つてくれ、んじゃ学園でな
一夏と別れて千冬さんの所に行く。あ、10分じゃ野菜ジュース買
つて帰れない…

またの機会に買いに行こう…。

「戻つたか」

「ええ、それで俺に何の用ですか？」

「先日の黒いI-Sの事だ」

あ～襲撃してきたI-Sね、コアぶつ壊したけど怒られないよな？

「織斑先生、I-Sのコアですが、どうせ登録されてないコアでしょ

う？」

「話が早くて助かる…。ああ、登録はされていなかった」

「しかも無人機」

「その通りだ」

こんな技術を持つて、こんな事を引き起こしたのはあの天才しかい
ないだろ？
バカ

「そんな事じゃなくて、用事つて何ですか？」

「ああ、襲撃してきたI-Sを解析してほしい。お前一人で。」

「いやです」ニッコリ笑つて断つてやる

ツシュー！　スパアツーツー：

「先生、首に音速で出席簿を投げないで下さい。
本気で死にます。血が出てきました」

「知らん。まずは話を聞け」

おい！アンタが言つたか！まあいい

「あれは普通のエラでは無いからな。秘密を知る者は少ない方がいい。だから手伝つてもいいつ

「拒否権は？」

「そこまで嫌か？」

「解りました、解りましたよ。だから出席簿を構えないでください」

何枚の出席簿を搭載しているんだ、この歩く重戦車め！

「お前は学習をしないのか？」

駄目だ、抗うのは止そう。

ま、確かにあんな異常フサケタISは俺に任せてくれればいいんだ。

「了解です。俺も調べたかったから、解析やります」

文句を言つたが俺も気になつてた事だから頑張りますか。

「最初からそう言え、この馬鹿者め」

解析をしても特にいい結果が出た訳では無かつた。

ま、大体予想してたけど。

ひと時（後書き）

頑張ります。

2人の転校生

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、織斑君と黒時君の話よ」

「いい話？ 悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？ 絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？

女の子だけの話なんだから。実はね、今度の学年別トーナメントで

「

食堂にて、刹那は一夏と夕飯を共にしていた

「あのテーブル、かなり騒がしいな」

一夏が気付いた事を口にした。

「トランプとかだろ、きっと」

「えええっ！？そ、それ、マジで！？」

「マジで…」

「うそー…あやー、びりょー！」

あやあやあと黄色い声が聞こえてくる。

うん、つむる。けど若じ内の笑顔が多いこと老けないそういうだからいい事だね。笑顔

年寄り臭い刹那を放つておいても夜は過ぎて行った。

「やっぱりハヅキ社製のがいいなあ」

「え？ そう？ ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミコーレイのがいいかなあ。特にスムーズモードル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

月曜の朝。クラス中の女子がわいわいと賑やかに談笑をしていた。

「そういうえば黒時君のISースーツてどこのやつなの？ 見た事ない型だけど」

「あー。あれは特注品なんだよ。男物のスーツがないから、どっかのラボが作つたって」

俺のISースーツ？ 世界で最初の男のスーツだからなー。実験体1号、俺（刹那）。

「ISースーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きを

ダイレクトに各部位へと伝達、ISはそこで必要な動きを行います」

誰も説明なんて求めて無いが、すらすら説明しながら現れた山田先生

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。…つて、や、山ちゃん？」

「山ぴー見直した！」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。

えへん。……つて、や、山ぴー？」

「普段はデジに見えるけど今だけはしっかりして見える。流石、真

耶ちゃん先生

「あ、真耶ちゃんー?へへ 黒時くんー?先生を以前で呼ぶのは
ちょっと…」

そんな嬉しそうな二コ二コ顔で言われても説得力ありません。てか何故、俺にだけ過剰反応？

パンツ！ 周りに女子達がいたからか、出席簿は飛来せずに直で殴られた。

「お、織斑先生……」

「教師には敬意を持つて接しろ馬鹿者」

新しみの呼び方をしたのに…
「一か脳が揺れたそ絶対
頭がフタ
フラとする・・・

「諸君、おはよう」

「アーティスト」と「アーティスティック」

統率の取れた俊敏な動きの後の「あいさつ」

ソ連軍隊か？・・・まあ余計な事は考へないでおいた。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるが IIS を使用しての授業になる

では山田先生、HRを「
ははーつ

連絡事項を言い終えた千冬が山田先生にバトンタッチ。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも2名で

す
！
」

卷之三

「（ていうか、2人だと？…分散しないのか？）」
刹那にしては珍しい？普通の事を考えていると、教室のドアが開いた。

「失礼します」
「……」

先程までのざわめきが何も無かったのようピタリ、と止まる。
何故なら、そのうちの1人が 男子であったから。

「シャルル・デュノアです。フランスから
ニコニコ顔で告げ、一礼。

「お、男…？」

誰かが呟く。それは誰しもが思つた事だらつ…。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

「 礼儀正しい立ち振る舞い。人懐っこそうな顔。

印象は、誇張じやなくて『貴公子』である。笑顔が眩しいね

「 きや…」

来る！本能が告げた。何か…来る！

「 きやああああああ つ！」

ぐああああああ ツ！耳がつ耳があああ！！！

そ、そにつくうえー…ふ…？。人間、やれば何でも出来る。

「 男子！3人目の男子！」

「 しかもうちのクラス！」

「 美形！守つてあげたくなる系の！」

「 地球に生まれて良かつた～！」

元気だね、うちのクラス女子一同は。

「あー、騒ぐな。静かにしい」

面倒くせりに千冬がぼやく。

あー…溜息ばっかりで幸せが逃げますよ~千冬さん

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから~!」

そう…見た目から異端なもう1人の転校生がまだいる。

ジー・・・・・刹那の見たもう1人の転校生は

「(眼帯…いやいやガチの眼帯で…。軍人だな、アレは。)」

である。

「・・・・・」

「…挨拶をしる、ラウラ」

「はい、教官」

佇まいを直して素直に返事をする転校生にクラス一同、ぽかんとする。

「(+)ではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、(+)ではお前も一般生徒だ。織斑先生と呼べ」

「了解しました」

背筋を伸ばし、ぴっとした格好になる。てか教官つて言つたら…。

。 。 。 。 。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「・・・・・」

クラスメイト全体の沈黙。暫く言葉を待つてみたが続きは無い様だ。

「あ、あの、以上…ですか?」

「以上だ」

山田先生の必死の笑顔を無視し、無慈悲なる即答をかました・・・。

真耶ちゃん先生…乙です。

居たたまれない空氣に皆が戸惑つていると

「！ 貴様が 」

転校生のラウラが一夏に近寄る。

バシンツ！

「・・・・・」

「う？」

一夏の頬に容赦など無い平手打ち。

「いきなり何しやがる！」

「ふん・・・・」

ラウラはお構いなしにあいている席へとGO。。
はて？何故に一夏の奴は殴られたんだろうね？

「あー…ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて
第一グラウンドに集合。

今日は一組と合同でIJS模擬戦闘を行つ。解散！」

手を叩いて千冬が行動を促す。

「おい織斑、黒時。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だらつ」「了解です」

「君達が織斑君に黒時君？初めてまして。僕は 」

「ああ、いいから。とにかく移動だ」

「刹那、今日は第一アリーナの更衣室が空いてるぞ」

了解、と返事をして急がせる為にシャルルの手を引き、教室より出る
「とりあえず男子は空いてる更衣室で着替え。これから実習のたび
に長距離マラソンだから、早めに慣れてくれ」

「う、うん…」

どーした?さつきと違つて妙に落ち着かなそつだ。

「「トイレか?」

一夏も同じことを思ったのかシャルルに聞いた。

「トイ・・・違つよ!」

なら良かつた。走る速度を落とせば地獄が近づく。それは

「ああっ!転校生発見!」

「しかも男子3人揃つてる!」

HRの終了後に現る、各学年各クラスの尖兵どもが駆けてきているから。

悠長にする時間は一切無。鬼教師の授業に遅れるわけにはいかないのだつ!

「いたつ…」

「みちよ…」

「者ども出会い出合え…」

何時の間にやら武家屋敷と化した学園…。幻聴か?ホラ風の音が聞こえる

「織斑君と黒時君の黒髪もいいけど、金髪つていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド!」

「さやああー黒時君と手をつけないでー見てー2人ー手ー手を

」

「日本に生まれて良かつた!ありがとお母さん!今年の母の日は河原の花以外のあげるね!」

「毎年河原の花あげたのかよ!?」

お母さん…かわいそうに・・・。

「な、なに？ 何でみんな騒いでるの？」

「何でって、男子が俺達だけなんだから 状況を飲み込めないシャルルに説明しながら刹那は常人離れの事を仕出かす。

いきなり 「うわー」「きゃあー」一夏とシャルルの体を脇に控え、 ダンツ！

床を蹴る。 ダンツ！地を蹴り、壁に足をつけて前方へ踏み込む。

まあ … 一瞬だけの壁歩き？しかも2人抱えて。馬鹿かコイツそして後ろより聞こえる女子達の「待てー」だの「きゃああー」の叫びを無視し、更衣室へ。

「ふう … あ、自己紹介まだだ。俺は黒時 刹那 だ。刹那でいいぞ。よろしくデュノア」

何事も無かつたが如く走りながら自己紹介。ワケがわからないよ・。

「あ、俺は織斑 一夏。一夏って呼んでくれ」

「え、あ、え、つと…よろしく刹那、一夏」

そんなこんなで到着。一夏と刹那は制服を一気に脱ぐ

「わあっ！？」

シャルルが何か叫ぶが気にしない。

いやマジで気にしてたら千冬さんからの殺傷性付との攻撃がプレゼンツ。

「一夏！シャルル！先に行くぞ！」

とにかくダッシュ！最近、千冬さんからの攻撃が強くなってる気がするもん

まあ気のせいだらうなう

2人の転校生（後書き）

TOXを買つてプレイ中です。なので投稿スピードが落ちますね…

感想待つてますd(^_^)d

HSを使って授業

「ん? 黒時、織斑と『テュノアはどうした
まだ着替えてると思います』

「… そうか。早く列に並べ」

男子3人以外は揃つてるので刹那も列へと並ぶ

「遅い!」

一夏とシャルルが到着。

「ぐだらんことを考へている暇があるなひそつたと列に並べ!」「
バシーン! あ… 一夏が殴られた。何を考へてたんだか…。」

「ずいぶんゆつくりでしたわね」

男子3人の隣にいる女子 セシリリアに声をかけられた。

「スーツを着るだけで、どうしてこんな時間がかかるのかしら?」

「道が混んでたんだよ」

「ウソおっしゃい。いつも間に合つくせに」

ゑ? ホントなのに? なら

「あー…。一夏がさつき殴られた所が痛いって泣いてたんだ」

「痛くないし泣いてねえぞ! ?」

失礼。なんとなく言つてみただけだ

「なに? アンタまたなにかやつたの?」

何処からか聞こえる声。気配を感じさせずに近寄るだと…?

「後ろにいるわよ、バカ!」

おっと、気づかなかつた。鈴は2組だから後ろか

「…」の一夏クンは今日來た転校生の女子に平手打ちをプレゼントさ

れたんだ」

「はあ！？一夏、アンタなんでそうバカなの！？」「本当にバカですわね」

「安心しろ。バカは私の田の前に3名いる」

ギギギギッ・・・ブリキの音で首を動かす刹那、セシリア、鈴振り向く先には千冬、襲来。

バッシューン！蒼天の下で今日もまた出席簿による攻撃はいい音が鳴つた

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

1組2組の合同実習なので人数は倍の数だ。

「くうっ…。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

「1日に2回も喰らうと…記憶失つても不思議じゃねえ…」

馬鹿3人は頭を押さえながらブツブツと。

「今日は戦闘の実戦をしてもらおう。ちょうど活力溢れんばかりの十代女子もいることだしな」

鳳、オルゴット！

「な、なぜわたくしまで！？」

「刹那はなんで呼ばれないのよ！」

刹那と戦闘訓練など危なつかしいからだりつ。

「専用機持ちはすぐに始められるからな。黒時は後で罰を科してお

け」

「「なら、構いませんわ（構わないわね）」
くつ！鬼教師 + 2め！罰つてグラウンド何周とかか？ならスグに終わ

「グラウンドを50周だ」結構、長かった。

・・・鬼畜め。

「それで、相手はどうしてわたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。」Jリチの台詞。返り討ちよ

「慌てるなバカども。対戦相手は

キイイイイン……。

ん？空を裂くような音が上空から

「ど、どいてください！」

空を見上げる。

空から山田先生^{くわせんじやん}IAS展開状態^{くわんじょうたい}が飛来してくる。
「はあ・・・何やってるんですか真耶ちゃん先生」

IAS展開状態の人間が降つてくる事に周りから驚きの声が上がるが、
刹那はIASを展開。そして回避ではなく
ガシツ！　山田先生を受け止める。しかし、その受け止め方

「お姫様だつ」・・・

誰かが呟いた通り、刹那が山田先生をお姫様だつこしている。

「あ、あのう、黒時くん…そ、その…離してくれると…いえ、離さ
ないならそれは、それで

「山ちゃんズルイ！」「黒時君にそんな事してもうれるなんて…」

「私と変わつて！」

周りの女子達が何か喚きだす。つーか先生、早く離れてください。イロイロと大きいモノが当たつてる。

「はあ……山田先生、何をやつてるんですか」「千冬さんに促されて俺から離れる真耶ちゃん先生。

「はあ……。さて小娘ども。さっさと始めるぞ

「え?あの、2対1で……?」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける

負ける、と言われたのが気に障ったのか、セシリアと鈴はその瞳に

闘志を滾らせる

「では、はじめ…」

号令と同時に3人が飛翔する。

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。『デュノア、山田先生が使っているH.I.Rの解説をしろ

「あつ、はい」

空中での戦闘を見ながら、シャルルがしつかりした声で説明を始める

「山田先生の使用されているH.I.Rは『デュノア社製』ラファール・リヴァイブ』です」

以下略

説明が終わり、いいタイミングで?セシリアと鈴が落下してきた
「くつ、くつ……。まさかこのわたくしが…」

「あ、アンタねえ…何面白によつに回避先読まれてんのよ…」

「り、鈴さんこそ！無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないの

ですわ！」

「いづらは馬鹿なんだろ？人に責任を擦りつけ合つてやがる
さて、これで諸君にも教員の実力は理解できただろ。以後は敬
意を持つて接するように」

ぱんぱんと手を叩いて千冬が皆の意識を切り替える

「専用機持ちは織斑、オルコット、黒時、デュノア、ボーデヴィッ

ヒ、鳳だな。

では8人グループになつて実習を行う。各グループリーダーは専用
機持ちがやること。では開始」

千冬が言い終わるや否や、男子3人に2クラス分の女子が詰め寄つ
てくる

「織斑君、一緒に頑張ろ！」

「黒時君、私にわかんないとこ教えて〜」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

なんというか…行列が出来ている。え、何？これどーすれば？

その状況を見かねたのか、自らの浅慮に嫌気なのか、千冬は頭を押
さえながら

「この馬鹿者どもが…出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！
順番はさつき言つた通り。

次にもたつくよつなら今日はHを背負つてグラウンドを百周させ
るからな！」

鶴の一聲だろ？女子一同はグループごとに即座に並んだ。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

溜息ばかりの人ですね、千冬さん。そんなに溜息ばかりだと幸せが逃げますよ

「ではグループのリーダーは『打鉄』か『リヴァイヴ』を一体取りに来てください」「

山田先生が通常の5倍はしつかりした感じだ。さつきの戦闘で自信がついたのだろうか？

まあそんなことより俺の班だ。てか一夏とシャルルめ！俺より班のメンバー少ねえじゃねーか…。

「え、つと…。じゃあ出席番号順にHSの装着、起動、歩行までやろうか。最初の人は」

「はいはいはーいつ！」

元気な声で存在アピール。いや、わかるから。

「出席番号1番！相川 清香！ハンドボール部！趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ！」

「何故に自己紹介？」一応、クラスの女子は大体覚えたから自己紹介しなくてもいいのに

「よろしくお願ひしますっ！」

腰を折つて深く礼をし、右手を差し出してくる。なんで？握手すればいいのか？

「ああっ…する…」

「私も！」

「第一印象から決めてました！」

刹那の班全員から頭を下げられ、右手を突き出してくれる

「え？どういう状況？よくわからん」

「お願いしますっ…」「

…今度は後ろの方から同じ様な声が続けて聞こえた。

何事だらうかと思い、振り向くと、一夏とシャルルもお辞儀＆握手待ちであった

うむ。2人とも状況が掴めないよな。俺もだ

スパーーン！俺の近くより出席簿が火を噴いた音がする

「「「いつたああつっ！」」」

「やる気があつて何よりだ。それなら私が直接見てやう。最初は誰だ？」

反論は認めん。そう目が語つている…。

結果、相川さんが千冬の最初の犠牲者になってしまった。

「（あー…俺、暇になつたなあ）」

その後、授業も無事終わり（刹那の班を除く）、IISを片づけると一夏から昼飯に誘われたので一緒にシャルルも誘い、屋上でお昼を過ごす事になった。

I-Sを使って授業（後書き）

ああ…。日夜P-S3と共に徹夜だから眠い…
頑張ります（p_-_-）

感想、待ってます

「…『ル・リ・リ・リ』だ」

「ん？ 天気がいいから屋上で食べるのは話だつたら？」

「そりではなくてだな」

なんか筈が言ひ難そりに口もつてゐる。一夏と筈の会話を余所に刹那は

「いやあー、わっせは凄かつたなシャルル」

「え、何が？」

「何がつて、雪崩のように押し掛けてきた女子達に一夏に一夏を一條した対応だつたから」

その一夏な対応のトドメにシャルルは

『僕の様な者の為に咲き誇る花の一時を奪う事は出来ません。いつして甘い芳香に包まれてゐるだけで、もうすでに酔つてしまいそうなのですから』

であつた。

うん、すごい。凄いと思つ。嫌味くさくないし、本当にそう感じていよいよスゴかった。

何？これは『貴族の義務ノーブレス・オブリージ』といつ奴か？フランスすぎえ！

「ま、これから仲良くしようぜ。わからないうちがあつたら俺等に聞いてくれ。

あ、ちなみに一夏にHISの事は聞こちや駄目だぞ？」

「つたく一夏、アンタはもうちょっと勉強しなさいよ

鈴による一夏への追撃。2003b0だ

「してゐつて。あすぎるんだよ、覚える事が。お前らは入学前から

予習してるからわかるだけだろ」「ええまあ、適性検査を受けた時期にもあります、遅くても皆

「ええまあ、適性検査を受けた時期にもあります、遅くても皆
ヨーハスクールのうちに

専門の学習をはじめますわね」

「刹那は何時、適性があるって分かつたんだ?」「一夏による質問。聞かれても答えない質問だった

「んー?覚えてねえや。最近だつた気がする」

誰が正直に話すかボケエ

「ありがと。刹那も一夏も優しいね」

「い、いや、まあ、これからルームメイトにもなるだらびしついでだよ、ついで」

「一夏さん、部屋割がもう決まったのかしら?」「いや、普通に考えたら俺の部屋だろ。男だし」

「そつか。まあ、普通に考えたらそりやね」「そりだなー…つて刹那の同居人て変わらなかつたのか?」

先月、一夏と篠の2人部屋は終わり、一夏1人の部屋になつたらしいが

「(……樋無さんが俺の部屋にいるのは強制的といつうか、部屋変わつても付いてきそうだしなあ……)」「変わつてほしいなら変わつてやるけどな

「?よくわからん…」

分からねえ方がいいんだ…。

さて、昼飯でも食べるといよ

「・・・・・・」

先程の会話の中に入つていらない篠が動いていない

「どうした？腹でも痛いのか？」

「違う……」

「そうか。ところで篠、そろそろ俺の分の弁当をくれるとありがたいんだが」「…………」

「…………」

無言で一夏に弁当を差し出す篠。

「じゃあ、早速。……おお！ これはすばらしいぞれも手が込んでそうだ」

「つ、つこでだついで」

どこか嬉しそうな篠も弁当を広げ、食べ始める
俺も自分の弁当を食べるとして

「え？ 弁当？ ……刹那つて料理できたのか？」

おかしい。一夏に軽く馬鹿にされた気がする。

「まあ一応は、な。俺だって何時も野菜ジュークだけじゃなってか一夏、お前は早く食えよ？ 食べたら更衣室にダッシュだぞ」「ん？ 一夏つてもしかして実習で毎回スース脱いでんの？」

「え？ 脱がないとダメだろ？ 刹那だつてそういうじゃねえのか？」「いや、俺は着たままだ」

「…………」

一夏が篠、セシリア、鈴をジロジロと見てくる。

「女子の体をジロジロ見なじでよースケベー！」

「え？ いや、別にそういう意味で……」

「い、意味がどうであれ、紳士的ではない」と言つてゐるのですわー」「だから眺めていただけ」「…………」

「お、女の体を凝視しておいて眺めていただけとはなんだ！不埒だぞ！」

3人による集中砲火。かわいそうに……。

「・・・・」

「どうかしたの、一夏？」

一夏がシャルルを見ている。

「男同士つていいなと思ってな」

「そ、そ、う？よくわからないけど、一夏がいいなら良かつたよ」

「シャルル、今のコイツの思考は危ない」

「そういう意味じゃねえって！」

「…男同士がいって何よ…」

「…不健全ですわ…」

「…灯台もと暗しに気づかぬ愚か者め…」

一夏を見る目は少し白い目になっていたのは言つまでも無いだろう

「ふうー…ただいま戻りました」

「あら、お帰りー」

ベッドに転がり雑誌を読む櫛無さん（Ver下着姿）
（バーバー下着姿）
だがもう何も言わない、言えない、言いたくない。

「今日刹那くんのクラスに2人、転校生が来たわね」

「ああ、知つてましたか。そうです。ドイツの軍人、そしてデュノ
ア社の娘…ですかね？」

「あら、気づいたの？」

「確証はありませんでしたが、手を握った時とか抱えた時に何と無

くわうかな～って

「デコノア社は今、経営危機に陥っているから送られてきたんでしょうね」

「でしおうね～。ま、俺と一夏のデータを盗みに来たんじょー」
シャルルに関して特に何も言わず次の話題へ

「もう1人の軍人さんは　あ、楯無さん、『越界の瞳』^{ウォーダン・オージェ}って知つてます?」

「もちろん。脳への視覚信号伝達の爆発的な速度上昇、超高速戦闘
状況下における動態反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン
移植処理の事よ」

「流石、更識家。おそらくラウラはそれの移植者でしょうね。実力
はかなり高そうです」

「ふ～ん…じゃあ刹那くん、何か問題が起こったら対処ようしくね」

「はっはっは、イヤです。千冬さんに任せます。あの人、ラウラの

教官やつてたらしいですか?」

「まったく…織斑先生も大変ね」

その後は特に普通の会話をして楯無さんにマッサージをしてく無理
やりやらされてるんだ♪寝た。

— うまい。 あらわすかたー〇×クリアするの

8 - <感想、待ってます>

アリーナの中の3人

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないんだよ」

「そ、そうなのか？一応わかってるつもりだつたんだが…」

シャルルの転校から5日が経つて、土曜日。

刹那は一夏とシャルルの3人でE.S.Aアリーナにいた

「うーん、知識としては知っているだけって感じかな。さっき僕と戦った時も間合いを詰められてたよね？」

「うつ…、確かに『瞬時加速』も読まれてたしな…」

「ボロ負けだつたもんな」

「近接格闘オンリーの機体だからより深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じや勝てないよ」

「今までの自称コーチ共が悪かつたせいで、きっと

「おい一夏、事実でも口に出すな。あれを理解出来るのは異星人くらいだろ！」

そう、シャルルの教え方は分かりやすい。しかし前述の自称コーチは

Hさんの場合『ひづ、ずばーっとやつてから、がきんつーどかんつ！』という感じだ『音だけ

Rさんの場合『なんとなくわかるでしょ？感覚よ感覚。…はあ？何でわかんないのよバカ』刹那と同じSさんの場合『防御の時は右半身を斜め上前方へ5度傾けて、回避の時は後方へ』細けえ

うん、・・・意味が分からぬ

イコライザ『一夏の『白式』って後付武装がないんだよね？』

「ああ。何回か調べてもうつたけど、拡張領域^{バスクロット}が空いてないらしい。

だから量子^{インスティール}変換はむりだつて言われた」

「たぶんだけどワンオフ・アビリティーの方に容量を使つてゐるからだよ」

「ああ、一夏の『零落白夜』だな」

「そう、白式は第一形態なのにアビリティーがあるつていうだけでもすゞしい異常事態だよ。

前例が全く無いからね。しかも、その能力つて織斑先生の 初代『ブリュンヒルデ』が

使つていたISと同じだよね？」

確かに異常事態だ。唯一使用特殊能力が同じなど有り得ない

「まあ、姉弟だからとか、そんなもんじゃないのか？」

「それは理由にならない。ISと操縦者の相性の問題だからな」

「そつか、でもまあ、今は考へても仕方ないし、その事は置いておこうぜ」

「あ、うん。そうだね。じゃあ射撃武器の練習をしてみよつか。はい、これ」

シャルルが一夏に55口径アサルトライフル《ヴェント》を渡す

「え？他の奴の装備つて使えないんじゃないのか？」

「所有者が使用許諾すれば、登録された奴は使えるつて知らなかつたか？一夏」

「うん、今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃つてみて」

「お、おつ」

手渡された銃器に若干の驚きを感じた様な表情になつてゐた。

ふと、

「なあシャルル、俺も射撃武器の練習してみたいから銃貸してくれるか?」

「え、あ、うん。いいよ　　はい、刹那と鐵に使用許諾出したから。　　はい」

62口径連装ショットガン『レイン・オブ・サタデイ』を渡された

「サンキュー。さて　　」

銃を構え、狙いをつけて撃つ。ドンッ！ドンッ！ドンッ！

「刹那、…上手いね。射撃武装を持つてないのに」

「そりゃどーも」

「（昔、銃器の扱い方をどれだけ学ばされたか…。ハンドガンからスナイパーライフルまで使えるっての）」

一夏の『ヴェント』と刹那の『レイン・オブ・サタデイ』より発砲音が鳴り響く中、

アリーナ内が急にざわつき始めて、注目の的に視線を移す。

「・・・・・」

そこにはもう1人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ誰とも会話をしない孤高の女子。あまり話しかけたくない雰囲気だ。話しかける時はニコニコ笑顔で話そう。まず無視されると思うけど

「おい

オープン・チャンネル

ISの開放回線で声が飛んでくる。しかし、それは一夏のみに向けられていた

「・・・なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそつだな。ならば話が早い。私と戦え」

え、この子は戦い大好きっ子ですかい？見ろ、一夏の顔が嫌がつて
る顔になつてる

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様になくても私にはある」

理由…理由…ああ千冬さんの事か

「貴様がいなければ教官が大会一連覇の偉業をなしえただろう事は
容易に想像できる。

だから、私は貴様を 貴様の存在を認めない」

「また今度な」

「ふん。ならば 戰わざるを得ない様にしてやるー！」

言うが早いが、ラウラはその漆黒のIJSを戦闘状態へシフト。
直後、左肩に装備された大型の実弾砲が連續で火を噴いた。

「！」

ゴガギンッ！ ヒュンッ！ スパアッ！

「…」こんな密集空間でいきなり戦闘を始めよつとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね
ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「…まったくだ。周りの迷惑を考えてくれ。シャルルが対応しなかつたらヤバかつたぞ」

横合いから割り込んできたシャルルがシールドで実弾を弾き、同時に右腕に61口径アサルトカノン

『ガルム』を展開しラウラに向ける。

同時に刹那が

「刹那、今、何をした？」

一夏の疑問に答えるつもりもなくラウラを見据える

今、刹那が行つた事、それは黒月の一瞬の展開。刀を盾合の形で振り抜き、

「実弾を切り裂いたのだが…… 実弾を斬つた黒月が見当たらない。

「フランスの第二世代アンティークごときで私の前に立ち塞がるとはな。それと、貴様もだ」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代よりは動けるだろうからね」

「ホントにな。アドヴァンスド困ったもんだ…… 「大人げないぞ？ 遺伝子強化素体」アドヴァンスド最後の方は秘密回線プライベート・チャネルで伝えておく。

「！…貴様」

刹那&シャルルとラウラによる睨みあいが続いていると

『そここの生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』突然アリーナにスピーカーからの声が響く。騒ぎを聞き付けてきた担当教師だろう

「…ふん。今日は引いづ」

興を削がれたのか、ラウラはあつさりと戦闘態勢を解除。そして去つて行く。

アリーナを出たら、怒り心頭の教師が待つてゐるだろうがラウラは無視してしまうだろう。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かつたよ」

「今日はもうあがろつか。4時を過ぎたし、どのみちアリーナの閉館時間だしね」

「おう。あ、銃サンキュ。色々と参考になつた」

「それなら良かつた」

「んじや、帰りますか」

「えっと…じゃあ、先に着替えて戻つてて」
でました。いつものパターン。シャルルは刹那と一夏とは一緒に着替えたがらない

実際、実習後の着替えを共にした事は無い
・・・まあ理由は分かつてるけども

「そうか。なら一夏、戻るぞ」

「え？ たまには一緒に着替えよ」
「い、イヤ」

「つれない事言つなよ」

「つれないっていうか、どうして一夏は僕と着替えたいの？」

「まさか…一夏、お前…」

「ちがうつ！ 言いたい事はなんとなく分かつたけど違う！」
「なら戻るぞ。シャルル、遅くならないようにな」

「うん、ありがとう」

「はあー、風呂入りてえ…」

「唐突に何だよって言いたいけど、その気持ちには同意してやる。
真耶ちゃん先生の頑張ってくれるお陰で大浴場が使える様になるみたいだし」

シャワーより風呂に浸かる方が個人的に好きなので、真耶ちゃん先生には感謝だ

着替えが終わつて処に

「あのー、織斑君と黒時君はいますかー？」
「えーとシャルル以外はいます」

噂をすればなんとやら、山田先生のようだ。

「入つても大丈夫ですかー？まだ着替え中だつたりしますかー？」

「俺も一夏も着替えは済んります」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー。

デュノア君は一緒じゃないんですか？今日は3人で実習して
るつて聞いてましたけど」

「まだアリーナの方かと。呼びに行きますか？」

「ああ、いえ、そんなに大事な話でもないですから、2人から伝え
ておいてください。

ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。時間
の関係により、

男子は週に2回の使用日を設ける事にしました」

「「本当ですか！？」」

2人して子供の様に目をキラキラさせている・・・。

「真耶ちゃん先生、嬉しいです。助かります。ありがとうございます！」

「い、いえ、仕事ですから・・・」

「いや、ホントにありがとうございます！」

女教師の手を取り感謝の言葉を言う。かなり近い距離で言つて
いる気がするけれど。

「・・・刹那？何してるの？」

「あ？シャルルか。着替え終わつたのか。

「喜べシャルル！今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」

一夏がアツく語つてゐる最中、ふと思う。

「（あれ？シャルルに男子が大浴場使えるつて言つても意味無いよ

な？）』

何時まで男装をして誤魔化すのだと少しがこになつた

「ああ、織斑君にはもう一つ用事が。白式の正式な登録に関する書
いて欲しい書類があるんで、

職員室まで来てもらえますか？ちょっと枚数が多いんですけど」

「わかりました。じゃあ2人は先に戻つてくれ

「うん。わかった」「りょーかい」

一夏が真耶ちゃん先生と職員室に行つたので俺とシャルルは白室へ
と戻つて行つた

アリーナの中の3人（後書き）

感想、待つております（・3・）y

シャルルの正体

ふむ…。シャルルが何時まで男装してるのが本人に聞いてみようかな

「…ちょっと休憩してから聞きに行つてみるか」

コンコンッ。ガチャリ

「一夏？？シャルル？？入るぞー？」

尋ねる前から開ける。別にいいじやない、人間だもの
「ちょいとシャルルに聞いた

」

ジー・・・。

「え？」

「あ、刹那」

一夏と金髪女子がいるけど、この女子がシャルルなのか？

「あー…。シャルル、か？」

「え、つと…ひ、人違いです」

「そうか？なら一夏、人違いならシャルルは何処に行つたか知らな
い？」

少しばかり、からかいたくなつた

「が、学食に行つたんじゃないのか？」

「ふむ。俺は今しがた学食から帰つて来たんだけど?」もちろん嘘
だけど

「す、すれ違いになつたんだろ、きっと
優しいね一夏。でも隠し通すには無理があるぞ

「つと、まあ眞面目な話。何でシャルルは一夏にバレたんだ？男装
してゐる事」

その証拠に今は体のラインがくつきり浮かぶ服装をしていて女性だと分かつてしまつ

「ま、まさか刹那、気づいてたの？」

「お前の手を取つた時とか、抱えた時に気付いたけど何か？」

「お前、シャルルが男のフリしてゐるつて知つてたのか？」

「だから気づいてたつて言つたじゃん」

寧ろシャルルの行動が女子っぽかつたのも関係してゐるが、な

「そ、つか…気づいちやつてたか」

「あ、別に言いふらすつもりは無いから安心しな」

「そつか…ありがどづ」

別にお礼なんて言わなくていいんだけどなあ…

「刹那以外はシャルルが女子つて知らないんだよな？」

「おう」

・・・1人、いるんだけどな

「んで？シャルル、男装してまで入学してきた理由は何だ？ 大
体は分かつてゐるんだけどな」

「俺も聞かせてくれ」

「うん…分かつた。」

何かを考えた後、シャルルは口を開いた。

「えっとね、僕が男のフリをしてまで入学したのは実家の方からそうしろって言われて…」

「実家つていうと、デュノア社の」

「そう。僕の父がその社長。その人からの命令なんだよ」

「命令つて・・・親だろう? なんでそんな」

「僕はね、一夏、刹那。愛人の子なんだよ」

そうであろう事は予知していた。今のデュノア社に息子がいるなど聞いた事が無い

「引き取られたのが2年前。ちょうどお母さんが亡くなった時にね、父の部下が

やってきたの。それで色々と検査する過程でEHS適応が高い事がわかつて、非公式ではあつたけれど

デュノア社のテストパイロットをやることになつてね」

自社の利益の為に娘を使わせたのだろう。

「父に会つたのは2回くらい。会話は数回かな。普段は別邸で生活してるんだけど、

一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時はひどかったなあ。本妻の人には殴られたよ。

『泥棒猫の娘が!』ってね。参つけやつよ、母さんもひょつとくらいい教えてくれたら、

戸惑わなかつたのにね』

あはは、乾いた愛想笑いを浮かべるシャルル。

「それから少し経つて、デュノア社は経営危機に陥つたの

「え? だつてデュノア社つて量産機ISのシェアが世界第三位だろ?

?』

「...作つてるリヴィアイヴは第一世代だからな。作るなら第三世代を

作らないといけないんだろ」

「その通りだよ… フランスは歐州の統合防衛計画『イグニッショント・プラン』からは除名されているからね。第三世代型機の開発は急務なの。国防のためもだけど、

資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

前にセシリ亞が実稼働データを取る為に IIS 学園に来たつて言つていたな。

「それでデュノア社も第三世代型機を開発していたんだけど、もともと遅れに遅れての第一世代型最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、

なかなか形にならなかつたんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。

そして、次のトライアルで選ばれなかつた場合は援助を前面カット、その上で IIS 開発許可も剥奪するつて流れになつたの」

「なんとなく話はわかつたが、それがどうして男装に繋がるんだ?」「簡単だよ。急用を浴びるための広告塔。それに」

「…一夏、お前の…お前と白式のデータを盗みに来たんだろう」「そう、2人のデータを盗んで来いって言われてるんだよ。僕は、あの人にね」

刹那も IIS が使える事は IIS 学園に来て知つたんだけどね、と付け加えた。

「とまあ、そんなところかな。でも2人にばれちゃつたし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。

デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち

今までのよつにはいかないだらうけど
僕にはどうでもいいことかな

「・・・・・」

「ああ、なんだか話したら楽になつたよ。聞いてくれてありがとう。
それと、今までウソをついていて、ゴメン」

深く頭を下げるシャルルの事が無性にイラライラする。お前は自分の
意思を持つてないのか、と。

そんな気分になり、腹が立つていて

「いいのか、それで」

一夏がシャルルの肩を掴んで顔を上げさせていた

「え・・・？」

「それでいいのか？いいわけないだろ。親が何だつてうんだ。どう
して親だからってだけで

子供の自由を奪う権利がある。おかしいだらう、そんなものは！」

「い、一夏…？」

「一夏の言つ通りだ。親が決めた事？そんなものは関係ない。自分
自身がどうしたいかが重要だ」

「せ、刹那も…？」

ああ…クソッ。俺がシャルルに行つた事は
自分の利益や都合の為に子を使う奴に育てられ、捨てられた俺の事
を言つてるんじゃねーか…
それに…一夏も

「親がいなけりゃ子供は生まれない。そりゃそりだらうよ。でも、
だからって、
親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！」

生き方を選ぶ権利は誰にだつてあるはずだ。それを、親なんかに邪魔されるいわれなんて無いはずだ！」

一 夏も自分の事を言つてゐるのだろう。

「ど、どうしたの？ 2人とも、変だよ？」

「ああ、……悪い。つい熱くなつてしまつて」

「別に……変じやないつて」

「いいけど……本当にどうしたの？」

「俺は 僕と千冬姉は両親に捨てられたから」

「あ……」

おそらく資料にあつたのだろう。織斑姉弟の『両親不在』の意味を理解したみたいだ。

「その……『メン』」

「気にしなくていい。俺の家族は千冬姉だけだから、別に両親なんていまさら会いたいなんて思わない」

「一夏よりもシャルル、お前はこれからどうするんだ？」

「どうつて……時間の問題じゃないかな。フランス政府も事の真相を知つたら黙つていらないだろ？ し

僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

はあ・・・。自分自信のこれからをもう分かつてるつもりなのか

「それでいいのか？」

「良いも悪いも無いよ。僕には選ぶ権利が無いから、仕方が無いよ」

無理に作った笑顔を向けてくるが、痛々しいものだと理解できる

絶望など越した諦観がそこにあつて何とも言えない『何か』に苛立つ

「……だったら、ここにこうい

「え？」

「刹那、お前…」

「一夏、HS学園特記事項21、だ」

「・・・あ、ああ！」

特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に
帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

そう、シャルルはまだ考える時間が3年もある。

「一夏、刹那」

「ん？ なんだ？」 「んー？」

「よく覚えられたね。特記事項は55個もあるのこ」

「一夏と違つて頭がいいって事理解したか？ シャルル」

「うぐ… お、俺は勤勉なんだよ」

「説得力ないけどね、ふふつ」

今の笑顔がシャルルの本当の笑顔なんだろ？ な

「ま、まあ決めるのはシャルルなんだから、考えてみてくれ」

「自称・勤勉に同意する」

「うん。 そうするよ」

「んじや、俺は部屋に戻る」

「刹那、ありがとね」

「・・・どーいたしまして。じゃあな、シャルル、一夏」

「おう」

「うん。 また明日」

俺は部屋を出て自室に戻る。途中、機嫌の良さそうなセシリ亞がす

れ違つたが、

よほど気分がいいのか、俺の存在に気づかないようで、そのまま何処かに行つた（多分、一夏の部屋かな？）

暗い、暗い闇の中にそれはいた。

「・・・」

いつ頃からこうなのかはもう覚えていない。ただ、生まれた時には闇の暗さを知つていた。

人は生まれて初めて光を見るというが、この少女 ラウラ・ボーデヴィッヒは違う。

ラウラ・ボーデヴィッヒ。

それが己の名だとは知つているが、それは何の意味も持たないことを理解している

けれど、唯一例外はある。織斑 千冬に呼ばれる時だけは。その響きが特別な意味を持つている気がして

（あの人の中存在が……その強さが、私の目標であり、存在理由……）

それは一筋の光の様でだった。

出会つたときに一目でその強さに震え。恐怖し。感動し。心が揺れた。

体が熱くなり、そして願つた

ああ、こうなりたい と

理想の姿は完璧でなければならない。
ならばその完璧を崩す者を許せはしない。

（織斑 一夏 …… 教官に汚点を背負わせた張本人……）

あの男の存在は認めない。

そして、もう1人。

(黒時 刹那　。私の事を知る、謎の存在……)
何者なのか？私の邪魔をする者なら……。

(排除する。どのような手段を使ってでも……)

暗い闘志に火を付け、ラウラは静かに眠りへと沈んで行った・・・

シャルルの正体（後書き）

TOXのサブイベやらで更新遅くなるかも…。

感想、待ってます～

25話（前書き）

サブタイが思いつかなかつたのでシンプルに。

どうぞ

「そ、それは本当ですかーー!?」「う、ウソついてないでしょーうねー!?!?」月曜の朝、教室に向かっていると廊下にまで聞こえる声がした
「なんだ?」

「さあ?」「知らん」「前を歩く一夏と、シャルル（男装ヴァージョン）である。「本当だつてばー!」の噂、学園中で持ちきりなのよ~月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と黒時君と交際でき

「

「俺と刹那がどうしたって?」「きやあああああああつー!?!」「どうしたのだろうか。一夏が普通に声をかけてただけに見えたが、返つて来たのは取り乱した悲鳴だった。まったく…はしたないぞ」「で?何の話?俺と一夏の名前が出たんだって?」「う、うん? そうだっけ?」「さ、さあ、どうだつたかしら?」「鈴とセシリアは あははは~うふふふ~と言しながら話を逸らす。聞いたらマズイ話か?

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るからー!」「そ、そりですわね! わたくしも自分の席につきませるとどこか皆が余所余所しい様子だった

「いやあ……。一夏の奴は距離が長いとか言ってたけど、RTCを使えば楽なのになあー」

学園内の男子が使えるトイレス三カ所しかないので授業の終了と同時に中距離走開始。

けど、それは一夏だけ。俺?いつもRTCの部分展開して飛んでトイレに行ってるけど?

バレンタインやいいんだ。バレンタインやいいんだよ。

「なぜこんなとこで教師など!」「

「やれやれ」

うん?近くから声が聞こえ、注意を向ける。2人いて、千冬さんとラウラだ

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「EJのような極東の地で何の役目があるとこいつですか!」「あれま。現在の千冬さんに対する不満をぶつけるラウラかい。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力の半分も生かせません」

「ほう」

「大体、EJの学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありますん」

「なぜだ?」「

「意識が甘く、危機感に疎く、EJをファッショングループにかと勘違
いしている。

そのような程度の低い者たちに教官が時間を割かれるなど

「

「そこまでにしておけよ、小娘」

「う…………！」

凄みのある千冬さんの声。

「少し見ない間に偉くなつたな。15歳でもつ選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

ラウラの声が震えている。恐怖、だろつ。圧倒的な力と、かけがえのない相手に嫌われる恐怖。

「さて、授業が始まるな。さつさと教室に戻れよ」

「…………」

ぱっと声色を戻し、ラウラを教室へと急かす。ラウラは黙したまま去つて行つた。

「そこの男子、盗み聞きか？以上性癖は感心しないぞ」「待つてください。そんな性癖は持ち合わせていません」「ならばいい。そら走れ、授業に間に合わないぞ」「わかつてますよ」

翌日の放課後。一夏、シャルル、刹那、篝が第三アリーナへ向かっていると、慌ただしい様子。

第三アリーナへ走る生徒が多い。

「なにがあつたのかな？先にこつちで様子を見て行く？」

シャルルが観客席へのゲートを指す。俺と一夏と篝は頷いた。

ドゴォンッ！

「 「 「 「 …? 「 「 」 」

突然の爆発に驚き、視線を向けると、

「 鈴！ セシリ亞！ 」

それだけではなく漆黒の HIS『シュヴァルツェ・レーゲン』を駆るラウラが戦闘をしている

「 くわえつ…! 」

ジャカジーと鈴の HIS『甲龍』の両肩が開く。第三世代型空間圧兵器・衝撃砲《龍砲》の攻撃だ
訓練機程度のアーマーならば一撃で沈める砲撃を、ラウラは回避しようとしている

「 無駄だ。」のショヴァルツェ・レーゲンの停止結界の前ではな

不可視の弾丸がラウラには届かなかつた。

あれは AIC だろ？ アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略称だ。

通称『慣性停止結界』。空間にエネルギーを貯える空間圧兵器に近いモノだ。
分析をしている間にラウラが手首に装着したプラズマ手刀で鈴とセシリアに斬りかかる。

「 くつ…! 」

鈴とセシリアの HISアーマーが次々に破壊される。
そんな光景を楽しむような顔を一夏に向けるラウラ。
愉悦に浸つた顔を向けられ、一夏の何かが振り切れたのだろう

「 おおおおおつ…! 」

叫び声と共に一夏が白式を展開。同時に《雪片式型》の展開。『零落白夜』を発動していた

「 その手を離せ…! ! ! 」

「ふん…。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

ラウラは右手を突き出す。すると一夏の動きは止まり、零落白夜のエネルギー刃は次第に小さく消えて行く。

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェ・レーゲンの前では、

貴様も有象無象の一つでしかない。 消えろ」

肩の大型カノンが、ぐるんと一夏へと砲口を向ける。

「一夏つ、離れて！」

シャルルの声が響き、アサルトライフルの弾雨がラウラに降り注ぐ。一夏の自由が解かれる。

「ちつ……雑魚が……」

シャルルが銃による牽制は一切休まない。3度目の銃の切り替えを行っても弾雨は降り続ける

「面白い。世代差というものを見せつけてやるわ

弾丸を避け、反撃の為に体を低く屈める。

「行くぞ……！」

「くつー！」

「（ああ～なんかシャルルまで参戦しやがった…。誰が止めるんだよこの戦い。俺はヤだね）」「何をしている？」

不意に声を掛けられ、振り返ると千冬さんがない。

「一夏がいきなり突っ込みまして、シャルルもついでに

「はあ…。お前、あの馬鹿共を止めてこい」

「はあ…。俺ですか？先生が止めてくださいよ。教師でしょ、う？」

「I.Sを展開していない私がか？」

「織斑先生なら可能でしょう？」

言いながら、黒月を展開して千冬さんに渡す。「うむ。きつとこの人は生身でもI.S武装を扱える氣がするから

「仕方がない…。私が止めるしかないか…」

俺から黒月を受け取り、素早く戦場の中心に行き、ラウラのプライズマ手刀を防いだ。

・・・・・ホントに生身でI.S武装を扱いやがったよ あの人。

軽い冗談だったのに

「では、学年別トーナメントまでの私闘の一切を禁止する。解散！」パンッ！と千冬さんが手を叩く。それはまるで銃声の様に聞こえた。

「…女子って軽い地震くらいなら起こせるのか？」

先程、鈴とセシリ亞がかなりの負傷をしていたので保健室へ連れて行つた。

そこで少し話をしていると、人工的な地震みたいな揺れを感じた。ドドドドドッ！女子達が保健室に駆け込んできて、男子3人に（1人は女子だが）

今月開催の『学年別トーナメント』は2人組での参加が必須らしく、一緒に組もうと言つてきた。

一夏はいきなり「悪いな。俺はシャルルと組むから諦めて、刹那と組んでくれ！」と言つ。

「「「黒時君！……」「」」皆の視線が集まつたので
「抽選で当たつた人は一緒に頑張るうぜっ！」と保健室の窓より逃走。

「（あの時の女子達の眼には修羅が宿つてた氣があるなあ…）」
ま、少しばかり怖くなつて逃げたのだ。
締め切りまでにペアが決まらないと抽選だつて書いてたから誰と組む事になるのだろうかね
自室へと戻つてきた。

「ただいま戻りましたー」
「あら刹那くん。お帰りー」

・・・樋無さんて、生徒会があるので、何故に俺よりも帰つてくるのが
早いのか聞いてみたい気もするが…別にいいや

「そういえば樋無さん」
「なにかしら？」
「樋無さんて生身でI.S武装を扱えます？」
「急に何の話？」

「いやー今日、俺意外の専用機持ちが、ひと悶着起こしまして、
織斑先生が俺の黒月を使って その場を収めたんです。生身の体で
「流石は織斑先生ね…」
若干、樋無さんも引いている感じがする

「I.S学園の教師全員はI.Sを開かないでもI.S武装を使えるんで
でしょうかね～？」
「それは無いと思つわよ」
「ですよね」

まあ、千冬さんが常人離れをしている事を思い知られた。

25話（後書き）

感想、待っています／＼（。口＼）（＼口。）／＼

最悪のパートナー（前書き）

文章が変になつてないか心配中…。ビーザン（——）m

最悪のパートナー

「しかし、す」「いな」「つや……」

更衣室のモニターから観客席の様子を見た一夏が呟く。
各国の政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他の顔ぶれ
が一堂に会していた。

「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれ人が
来ているからね」

「そんな事より一夏はラウラの方が気になってる感じだな」

「まあ、な」

「感情的にならないでね。おそらく、彼女はかなり強いと思つから」

「ああ、わかつてる」

一夏＆シャルルのペアは特訓の成果もあって強くなっている。
しかし、まあ…俺にはあまり関係ない。一夏とシャルルのペアと戦
う事になるかも分からぬからな。

「（つーか俺、一体誰とパートナーか、未だ知らないんだけど）」
抽選の結果発表が遅れて、今日発表らしい。ペアとの練習なしで、
ぶつつけ本番とは、

なかなか手厳しい状況だ。

「あ、対戦相手と抽選結果が決まつたみたい」

モニターへと表示される文字を見る。

「「「え？」」「」」

出てきた文字を見、刹那、一夏、シャルルは揃つて声を上げた。初
戦の相手とペアの発表。それは

『織斑 一夏＆シャルル・デュノア』 VS 『黒時 刹那＆ラウラ・

ボーデヴィッシュ『ヒ

なんともまあ…困ったペアである…

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりやあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

試合開始まであと5秒、4秒、3秒、2秒、1秒

GO

「「叩きのめす」」

一夏とラウラの声は奇しくも重なり、試合開始と同時に一夏は『瞬^{イグニ}時^{ツイ}加速[・]』

先手を決めれば有利に働くと思ったのだらう。しかし甘い。

「おおおっ！」

「ふん…」

ラウラが右腕を突き出す。発動した。

一夏の体は硬直し、身動きを取れない状態だ。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「…そりやどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかわかるだろ？」

AICで相手を捕えた次はラウラの肩に装備されていて大型レール砲^{カノン}をぶつ放す。

お、シャルルが飛んだ。そして銃を構え、

「させないよ」

61口径アサルトカノン《ガルム》の爆破弾を浴びせる。

「逃がさない！」

出た。シャルルの技能。『^{ラビット}高速切替^{・スイッチ}』だ。

事前呼び出しを必要とせず、戦闘と並行しての武装呼び出し。

俺は「」で参戦した方がいいのか迷う。試合開始前にラウラに「邪魔をするならば貴様も倒す」と言わされたのだ。しかし、まあ見せ掛けだけの試合を行っていないと、研究者たちに

「」の程度の実力「だと思わせる事が出来ない。俺への興味を削がせる作戦に出よう。

「ふうー…。よじつー！」

一夏とシャルルには事前に、参戦しないつもりだ。と言ったが前言撤回させてもらおう

「甘じつー！」

シャルルがラウラに向けての連射をしている所に軽く斬りかかり中断させる。

ガギィインッ！ 案の定、近接ブレード『ブレッド・スライサー』で受け止められる。

「刹那ー？っくー！」

俺が参戦しないと言つてたからだら、驚いている。それに不意打ちだったので体勢が崩れた

「俺は見せ掛けだけの試合をする。偶に攻撃を仕掛ける程度だ。それを避けたり反撃をしてくれればいい。俺のデータを懶々、晒したくないからな」

プライベート・チャネルで伝えると「ん。了解」と返事が返ってきた。

よし。後は一夏がラウラと戦つて、勝つか負けるかどっちに転がるかを見させてもらおう。

「貴様の武器はそのブレードのみ。近接戦でなければダメージを与えられないからな」

雪片とプラズマ手刀が打ち合ひ最中、声が聞こえる。
そう。一夏の武器は近接ブレード《雪片式型》のみ。しかし、一夏が執拗に近接戦に拘るのは、
距離が離れれば大口径レール砲的。そしてシュガーハルツニア・レゲンの武装、

ワイヤーブレードがある限り、一度でも距離が開くと再び近づくのは難しい。

「うおおおおつ！」

ギンッ！ ガインッ！ ガツ！ ガギイインッ！

「・・・そろそろ終わらせるか」

プラズマ手刀を解除し、両手を交差させ、前方に突き出す。A.I.Cを発動。一夏の動きを封じる。

「では 消える」

6つのワイヤーが射出された。

「くそおおおつ！」

一夏の叫びも虚しく、H.S装甲の3分の1を削り取った。
見た感じではシールドエネルギーも半分近く減ったハズだ
ワイヤーが伸びて白式の籠手を掴み地へと叩きつける。

すかさず、体勢を立て直そうとする一夏が目にしたのは
「とじめだ」

対H.Sアーマー用特殊徹甲弾が口を開け込んでくる光景。
「（それぞれシャルルへの攻撃を止めるか・・・）」

軽くシャルルを吹き飛ばし、追い打ちをかけるフリをして、飛来する徹甲弾の元へ行く。

「おい！刹那！」

一夏の叫び声が聞こえるが無視。弾を斬る為に集中する。

黒月を常に展開する事は自殺行為。ならば一瞬だけの展開をすればシールドエネルギーも少量で済む。

射出された弾丸を斬るにはそれなりの速度も必要だ。ただ振るだけでは斬れない。

抜刀。それは一瞬の斬撃にして爆発的な威力。

俺は鞘から刀を振りぬくイメージを浮かべ、黒月を展開。

イイイン！

弾が当たるギリギリで断ち切る。前の時は出来た。なら…今回も出来る！

「つりあああつ！」

スパツアア！

「悪いなラウラ・ボーデヴァッヒ。俺に当りそうだったから、つい一夏が止めを刺されそうな時だけ手助けをしてやろう。」「貴様、言つた筈だぞ。私の邪魔をするならば倒す、と」「邪魔した訳じやないつて。流れ弾を斬つただけ。んじゃ俺は下がつとくよ」

ハイパーセンサーで背後を確認。一夏とシャルルが更なるヤル気を見せていた。

「ふあー、すごいですねえ。黒時君、あの弾丸を斬っちゃいましたよ。

でもボー・デ・ヴィッシュさんの中魔になっちゃいましたけど」

「あれは『テュノアに追撃すると見せかけた手助けだ。元より黒時はボー・デ・ヴィッシュと組んでいたつもりは無いのだろう。2対2の様に見せた、3対1対だ』

「織斑君の人徳なんでしょうかね。でもちゃんと試合をしてくれないと困りますが…」

「…そうだな。（まあ、黒時の場合は）データを取られない様に軽く戦っているだけなのだろう」

「それにも学年別トーナメントの急な形式変更は、先月の事件のせいですか？」

先月の事件 黒い全身装甲IJSの襲撃。反政府組織の仕業と言つ事になつたが、

襲撃という事で大事なので各国が揺らいでいる状況だ。

「おそらくそうだろう。実戦的な戦闘訓練を積ませる為、ツーマンセルになつたのだろう」

「でも1年生は入学して3ヶ月目ですよ？戦争があるワケでも無いのに…必要あるんでしょうか？」

「先月の襲撃の様な事から自衛をする為だ。いつ狙われるかも分からぬ状況なら、な」

「ははあ…成程」

疑問を氷解させ、頷く山田先生。再び、試合へと戻り向けていく

「これで決めるつー！」

零落白夜を発動させた一夏。

「触れれば一撃でエネルギーを消し去ると聞くが…当たらなければ意味は無い。」

貴様の攻撃は読めている

「普通に斬りかかれば、な。 それなりー。」

「無駄な事を！」

AICOで動きを封じたラウラ。一夏が危ないが俺は手を出さない。

「…ああ、なんだ。忘れてるのか？俺達は 2人組なんだぜ？」

「！？」

遅い。視線を移した所でシャルルがショットガンの連射を叩き込み、ラウラの大型レール砲は爆散。

「おおおおおつ！」

隙が出来た相手に勝利を確信した一撃…の、筈だった。

キュウウウウン……。

エネルギー切れ。ダメージを負い過ぎたのだ。

「残念だつたな。限界までエネルギーを消耗してはもう戦えまい！あと一撃で私の勝ちだ！」

「やらせないよー！」

シャルルが割つて入るがワイヤーの牽制に邪魔をされる。

「うあつー！」

「シャルルーー！」

氣を取られた一夏に攻撃が来る。

「は…ははつー私の勝ちだ！」

高らかな勝利宣言。けど、まあ…

「敵が再起不能になるまで氣を抜いちゃいけないだろ、普通。軍人なら当然じゃないのか？」

「なに？」

戦闘中は相手の動きを兔に角 確認しろ。それが出来ない奴は不意打ちに逢つて負ける

「まだ終わってないよ」

『瞬時加速』を発動させたシャルルが使つている。この戦いで覚えたのだろう。シャルルが『瞬時加速』を使えるなど誰も知らなかつたのだから

「ふつ……。だが私の停止結界の前では無力！」

腕を突き出し、動きが止まつた

ラウラ

ドンッ！

有らぬ方向からの射撃。視線を巡らすラウラと一夏の目が合つ

シャルルのアサルトライフルを構えた一夏と。

「二、のつ……死に損ないがあつ！」

「これで間合いに入れた」

シャルルが近づいて構えを取る

「それがどうした！ 第二世代の攻撃力ではこのシュヴァルツェア・レゲンを墜とす事など」

そこまで言つて、ラウラはハツとする。

第一世代型最強の攻撃力を持つた装備があると気付いた。

シャルルの盾の装甲が飛び、中から

六十九口径パイルバンカー 『灰色の鱗殻』^{グレー・スケール}。通称

「『シールド・ビアース
盾殺し』……！」

「「おおおおおつ！」」

一夏とシャルルの声が重なる。AICは間に合わない。
ズガンツ！！！

「ぐううつ！」

一発を撃ちこみ、終わりではない。灰色の鱗殻はリボルバー機構。
つまり連射可能。

ズガンツ！ズガンツ！ズガンツ！

ラウラのHSが強制解除の兆候を見せる。

(こんなところで負けるのか、私は…！

私は負けられない！負ける訳にはいかない！)

彼女 ラウラは望む。

(力が、欲しい)

『 願うか…？汝、自らの変革を望むか…？より強い力を欲する
か…？』

ラウラの奥底で何かが訊く。

言うまでも無い。力があるのなら、それを得られるなら、私など
空っぽの私など、

何から何までくれてやる…！！！

だから、力を…比類無き最強を、唯一無二の絶対を 私によこせー

D a m a g e L e v e l D .

M i n d C o n d i t i o n U p l i f t .

C e r t i f i c a t i o n C l e a r .

o t . ≈ V a l k y r i e T r e c e S y s t e m ≈
b o

最悪のパートナー（後書き）

感想、待っています。￥□

27話（前書き）

あ、またもやサブタイが思いつかない…だとつ！？

「なんだよ、あれは……」
 一夏が呟いていた。しかし、それを見た者は誰しもが同じ事を言つだろつ。

IISは原則として、変形しない。厳密には出来ないと言つた方が正しい。

IISがその形状を変えるのは『スタートアップ・フィッシング初期操縦者適応』と『フォームシフト形態移行』の2つだけだ。

パッケージなどでの多少の部分変化はあっても、基礎の形態が変化する事は無い。

だが 現に今、その、有り得ない事が起こつてゐる……。

変形などで無く、一度ぐちやぐちやに溶かしてから再び作り上げた粘土人形に見えた。

シユヴァルツェア・レ ゲンだったものがラウラを包み込むと急速に全身を変形、生成した。

先月の襲撃者とは違つた黒い全身装甲のIIS……

その姿は最小限のアーマーしか纏わないのだが、問題は手に持つ武器

「『雪片』……」

一夏の姉、千冬さんが振るつていた刀。似ている?…否、複写トレスだ。

「…………」

黒いIISが一夏の懷へ飛び込み、刀を中腰に構えた。

・・・あれは千冬さんの太刀筋だ。必中の間合いからの必殺の一閃。「ぐつーーー！」

一夏の『雪片式型』が弾かる。トドメと言わんばかりの振り下ろしを辛うじて避けるが、

少し刃に触れたのだろう。腕からじわりと血が滲んでいた。

緊急回避を行つた白式は光の粒子となり、消えた。

「それがどうした……」

白式が消えたのに、そんな事など関係無い。そんな目をしている。

「それがどうしたああつ！」

ちつ…あの馬鹿が！死ぬ氣か！？

「うおおおおおつ……！」

「一夏っ！」

一夏の腕を掴み、止める。

「離せ！刹那！あいつ、ふざけやがつて！ぶつ飛ばしてやる！」

千冬さんの事になつて熱くなつてゐるのか？それでも冷静になれつての一

「どけよ刹那！邪魔をするならお前も　」

ガスツッ…と鐵を纏つた状態での右ストレートを呑き込んでやる。

「ふう…落ち着け馬鹿が。何を熱くなつてんだよ」

「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉ものだ。千冬姉だけのものなんだよ。
それを……くそつ！」

やつぱり千冬さん絡みだったか

「あんな、わけわかんねえ力に振り回されてるラウラは氣に入らねえ。

ISとラウラ、どっちも一発ぶつ叩いてやらねえと氣がすまねえ」

「理由は分かつた。けど今のお前には何の力がある？ISも無い

お前が

『非常事態発令!』——ナメントの全試合は中止! 状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む! 来賓、生徒はすぐに避難すること! 繰り返す!』

「聞いたか? お前がやらなくても事態は収拾されるだらう……けど? お前はどうする?」

一夏の意思はかなりのモノだ。なら、それを少しだけ手伝ってやるわ

「俺がやる……」

「OK… さて、白式のエネルギーだが」

即座に相手のI-Sにエネルギーを渡せる訳ではない。エネルギー譲渡には時間がかかる。

「無いなら他から持つてくれればいい。でしょ? 2人とも」

「シャルル……」

吹き飛ばされてようやく立て直したのか……。

「だが、そう簡単にエネルギーバイパスを繋ぐには」

「普通のI-Sなら無理だけど、僕のリヴァイヴならコア・バイパスで直ぐにエネルギーを移せると思つ」

おいおい……マジか。通常は時間がかかるて難しい筈の事を簡単に言つてくれやがる……。
「本當か! ? だつたら頼む! 早速やつてくれ!」
「けど!」
びしっとシャルルが一夏を指す

「けど、約束して。絶対に負けないって」

「もちろんだ。ここまで啖呵を切つて飛び出すんだ。負けたら男じ

やねえよ

「じゃあ、負けたら明日から一夏と刹那は女子の制服で通つてね」
「まだ言つのは後には退けない覚悟を持つているからだろ？。

「待て！シャルル！俺は何も関係ない！」

「負けたら一夏のせいって事で、ね」

理不尽だ。畜生…。

「い、いこせ？なにせ負けないからな…」

勝手に了承してんじゃねえぞ一夏！
バカ

けれど、この会話がいい意味で緊張を解す。

「じゃあ、はじめるよ。……リヴァイヴのコア・バイパスを開放。
エネルギー流出を許可。

一夏、白式のモードを一極限定にして。それで零落白夜が使える筈
だから

「おひ、わかった」

「一夏？負けたら一生お前を恨む。そして明日からお前が瀕死にな
るまで顔面を殴り続ける！」

全力で念を押しておひ。じょ、女装？ははは…ただのトラウマ
だよ！…！…

「わ、分かつてるよ…」

「完了。リヴァイヴのエネルギーは残量全部渡したよ

シャルルの体からリヴァイヴは消える。

そして、白式の構築が始まる

「やつぱり、武器と右腕だけで限界だね

「充分や」

「さつやと終わらせてここ

「行つてらつしゃい」

「じゃあ、行つてくれる」

ゆづくりと黒いエスを見据え、言へ。

「じゃあ、行くぜ偽者野郎。零落白夜 発動

零落白夜の刃が日本刀の形に集約された。

一夏を敵と認識した黒いエスが刀を振り下ろす。

千冬さんの意思がない。そんなモノは

「ただの真似事だ」

ギンッ！

腰から抜き放つて横一閃、相手の刀を弾く

そしてすぐさま頭上に構え、縦に真つ直ぐ黒いエスを断ち斬る

「ぎ、ぎ、ガ……ガ……」

紫電が走り、黒いエスよつらウラが落ちるよつて出でへる。

「……まあ、ぶつ飛ばすのは勘弁してやるよ

ラウラを抱きかかえた一夏が呟いた。

その言葉は彼女に届くのは彼女自身が知る事だ。

「ふいー…

一夏とシャルルが学食に行つたみたいだけど、自室で休憩する事にする。

「ただいまー」

おや、樋無さんのお帰りだ

「お帰りなさい。遅かつたですねーやっぱり今日の事件についてで

すか？」

「更識家として、ね」

お疲れな事だ。俺も疲れてるけど

「今日の事件の原因はラウラのETS　　VTシステムでしたか？」

VTシステム　　ま、過去のETS大会で優秀な操縦者の動きをトレースするってヤツだ

「流石、刹那くん。その通り、織斑先生が重要案件で機密事項だつて言つてたわ」

「今は禁止された代物(シロモノ)ですもんね～」

ふうー、はあー、と2人して溜息。いや、溜息を吐きたい気分なのだよ。

「ンンンンン。ん？誰だ？」

楯無さんに出てもらう訳に行かず（だつて下着姿だし）俺が出る

「黒時君いますかー？」

おや、真耶ちゃん先生じゃないか

「いますよー…。で、何か用事でも？」扉が開き、会話を始める
「朗報です！なんですね！ついに今日から男子の大浴場が解禁です！」

「…・・・・・ゑ？マジで？」

「マジですか！？てつきり来月からになるとばかり！」

「それがですね。今日は大浴場のボイラーポイント検査があったので、もともと生徒たちが使えないんです。
でも点検が終わつたので男子3人に使ってもらつて計らいなんですよ」

「おおー普段の『仕事できるの？』の人』な感じが真耶ちゃん先生から消える。

やればできる子だったのかつ！

「織斑君とテュノア君は先に大浴場の方へ行つてゐると思いますから
黒時君も準備をしてくださいね」

「わつかりました！え、つと一夏たちは……」

一夏達は…………あれ？あれえ？男子三人？

「ちょ、ちょっと待つてくださいねー……」

思考を張り巡らす。これは…………色々マズイな。色々と。
くつ！駄目だ！このまま大浴場へ向かつたら、シャルルの事はどう
するんだ？

「こ」は…………致し方ない……

「ま、真耶ちゃん先生……」

「は、はい？」

「俺、今日はシャワーで構いませんので……今日は失礼しますね……
おやすみなさい！」

圧縮空気の開閉音を後ろにベッドへと帰還する……まだドアの近くで
何か言つてゐけど無視。

一夏、俺は逃げる。何故だか大浴場に行くと大きな問題に直面しそ
うだから……。

「刹那くん、お風呂行かないの？」

「楯無さん……俺は男子です。一夏も男子。シャルルは女子だつて分
かつて言つてますよね？」

風呂……更に大浴場だといつのこと、行く勇気が無い。自室のシャワー
室へ向かつた。

「はああ……」今日は溜息を吐きたくなる日なのだろう、きっと。

髪をシャンプーで洗い、ボディータオルへと手を伸ばす。無い
ガチャ。

「はーい。お背中流しに来たわよ」
「はあつ！？」

シャワー室のドアを開け、水着姿の楯無さん登場。

「ちょ！？何しに来たんですか！？」

「お背中流しに」

「セウジやなくてっ！」

「あらあら恥ずかしがり屋さんねえ。ほひ、おねーさんこすべてさらけ出しなさい」

「何ですか！大体、狭いのに2人で入ってどうするつもりですか！」

「んー。密着？」

何で疑問形なんですか！

「まあまあ、そう言わずに」

ぐあつ！背中に柔らかい膨らみが水着越しに伝わってくる。

「だああああつ！ダメです！さつさと撤退してくんださー！」

「刹那くんの ケチ」

「ケチって問題じゃない…うわああああ！」

背中から腕が伸びてきて俺の胸板をなぞる様に指を這わせてくる。

「楯無さん！いい加減に」

「背中を洗わせてくれたたら出て行くわ

なんかもう、抵抗する気力も沸かず…

「もう好きにしてください・・・」

「あはっ 刹那くんつてば『氣前』いー
わー、どうとでもなれ・・・」

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。まあ……すでに紹介済みというか」

朝っぱらからテンションが低い真耶ちゃん先生だが、え？ 転校生？ また？

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

どつかで聞いた事のある声だ。ついでに
「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願ひします」

シャルルに似た女子だなあ……じゃねえ！

「え？ デュノア君て女？」

「おかしいと思った！ 美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「織斑君、昨日『デュノア君とお風呂に』」

ザワザワザワ。あ、オワタ。一夏、オワタ

バツツツツシーナン！ 何かが扉を吹き飛ばし教室に乱入。あ、鈴だ

「一夏あつ！ ！ ！ 死ね！ ！ ！」

初撃 鳳 鈴音。（HS展開状態）両肩の衝撃砲開放準備完了

ああ……明日の朝刊のトップはこつだろつ。

「ミンチでした」「トマトケチャップでした」「地に墜つ柿でした」「或いはイチジクでした」

「缶パーカでした」「又はペ プシコーラでした」「C ca - C

「あでした」

お、最後の3つは全部一緒にじゃないか
衝撃砲の連射が終わり、一夏を見ると

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

瞬きを何度もしただろうか、あの光景に。ラウラと一夏の唇が重なつ
ている光景に。

あ。逃げた。一夏が。

ビュンツ！セシリ亞のレーザーだらう。危険が増してきた。
ん、次は筈の竹刀が空間を断ち切りそうなオーラを纏つてる。なに
アレ？

お、今度はシャルルがISを展開。あ、あれは『盾殺し（シールド・
ピアース）』

・・・・さよなら、一夏。心の中で敬礼。

ドガアアアアーン！朝のHRは轟音と爆風が入り混じるHRとなつ
た…。
今日からほもつと騒がしくなりそうだ。

誰もいない場所で誰かとの電話を終えた女性が更なる騒ぎを引き起
こす事は誰も知らない・・・

27話（後書き）

感想、その他待つてまーす／＼・曰／＼（）

同室の人と戦闘（前書き）

なんでこの2人の戦闘を書いたのだ？私は・・・。

同室の人と戦闘

「楯無さん、今日暇ですか?」

日曜日の朝、同室の楯無さんに尋ねてみる

「ええ。それがどうしたの?」

「模擬戦…してくれません?」

第一アリーナにてISを開示して楯無さんと向かい合つ。

楯無さんのIS『霧纏の淑女』^(ミステリアス・レイディ)の見た目は

アーマー面積が全体的に狭く、小さい。

だが、そのカバーの様に透明の液状のフィールドが形成されてい
る。水のドレスつてとこか。

そういうえば初めて見たなーこの人の機体

「じゃあ…準備はいいですか?」

「いつでも構わないわよ

「なら 行きますよ!」

学年別トーナメントでラウラの弾丸を斬り裂いた時の事を考えた

「(あれは咄嗟の決断力と瞬発力が無いと無理だ。:誰かと模擬戦
でもして鍛えてみるか?)」

普段は模擬戦など自分の利益がないとしないのだが 今までの様
に黒月一本で戦闘だ。

それは変わらない。けれど黒月にエネルギー消費があると今までの
戦いは見直す必要がある。

まず一夏、　　アイツもエネルギー消費の問題を抱えているが、一夏の戦闘法は参考にならない。

筆　　アイツの真剣使った抜刀には学ぶところがあるが、IS関係では無い。

セシリ亞とシャルル　　今回、近接戦闘メインだから、遠距離相手との戦闘には役に立つが、

今必要な相手は近・中距離戦での相手だ

ラウラ　　非常に近接・中距離のバランスがいいが『シュヴァルツェア・レゲン』は修理中。

クラスの誰かに訓練機を使つてもう一つ、誰がいるんだよ・・・

と、言う事で　　あ、楯無さんいるじゃん！つて楯無さんに模擬戦頼んだんだよ。

別に無理して戦い方を変える必要もないが、攻撃・防御の2つに黒月を使ってたから

防御時に、黒月を展開してない手で防いでしまったようになったからなあ。

戦闘中、常に持っているのが普通だったないので慣れない感覚だ。

今の黒月は常に展開してたら（もともと軍用ISとして作られたのでエネルギー量が多いが）数十分で

全エネルギーを喰いつくす。敵さんが持久戦に持ち込むと勝ち目がない。

とまあ今は近・中戦で戦法をどうするか見直す。

楯無さんに説明してOK取れたら模擬戦するかー

「 ッ！」

まずは黒月を使わない戦闘法を試す。開始直後、飛び出しからの横薙ぎ回し蹴り うん。避けられた

「甘いわよ」

言いながら右の手に持つランスを突き出してくる。

後方回避。ただ単に武器で突かれても避けれる

「楯無さんこそ甘い攻撃ですねっ！」

体を前方へと傾け、零距離まで近づいてやる

「ふふつ。まだまだよー！」

特に動きを見せない楯無さんの表情は焦っていない！？やべつ！

ランスをよく見ると穴がある。ズガガガガガッ！

四連装のガトリング・ガンが鐵のシールド・エネルギーを削っていく。

けど、ま、これくらいの消費は掠り傷程度だ。このまま格闘戦に持ち込む！

「そらツ！」

右腕でランスを払い除け、左で殴る ランスを持つ反対の手で払われる。

・・・攻撃に黒月を使わないと一撃も入れれない

「楯無さん、これから武器を使わせて貰いますよー！」

「りょーかい つ！」

飛翔中の抜刀は俺に無理なことだ。だから普通に斬りかかる
ガギインツ！ランスと太刀が火花を散らして弾き合つ。

俺の I.S.《鐵》はスピードがトップクラスと自負している。弾き合つた直後、移動。そして斬る

「ガギインー・ギイインー！」

斬つても斬つても弾かれる……

「埒が明きませんねつ！」

「刹那就くんが攻めてくるからでしょつー！」

一度、間合いを取つて楯無さんの出方を伺う。

四門ガトリングによる牽制の後、その手に呼び出した武器

蛇腹

剣《ラスティ・ネイル》

ツツツ！鞭のよつこしなる（高圧水流付き）それで

黒月を狙う。

「ちつ！　けど残念でしたつー！」

黒月を収納。そして呼び出し…して、思いつ切り、振り被る！
クローズ

投太刀？つてトコだ。不意打ちも使いどころに寄れば強力な一撃と化す。

決まればシールド・エネルギーの4分の1は削れる筈。

しかし、簡単には届かない。霧纏の淑女を守る水のベールにより防がれる。

「・・・ただの水じゃないですね」

「その通り。でも種明かしはしないよ」

ああそうですかい…。いいなあ…武器が一つつて中々辛いもんだ。まずは

「その水を操作する元凶を壊させて貰いましょう」

壊せばいいのは左右に浮かぶヤツだろ？

「それが出来るかしら？」

涼しい声してランスの連續突きは怖いな・・・

つーか俺、やつきからあんまり攻撃に転じてないしー黒月の回収に行けねえ！

空中からの投劍だつたせいか、水のベールに防がれ変な方に飛んだせいか、地面に刺さつてやがる
楯無さん上手い事武器の切り替えしてるから近づくのが困難だ。

こつちは何もしてないのにエネルギーを地道に減らされる…

「飛ばしますよーっと」

『瞬時加速』じゃない。あんなモン使つたらエネルギー消費が早まるだろーが。

ズガガガガガッ！……シュツ！シイツ！　くそつ近寄れん・・・

「そろそろ疲れたかな？」

「楯無さん」そー疲れたんじゃないですか？攻撃が単調ですね！」
パシン！　よしつ！黒月は回収成功。反撃開始だ。

「もらつた！」

ズガガガガガアアツッ！

「きやつ！」

背後に回り、袈裟斬り。絶対防御が発動したのだろう。ちよつとはエネルギー減らせたはず

「ようやく俺の一撃ですか…大変でしたよ。　そろそろトドメですかね」

「…おねーさんを見くびっちゃダメ…でしょ

手応えと見た目からしてかなり削つたな、楯無さんのシールド・エ

ネルギー

「遠慮はしませんよ！」

先程より隙が見えてくる。それなりの時間 戦つたのだろう、鐵のエネルギー残量も少なくなっている

「ひりああああ！」

スカツ・・・スカ？ 手応え無し。水？ つ！？ 振り向く先に遠い所に浮かぶ楯無さん。

「残念」

「水で作った偽物、ですか」

分身と本物を入れ替えたのはいつなのか、全く分からぬ。ホントす「こ」ですよ…。

「いつのタイミングで入れ替えを？」

「刹那くんに一撃を入れられた後、かな」

「ならエネルギーは減ってるんですね。次で決めますよ」互いに残量は少ない筈。後、2～3撃で勝負はつきそうだ。

「けど、その前に刹那くん

「なんですか？」

「刹那くんの周り、少し暑くない？」

「・・・？」

「温度ってわけじゃなくて、刹那くんの体感温度が

「なんか・・・逃げろって直感がビシビシ来ますね」

その場から離れる準備を始め

「でも、遅いわよ」

ぱちんっ、と楯無さんが指を鳴らす。俺の周囲が爆発する。

まずっ！ エネルギー残量なんか気にする暇なんて無い！

エネルギーが切れたら俺の負けだ。

楯無さん・・・ここまでやるなんてバケモノですかっての…

「ふう…これで終わり、かな?」

ISより伝達されたエネルギーを霧を構成するナノマシンが一斉に
熱に転換し、対象を爆破する能力
『クリア・バッシュョン』
『清き熱情』その能力は絶大だった。
煙が舞う中、楯無は息をつく。あの爆発からは逃げられないだろう
…と確信してしまったからだ。

戦いの中で過信は禁物ですよ? 権無さん

「…っ! ?」

「俺の勝ちですよね?」

背後より黒月を向け問う。

「あ…あ…そうね。私の負けよ。けど刹那くん?」

「はい?」

「どうもって私の後ろに?」

「『瞬時加速』ですかね…。使つたら有り得ない位のスピードが
出ますけど、エネルギー消費が…」

『霧纏の淑女』エネルギー残量0『鐵』エネルギー残量1/3

ギリギリの勝負だったわけだ。

「今日は有難う御座いました、楯無さん」

「こちらこそ。いい経験だったわ」

俺の戦闘法を見直すには最適の相手だった。

「ねえ、刹那くん」

「はい?」

「一緒にシャワー浴びる?」

「ちょ！？な、何言つてるんですか！？」

「あはっ　これは私の勝ち、かな」

勝ち誇つた笑顔を向けられる。

・・・この人に勝つのは色々な事に関して無理なのかも、と思えた
のだった。

同室の人と戦闘（後書き）

次回より原作3巻ですねー。

感想、待っています(・口・)ゞ

水着を買いに。（前書き）

海に行くのは次回ですね。今回は水着を求める お話です。

水着を買いに。

朝食を早めに済ませ、早い時間から教室にいる俺。

原因は隣の隣の隣の隣部屋より波乱と殺気が発生しそうな感じだつたから…。

つまり一夏の部屋から嫌な予感が感じたのだ。
その嫌な感じに首を突っ込むと面白そうだが命に関わる気が…平和が一番と信じ、早く教室へGO

よく解らない理屈だが、朝早くに田が覚めたのも一つの理由だ。
ザワザワザワ。クラスメイト達が教室に入つてくるので挨拶をしながら談笑へ移る。

キーンコンカーンゴーン・・・。

あ、予鈴がなつた。今日は千冬さんのSHRだといつのこ一夏、シヤルロット、篠、ラウラがいない

ギュンッ！小規模の風が発生したかと思うと

「到着つー！」IS部分展開状態のシャルロット。PIICで飛んだのか
「おひ、じ苦労なことだ」千冬さんのお待ちかね
まったく御苦労様だよ。あ、篠とラウラが後ろから二つそり入つて來た

「本学園はISの操縦者育成のために設立された教育機関だ。そのためどこの国にも属さず、故にあらゆる外的権力の影響を受けない。がしかし

すばんつー！今日も響く出席簿攻撃の音。最近は俺にflying出席簿が来なくて平和だ。

「敷地内でも許可されていないIS展開は禁止されている。意味は分かるな？」

「は、はい……。すみません…」

クラスの皆の顔は唖然とした表情だ。シャルロット優等生が規律を破ったからだ

るつ。

「テコノアと織斑は放課後教室を掃除しておけ。一回は反省文と

特別教室だ」

「「はい・・・」」

「さて…今日は通常授業の日だったな。IS学園生といえお前たちは高校生だ。赤点など取るなよ」

そう。授業 자체は少ないが一般教科もある。期末テストで赤点を得ると夏休みを無にしてしまう

「それと、来週から始まる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。

三日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽田を外しすぎないよ!」

7月頭の校外実習 すなわち、臨海学校なのだ

最近、女子と会話をするとその話題が出てくる。海・・・少し楽し

みだ

水着を持ってないから買い物に行かないといけないな
ま、日曜日くらいに出掛けるか

「ではSHRを終わる。各人、今日もしつかりと勉学に励めよ」

「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか?」

クラスのしつかり者こと鷹月 静寐さんの質問だ。真耶ちゃん先生、寝坊か? クビになつたか?

「山田先生は校外実習の現地視察に行っているので今日は不在だ。
なので山田先生の仕事は私が今日一日代わりに担当する」

「ええっ、山ちゃん一足先に海に行ってるんですか…？いいな～！

「ずるい！私にも一声かけてくれればいいのに！」

「あー、泳いでるのかなー。泳いでるんだろうなー」

咲き乱れる十代女子、話題があれば一気に賑わう

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しい。山田先生は仕事で行っているんだ。遊びではない」

はーい、と揃つた返事をする1組女子。チームワークは相変わらずだ。

「さて、と」

田曜日。そろそろ臨海学校なので水着を買いに行こう。ついでにぶらついてくるかー。

部屋のドアを開き外に出ようと

「あら、刹那くん。どこかにお出かけ？」同室の人気が戻つて來た

「ええ買い物を。それじゃ失礼しまぐえ！？」

楯無さんの横をすり抜ける様に通ると後ろ首を掴まれた。

「ゴホッ…何するんですか？」

「私も一緒に行つていい？」

「W h y?」

「んーなんとなく？」

最近の楯無さんの行動は不思議だ。

「別に構いませんけど、水着を買つへりーですよ?」

「おねーさんの?」

「なんで俺が楯無さんの水着を買つ必要あるんですか…」

「一緒にシャワー浴びる為?」

「何ですかその理由…そしてなんで疑問形 いや、もつといいです」

ツツコニするのが億劫だ…。

「着替えるから待つててねー」

楯無さんが部屋に入つて数分…

「おまたせー」

部屋から出でてきた楯無さんの格好

ふむふむ…なんでさ

「楯無さん」

「なあに?」

「自分の格好見直せえええつ!…!」

お・か・し・い・だ・ろ・!

なんで!? なんでメイド服!? ついでに極が付く程のミニスカート!
! なにがしたいの!?

「あら、気に入らなかつたかしら?」

「気に入るとか気に入らないとかの問題じやねえーんだよおおー!」

確かに、普段着でそんな格好するヤツはいないだろう…いたなら不思議な人と呼ばせてもらう

「兎に角、着替え直してください」

「刹那くんのいけずー」

ぶーぶー言いながらも部屋に戻り 数分

今度は白いオーバースカート付きの黒いハーフパンツに水色のタンクトップ。

うん。全然大丈夫だ。ついでに似合つている。素直に可愛いと思つね

「それじゃ行きますよ?」

「はーい」

水着売り場へ到着。駅前のショッピングモールの一階に位置している
「さて、シンプルに黒色の水着を買いますか」

男の水着なんて種類は少ないからな。逆に女性の水着は種類がありすぎるけども

「刹那くん刹那くん」

男物コーナーにて樋無さんが色々と見て回っている。

「なんですか？」

「これ似合つんじゃ」

「似合いません。そして嫌です」

誰が褲ぶたんじを着けて泳ぐヤツがいるか。大体なんで褲なんて売つて
ぐるりと店内を見渡す。5：4：1の割合で水着がある…けど
5割が普通のタイプ。1割が逆三角のタイプ。残り4割は色々な褲
コーナー…

この店：何が楽しいのだろうか…理解に苦しむ

俺はさつさと黒色の水着を購入。これで用事は半分済んだ
「じゃあ次は私の水着ね」

「必要無いでしょうに」

「あら、新しい水着で一緒にシャワー浴びないの？」

色々と頭大丈夫ですか？通り掛かった人に変な目で見られたじゃな
いですか

「まあ私も水着が欲しいから買つわね」

言いながら女性用のコーナーへ向かって行 あれ？

「俺も行くんですか！？」

腕を掴まれて引きずられていた・・・

「これで今日の用事はお終い?」

「ええ。でもまさか楯無さんが本気で水着を買うとは」
あの後、楯無さんは水着を選び、試着室に入つて行き。着替えては見せつけてくる。

かなりの眼福だったがスタイル抜群の楯無さんを見るのは妙にドキドキした。

最終的に水色波柄ビキニ+パレオの水着が気に入つたらしく、購入していた

「私も臨海学校に行つて泳ぐかなーと思つてね」
「アナタは学校でしょうが。生徒会長がサボタージュですか?」
「生徒会長権限でどうにかするわ」

「絶対無理だと思います」

「冗談よ」

無邪気な子供の様な笑顔をむけてくる。ドキッとしてしまうが、本当にこの人は不思議だとも思つてしまふのだった。

水着を買いに。 (後書き)

なんだらう・・・。最後の方が ~~ggd ggd~~ だつたかな?
後、樋無さんの服装面、大丈夫ですかねー?
変だつたら指摘してくださいね(・。・) y

感想、その他、待つてます b

臨海学校、初日。（前書き）

おどろいてるかも・・・

臨海学校、初日。

「海…見えたあつ！」

トンネルを抜けたバスの中で誰かが声を上げた。

臨海学校初日、天気は快晴。微かに潮の香りが漂つ

「…………う…」

眠い・・・でか寝てた。断じて前日にテンションが上がりつて寝付けなかつたワケじゃない。

天気が良いうえ、俺の席は窓際なので太陽の光を受ける。ついで眠くなる。

さつきウトウトしている時に顔の近くで写メを撮る音が聞こえたが、何か珍しいモノでもあつたのか

女子達は撮った写真を見ては笑顔になつていて。見せてもらいたいが見せてくれないので。なんで？

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

千冬さんの言葉で全員がそれに従う。指導能力は抜群だ。ほどなくしてバスは目的地の旅館前に到着。四台のバスからTJS学園1年生が出てきて整列。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。

全員、従業員の仕事を増やさないよう注意し

「…………よろしくおねがいしまーす」」

「はい、こちらこそ。今年の1年生も元氣があつてよろしいですね。こここの女将さんだろう。歳は30位でしつかり大人の雰囲気が漂っている。

「あら、こちらが例の・・・？」

俺と一夏を見た女将が千冬さんに尋ねる

「ええ、まあ。今年は2人男子がいるせいで浴場分け難くなつてしまつて申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子じゃありませんか。しつかりしてそうな感じを受けますよ」

「感じがするだけですよ。挨拶をしろ馬鹿者共」

誰が馬鹿者共だ。馬鹿は一夏一人で十分だ。さて、挨拶挨拶

「お、織斑 一夏です。よろしくお願ひします」

「黒時 刹那です。今日から3日間よろしくお願ひします」

「うふふ、『一夏』にどうも。清洲 景子です」

女将さんは一夏にお辞儀をする。

大人な女性の対応だ。気品 というモノを感じる。

「不出来の弟と学習能力皆無な奴でご迷惑をおかけします」

「何で！？俺の扱い酷いよ千冬さん！？」のっづづく

ン・・・

「言つた通りだろ？」「

「ゴメンナサイ……」はい、読心。

久しぶりに飛んで来たよ出席簿^{キケンブツ}…相変わらず頸動脈狙いは怖いつて…

「あらあら織斑さんつたら、弟さんと黒時さんには厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので」

・・・俺、そんなに迷惑掛けない。寧ろ俺が被害にあつて
る？

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるように

なっていますから、そちらをご利用なさってくださいな。

場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし

生徒一同は、はーいと返事をし、旅館の中にへ向かつて行つた。

初日は終日自由時間。食事は各自、食堂でとの事。

「ね、ね、ねー。おりむー、くうちー」

この呼び方、間違いなくのほほんだ。スーパー・スロー並の速度で近づいてくる。

「2人の部屋どこ? 一覧に書いてなかつたー。遊び行くから教えて~」

その言葉で周囲にいた女子が一斉に聞き耳を立てるのがわかつた。

「いや、俺も知らない。刹那は?」

「俺も知らん。まさか 床で寝ろ!とか?」

「わー、それはいいねー。私もそつじようかなー。あー、床つめたーいつて~」

「冗談だから真に受けんな

「織斑、黒時、お前らの部屋はこっちだ。ついてこい
千冬さんに呼ばれ、のほほんと別れ、ついていく。

「えーっと、織斑先生。俺たちの部屋ってどこになるんでしょうか?

?」

「黙つてついてこい」

黙つてついて行くしかないようだ。

「ここだ」

「え? ここ? て…」

ドアに張り付いている紙に『教員室』と書かれている。何故に?

「最初はお前達の2人部屋という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけるだらうということになつてだな」

はあ、とため息をついて千冬さんが続ける。

「結果、織斑は私と同室になつたわけだ。これなら女子はおいそれと近づかないだろう」「あれ？俺は同じ部屋じゃないんです？」

「…………お前は個室だ」

ほへ？ なんで？

「最初は山田先生と同室といつ話だつたんだが、山田先生が何やら動搖してな……」

だから他の先生に頼んでみると同じく動搖されてだな……」「えー……と？ 意味が掴めないというか、なんというか……。はい？」

「分からなくともいい。とにかくお前は個室だ。が、女子を連れ込むんじゃないぞ？」

面倒だからな。と言い、浴場の時間帯が書かれた紙を渡してきて教員室に入つて行つた。

なんで俺は個室？ や、イジめ？

・・・まあ個室ばんざーい……って喜んでおひつ。・・・ばんざーい

バツグに着替えなどを詰め込み、更衣室へ向かつ。

「あ、黒時くん！」

「え、うそっ！ わ、私の水着変じやないよね！？ 大丈夫だよね！？」「わ、わ～。体かつこい～。鍛えてるね～」

「後でビーチバレーやろーねー」

更衣室から出てきたであろう女子と軽い会話を交わす。

「暇だつたらねー」

まずは 海に入る。深い所まで泳いでいく。潜る。鐵を展開する。海の中を猛スピードで突つ切り、人気のない場所で浮上。鐵を解除。そして

「（ただ浮かぶ）」

何もせずに浮かぶって何か気持ちいいじゃないか。

何も考えず、ただただ浮く。あ～寝たい。でもここで寝たら沈む。

ふうー……んあ？今、上空にオレンジ色の にんじん？が旅館目

指して飛んで行つた様に見えた

「（まあ…気のせいだろ）」

心地良くなつてきて本氣で眠くなつてきたので一旦、ビーチに戻る
とじよひ。

ゆっくり泳いでビーチに戻り、第一に俺が目にしたのは

「実の姉に対して鼻の下を伸ばすやつがいる・・・」

一夏だ。近くまで行つてみるか

「一夏、鼻の下伸びてる」

シャルロットも俺と同じ感想を持つた様だ。

「確かに伸びてたな」

「刹那？シャルも…そ、そんなわけないだろ」

「さあそれはホントかねえ？」

この後軽く一夏をからかつてたら昼飯に誘われたので一緒に食堂へと向かった。

「うん。美味しい」

昼食を終えた後、女子達とビーチバレーなどで遊び、夕方。夕飯の時間だ

「でも食事の時に浴衣着用って・・・普通、逆だろ」

隣の女子達と軽く談笑をしつつ、ふと周りを見渡すと
シャルロッテがワサビの三を食べて、涙目になっていたり。
一夏の隣にいるセシリアが正座をしていてからだろうか、刺身を何回も取り落としたり。

皆が皆、この時間を楽しんでいたようだった。
そんなこんなで臨海学校初日は過ぎて行つた

臨海学校、初日。（後書き）

感想、その他、待つてます m (—) m

専用機『紅椿』

合宿一日至。

今日は午前中から夜まで丸一日EISの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。

特に専用機持ちは大量の装備が待つてゐるのだから大変だ。俺と『鐵』には関係無いけど。

「ようやく全員集まつたか。　おい、遅刻者」

「は、はいっ」

千冬さんに呼ばれ身をすくませたのは意外や意外ラウラだった。ラウラが寝坊をしたせいで集合時間に5分遅れてやってきた。

「そうだな、EISのコア・ネットワークについて説明してみる」

「は、はい。EISのコアはそれぞれが相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っています。

これは元々広大な宇宙空間における相互位置情報交換のために設けられたもので、現在はオープン・チャネルとプライベート・チャネルによる操縦者会話など、通信に使われています。

それ以外にも『非限定情報共通』をコア同士が各自に行つことで、

さまざま情報都有自己進化の糧として吸収してゐることが近年の研究でわかりました。

これらは製作者の篠ノ乃博士が自己発達の一環として無制限開放を許可したため、

現在も進化の途中であり、全容は掴めていないとの事です

「流石に優秀だな。遅刻の件はこれで許してやるわ」

ここでも説明が不十分だつたら、ラウラは何かしらの罰が下されてい

ただろう。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられた工Sの装備試験を行つよ。」

専用機持ちは専用パートのテストだ。全員、迅速に行え「はーい、と一同が返事をする。さすがに一学年全員がずらりと並んでいるので、かなりの人数だ

ちなみに現在位置は工S試験用のビーチで四方を切り立つた崖に囲まれている。

ドーム状になつてゐるのが学園のアリーナを連想させる。

「ああ、篠ノ乃。お前はちょっとこっちに来い

「はい」

打鉄用の装備を運んでいた篠は千尋さんに呼ばれてそびへりへ向かう。「お前には今日から専用

「ちーちやーーーーーーん！ー！」

「ずどどどど……！砂塵を上げながら人影が走つてくる。

IISが何かを装備でもしてゐるのだろうが・・・問題はその人影が

「（工の声、あの見た目・・・）」

「…束」

だということ。

「やあやあー会いたかったよ、ちーちゃんーさあ、ハグハグしよう

！愛を確かめ

バカ

ぶへつ

飛びかかってきた束を片手で掴む。しかも顔面。思いつきり指が食い込んでいた。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクロードねつ」
そしてその拘束から抜け出す束もただ者ではない。

よつ、と着地した束は、今度は篠の方を向く。
「やあー！」

「……どいつも」

「えへへ、久しぶりだね。いつして食つのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、篠ちゃん。
特にあつぱいが」

がんつー！

「な、殴つてから言つたあ
ひどい！ 篠ちゃんひどい！」
し、しかも日本刀の鞘で叩いた！

頭を押さえながら涙目になつて訴える束。 そんな2人のやりとりに
「え、えつと、この合宿では関係者以外」

「んん？ 珍妙奇天烈なことを言つね。E.Sの関係者というなら、一
番はこの私において他にいないよ」

「えつ、あつ、はいつ。 そうですね・・・」
真耶ちゃん轟沈。 てか、束に何を言つても無駄だ。

「おい束。自己紹介くらいしる。うちの生徒たちが困つている」

「えー、めんぢくさいなあ。 私が天才の束さんだよ、はりー。終わ
り」

その場でぐるんと回つてみせる。 ぽかんとしていた一同も田の前の人物が誰か気づいたらしく、騒がしくなつた

「はあ……もう少しまともにできんのか、お前は。そら一年、手が

止まつてこるや。」二つの「」は無視してテストを続ける。

「じゃつせひどいなあ、ひがりに束さんと呪んでいいよ？」

「うるさい、黙れ！」

……也。本題に入るまで意識を放棄しておけば、

束の話を聞くのは第三者であつても疲れると云うが、何というか・・

「ん~? おや? あー! 久しぶりだねえせつちゃん!」

アサヒビューラッピング

t t t t

七
三
才
殺

「やついたるに似つかふやうの氣氛が、さうしたてんすね。」

「？なに言つてんだ？」というより束さんと知り合いだつたのか
俺が自由に生き始めた頃の嫌な話だ。一度、深呼吸をして落ち着く。
すうー…はあー。

「いや、悪い。なんでもない。織斑先生話を進めてください」
辺りを見回したが、全員がぽかーんとしていた。

「むー。ひどいなあ、せつちゃん。束さんの事を無視するなんて
む、無視だ。無視。無視、絶対。

「あ、あの、それで、頼んでおいたものは・・・？」

空気を読んだのか、筹が躊躇いがちに訊く。

「うつふつふつ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をじ覽あれ！」

びしっと直上を指さす束。その言葉に従つて皆が空を見上げる

ズズーンッ！

「うわっ！？」

いきなり激しい衝撃を伴つて、なにやら金属の塊が砂浜に落卜して
きた。

銀色をしたそれは、次の瞬間正面らしき壁がばたりと倒れてその中
身を俺たちに見せる。

そこにあつたのは

「じゃじゃーん！」れぞ筹けやん専用機」と『紅椿』^{あかづえ}！全スペック
が現行ISを上回る束さんお手製ISだよー」

真紅の装甲に身を包んだその機体は、束さんの言葉に応えるかのように動作アームによつて外へと出でくる。

全スペックが現行ITSを上回る・・・あまり良い響きではないように感じる。

最新気鋭にして最高性能機つてことか。

「さあ！ 篠ちゃん！ 今からファイティング＆パーソナライズをはじめようか！」

私が補佐するからすぐに終わるよん」

「……それでは、頼みます」

「堅いよ。実の姉妹なんだし、いつもとキャッチーな呼び方で

「

「はやく、はじめましょう」

とつづく島もないつてトコロか・・・

「ん~。まあ、そうだね。じゃあはじめようか

び、とリモコンのボタンを押す束

すると紅椿の装甲が割れて、操縦者を受け入れる状態に移る

「篠ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、後は最新データに更新するだけだね。

わ~、ひ、ほ、ぱ」

コンソールを開いて指を滑りせる束。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ。

あとは自動支援装備もつけておいたからねーお姉ちゃんがー」

「それは、じうも

幕と束の間には何かあったような感じだ。

「ん~、ふ、ふ、ふふ~ 幕ちゃん、また剣の腕前あがったねえ。
筋肉の付き方を見ればわかるよ。

やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いなあ」

「・・・・・・・」

「えへへ、無視されちつた。 はい、フッティング終了。 超
早いね。さすが私」

無駄話をしながらも束の手は休む」となく動き続いている
それはもうキー・ボードを打つと言いつつもピアノを弾いているかの
よつな動きだ。

「(束^{ハヤシ}が作った最高性能機 紅椿。近接戦闘を主としたHS...つ
てだけじゃなさやつだが...)」

左右に一本ずつの日本刀型ブレード以外、目立つ装備は見当たらな
い。

「あの専用機つて篠ノ之さんがあるの?...?身内つてだけで
「だよねえ。なんかずるじよねえ」

群衆の中からそんな声が聞こえる。その声に素早く反応したのは束
だった。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな?有史以来、世界
が平等であったことなど一度もなによ」

ピンポイントに指摘を受けた女子は氣まずそつに作業へと戻つて行
つた。

だが、まあ、世界が平等であったことなど確かに無い。事実なのだ。
「(平等なんてモノは無い。今までも誰かの上に誰かが立ち続けて
きた。

そして、これから世界が全て平等になるなど・・・ただの戯言だ)

L

自分の生きてきた境遇を思い出しながら皮肉つてると

二二二

(恐らく東が叫び出しだす) ミサヘルア、一ノ発のミサイルが放たれた。

それは紅椿を纏い、一刀の持つ箒へと飛ぶ。

「やれるー。」の紅椿なら「...」

言葉通り、右脇下に構えた刀を振るい、ミサイルを撃墜した。ふと、千尋の方に目を向けると、厳しい目つきで束を睨んでいた。

事に。

「たつ、た、大変です！　お、おお、織斑先生っ！」

いつもお隠して、ふりよりも遙かに隠している三田先生。

「いい、これを！」

渡された携帯端末を見た千冬さんの表情が変わる。

「特命任務レベルA、現時刻より対策を始められたし……」

それが、そのハーヴィーで説教移動をしていた
「うう。機密事項を口こするな。主徒たちこ聞こえる」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは？」

「ひ、一人欠席していますが、それ以外は」

何やら小声で会話をしていたのだが、生徒たちの視線に気づいてか、手話に切り替えていた。

「（一時間前…ハワイ沖…第二世代…軍用…IIS『銀の…福音…制御下…離れ…監視…空域…離脱』）」

千冬さんと山田先生の手話から読み取れた事を途切れ途切れにまとめる。

ぶつちやつけ、俺は軍関係の暗号程度、簡単に読める。

「そ、それでは、私は他の先生にも連絡してきますのでっ」

「了解した。全員、注目！」

「現時刻よりIIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト

稼働は中止。

各班IISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え……？」

「ちゅ、中止？ なんで？ 特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

不測の事態に女子一同はざわざわ騒ぎ始める。

「ひとつと戻れ！ 以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！ いいな！！」

「「「は、はいっ！」」

千冬さんの一喝で全員が素早く片付けを始める。

「専用機持ちは全員集合しろ！ 織斑、オルコット、黒時、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰

それと、篠ノ之も来い」

「はい！」

「（専用機を手にして間もない篠を作戦に参加させるつもりなのか・

・・？）」

正直、不安に駆られるが・・・千冬さんを信じてみよう・・・。
こうして、専用機持ち全員は教師について行った。

専用機『紅椿』(後書き)

風邪をひいて頭がズキズキ……。(・・・)
けど、気合いで治した!

刹那クンのトラウマ(笑)はこいつか出てくれるでしょう(・・・)b

感想、その他、待ってます~。

『特殊任務行動』 開始。

「では、現状を説明する」
旅館の一一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間では、専用機持ち全員と教師陣が集っていた。

照明を落とした薄暗い室内に、ぼうっと大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

専用機持ちの面々が呼び出され、千冬さんが口にしたのは

「一時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型軍用 I.S. シルバリオスペル『銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの報告が入った」

先程読み取った手話と同じ内容だ。一夏と笄を除く専用機持ちは厳しい顔持ちになっていた。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はそこから一キロ先の空域を通過することが分かった。

時間にして五十分後。学園上層部の通達により、我々がこれを対処することになった。

教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よつて本作戦の要は専用機持ちに担当してもらつ「うう」
軍用 I.S.・・普通の I.S. を遙かに凌駕する機動性、エネルギー量を備えている化け物だ。

そんな化け物を相手にするのだ。まあ…俺の鐵も化け物じみた I.S. だけど…

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するよ」
「はい」

「目標IISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは一ヵ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。

情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも一年の監視がつけられる」

「了解しました」

俺達に『銀の福音』のスペックデータが出されると

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型。……私のIISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両立を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を

上回ってるから、向こうのほうが有利……」

「（銀の福音・・・ああ、鐵のデータを元に作った機動性が高い機体だったか？

広範囲殲滅　　IISの装備は未知数だな）」

「IISの特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴィアイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、IISのデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

皆が真剣に意見を交わしているが、一夏と筈は話に入っていない。

やはり初めての緊急事態に頭が回らないのだろう。仕方のない事だ。

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は一四五〇キロを超えるとある。

アプローチは一回が限界だらう」

「一回きりのチャンス……といふことは、一撃必殺の攻撃力を持つ機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に全員が一夏へと目を向ける。

「え……？」

「一夏、あなたの零落白天で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃

に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか

「しかも、目標に追いつける速度が出せるH/Sで無ければいけないな。

超高感度ハイパーセンサーも必要だろう

「一夏には超音速下での戦闘時間がないからな……痛い所だ」

「ちょっと、ちょっとと待ってくれ！お、俺が行くのか！？」

「…………当然」

5人の声が見事に重なった。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟が無いなら、無理強いはしない」

千冬さんにそう言われて、一夏の雰囲気が変わった。やる気を帶びた雰囲気へと。

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で

最高速度が出せる機体はどれだ？

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ

『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、超高度ハイパーセンサーもついてます」

超音速下での戦闘訓練時間は一〇時間を超えている、とセシリアは付け加えた。

「ふむ……ならば……ん？ そいつ言えば黒時、お前の鐵の最高速度は

「

あ、千冬さんは鐵の最高速度を教えるんだつけ。

「ええ。恐らく高機動パッケージを装備したブルー・ティアーズよりは速いかと」

俺とEIS戦闘をした事のある奴らは驚きの表情でこちらを見てくる。「わ、わたくしのブルー・ティアーズより速いなど……どういう事なんですか？」

何せ、どの専用機持ちの奴にも鐵のトップスピードは見せた事が無いのだから。

「今までお前ら相手にトップスピードを出した覚えは無い。それだけだ」

「黒時、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「セシリアの一〇時間よりは遙かに多いとか」

「そうか、それならば適任」

「

だな、と言おうとしたであらう千冬さんを、急に明るい声が遮る。
「待った待った。せっちゃんの鐵はとっても速いけど、その作戦はちょっと待ったなんだよ～！」

声の発信源 天井。見上げると束の首が逆さに生えていた。
さか

「……山田先生、室外への強制退去を」「えつ！ はつ、はいつ。あの、篠ノ乃博士、とりあえず降りてきてください……」

「ひひひ

ぐるりと空中一回転、着地。サークルのペロ口も顔負けな身のこなしだ。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もつといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング!」

「……出て行け」

「聞いて聞いて!」二のは断・然! 紅椿の出番なんだよつ! 「なに?」

「紅椿のスペックデータ見てみて! パッケージなんか無くても超高速機動ができるんだよ!」

束の言葉に応えるように数枚のディスプレイが千冬さんを囲むようになれる。

「紅椿の展開装甲を展開して、ほいほいほいと。ホラ! これでスピードはぱっちり!」

何時の間にやらメインディスプレイも乗つ取つたらしく、説明が始ま。 が、

「(何故、束が福音を止める為に態々出しあばつてくれるのか...)

コイツは興味が沸かなければ、とことん興味が無い筈なんだが...」

俺は展開装甲の説明を聞く事より、束に対する不信感が募る。

「ちなみに紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。」これぞ第四世代型の田標である即時万能対応機リアルタイム・マルチロール・アクションつてやつだね。

にやはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい」

説明を半分くらい聞いてなかつた所に

第四世代の言葉。

・・・第四世代の登場、束が紅椿を作戦に進める事、なにかがあり
そつなので警戒を怠らないでおこつ

作戦の内容は一夏と暁による田標の追跡、及び迎撃を目的と
された。

作戦開始は三〇分後。

一夏と暁意外の専用機持ちは出る幕が無もそつだつた・・・。

作戦結果・・・（前書き）

自分でもちょっと、うん…どーだろ、コレ? つて感じなので、最後の方が分かりにくいかな…。

作戦結果・・・

時刻は十一時半。

『銀の福音』の追跡及び、迎撃作戦開始時刻。
俺は作戦会議を行つていた大広間より抜けだし、プライベート・チャネル個人通信を開く。

『・・・樋無さん。今、大丈夫ですか?』

通信先の相手は樋無さん。

『刹那くん?ええ大丈夫よ。何を聞きたいのかしら?福音の事はある程度調べたわよ』

流石、更識家・・・仕事がお早い事で。

『話が早くて助かります。聞きたいのは福音が暴走を開始した原因ですかね?』

『一時間半前に連絡が入ったと思つけど突然暴走開始。暴走原因是不明よ』

『そうですか・・・操縦者つてナターシャ・ファイルスですよね?』

『ええ、その通りよ。資料を見る限り、優秀で問題を起こす様な操縦者ではないのね』

・・・・・これは、外部から何者がハッキングが起こしたのだ
らう。

『そうですか・・・ありがとうございました。時間取っちゃつて』

『いいのよ。何か新しい情報が入り次第、連絡するわね』

『ええ、お願ひします。それじゃ失礼します』

樋無さんとの通信を切る。そして風花の間へと戻る。

大広間に戻る途中ふと、柵に腰掛ける束の姿を見かけたので静かに近寄る。

束のその手には携帯型ディスプレイ、その中には現在戦闘中の一夏と簾の映像が写されていた。

「んー。まだまだなー。展開装甲の力はそんなモノじゃないんだけどなあ」

独り言を言いつつ、一夏と簾…いや、簾と紅椿を見ているようだ。

「簾ちゃんなら、これくらいの敵なら簡単に倒せるハズなんだけどなあー。

やつぱり、まだ稼働時間が少ないからかな?」

「例え紅椿が第四世代で、相手が第三世代だからって簡単に倒せる訳じやないだろ?」

そして福音の操縦者は軍人だ。それなりに苦戦はするぞ」

ついつい束に話しかけていた。

「おや、せつちゃん。んー…そうだねえ、敵さんがちょっと強すぎたかな?」

見誤ったかな。と束が呟いた気がする。

「…まさか、お前が福音の暴走を引き起したのか?」

「んー? それはどうだろ? ねえー」

・・・・・話を逸らしたな。「コイツが犯人の可能性が99%になつた…

「なんで福音を暴走させた?」

「私が犯人だと決まってないのに犯人扱いとは、せつちゃんは酷いなあ」

「…例え話として聞け。妹にI-Sを渡したのは妹を華々しくデビューさせるつもりか?」

束は答えない。・・・別にいいが。ま、俺には関係ない事だと解釈する。

「ところで、せつちゃん」

「なんだ？」

「いつくんが危ないね。そろそろ白式のエネルギー切れの時間だよ」
そう言って俺に携帯端末の画面を見せつけてくる。

画面内に写る光景

「一夏！私が動きを止める！」

「わかった！」

言うなり、篝は一刀流で突撃と斬撃を交互に繰り返す。しかも、腕部展開装甲が開き、

そこから発生したエネルギー刃が攻撃に合わせて自動で射出、福音を狙う。

「はあああっ！――」

篝の猛攻により、隙が出来た福音に一夏が突っ込む。

「――a……」

甲高いマシンボイス。福音のウイングスラスターに仕組まれた砲門が開いた。

数は三十六。全方位に向けての一斉射撃。銀色の翼に装備された特殊武装だ。

「やるなっ……！だが、押し切る……！」

篝が光弾の雨を紙一重で躰し、迫撃する。

隙が出来た。

「――」

突然、何かを見つけたであろう一夏が福音と逆の方向へ向かった。
何をやつてるんだ？ 今のはチャンスだつただろう。

「うおおおおッ！…」

瞬時加速^{イグニッシュョン・ブースト}と零落白夜。その両方を最大出力で行い、

一発の光弾に追いついた一夏。そしてそれをかき消す。

「何をしている！？せつかくのチャンスに」

「船がいるんだ！海上は先生たちが封鎖したはずなのに
くそっ、密漁船か！」

一発の光弾をかき消した後、《雪片式型》の光刃が消え、装甲が閉じる。エネルギー切れた。

今の行動により、最大のチャンスを失い、作戦の要が無くなつた。
「馬鹿者！犯罪者などをかばって……。そんなやつらは……！」

「箒！」

「ツ　　！？」

「箒、そんな　そんな寂しいことは言ひな。言ひなよ。力を手に
したら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、
箒。らしくない。全然らしくないぜ」

「わ、私は、は……」

箒は明らかな動揺をその顔に浮かべ、それを隠すかのように手で覆う。

その時に落とした刀が空中で光の粒子へと消えた。

具現維持限界^{リミット・ダウン}…。つまりエネルギー切れ。ここは実戦だ。

「箒いいいつ！…」

一夏は刀を捨て一直線に箒へと向かう。恐らく最後のエネルギー全てを使っての瞬時加速^{イグニッシュョン・ブースト}。

画面の奥では福音が再び一斉射撃モードへと入っていた。しかも、今度は箒に照準を絞っている。

エネルギー切れのEVAアーマーは恐ろしくももうい。それは第四世代型とはいえない代型だ。

絶対防御分のエネルギーは確保していたとしても、あの連射攻撃を一度受けるのはアウトだ。

「ぐああああ…」

箒を庇う様に抱きしめた一夏の背に光弾が一斉に降り注ぐ。

「う……あ……」

一夏の体は海へと落卜していった。

ここに束は端末のディスプレイを閉じる。

束は特に焦つた様でも、一夏を心配した様でも無い顔をしているが、俺は作戦会議室へと戻る。千冬さんからの指示を待たなくては。

『作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば召集する。それまで各自現状待機しろ』

一夏と箒が海から引き上げられ、戻つて来た所に千冬さんの言葉。そして現在、一夏は墮とされて三時間以上目を覚ましていなかつた。教師陣は福音の搜索を行つているとの事だが、まだ見つかってはない。

「作戦は失敗で、福音は搜索中。一夏は重傷。箒は敗北。これが待ち望んでた光景か？」

誰に言うでもなく、この事件を引き起こした犯人に尋ねてみたくな

つた。

「…………」

一夏の傍らに控えている簫は、もうずっとじつじつと垂れている。

(私のせいだ・・・)

不意に思い出した思い出の中の一夏は笑っていた。けれど、今はその笑顔は無い。

(私が、しつかりとしないから、一夏がこんな田に――)

ぎゅうっとスカートを握りしめる。自らを戒めるかのように、強く。ただただ強く。

バンッ！といふ音に一瞬驚いた簫だったが、その方向に視線を向ける気力はない。

「あのさあ」

話しかけてくる鈴に、けれど簫は答えない。答え、られない。

「一夏がこうなったのって、あなたのせいなんでしょう？」

「…………」

「で、落ち込んでますってポーズ？　つざけんじゃないわよー！」

突然烈火の如く怒りをあらわにした簫は、うなだれたままだった簫の胸ぐらを掴んで無理矢理立たせる。

「やるべきことがあるでしょ？　今一戦わなくて、どうすんのよ！」

「わ、私は、もう口は使わない……」

「ツ――」

バシンツ！

頬を打たれ、支えを失った簫は床に倒れる

そんな簫を再度鈴は締め上げるように振り向かせた。

「甘つたれてんじやないわよ……専用機持ちつづーのはね、そんなワガママが許されるような

立場じやないのよ。それともアンタは

」

鈴の真っ直ぐな、怒りに似た、赤い感情を持つ瞳が、簫の瞳を直視する。

「戦うべきに戦えない臆病者か」

その言葉で簫の瞳、その奥底の闘志に火がついた。

「…………」

「どうしようと囁つんだ！もう敵の居所もわからないー戦えるなら、私だって戦う！」

ようやく自分の意思で立ち上がった簫を見て、鈴は一息つく。
「やつとやる気になつたわね。……あーあ、めんどくさかった」
「な、なに？」

「場所なら分かるわ。今ラウラが

「出たぞ。」そこから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ス

テルスマードに入っていたが、

どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ

「流石ドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん…。お前の方はどうなんだ。準備は出来ているのか」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリ亞の方こそどうなのよ」

「ああ、それなら」

「たつた今完了しましたわ」

「僕も準備オッケーだよ。いつでもいいけど」「けどなによ？」

「刹那がこの作戦には参加しない…って言つてて」

「はあ！？なにフザけた事を言つてんのよアイツは！」

「僕も説得してみたんだけど絶対に行かないみたいなんだ…」「はあ！？つたく、参加しないなら、もういいわ。で、あんたはどうするの？」

シャルロット、セシリア、ラウラ、鈴の視線が幕へ向けられる。

「戦う…戦つて、勝つ！ 今度こそ、負けはしない！」

こうして、刹那を除く専用機持ち五人が『銀の福音』撃墜作戦会議を始めたのだった。

「・・・・・」

俺は携帯端末を衛星とリンクさせ、福音の撃墜を行つた五人の行動を見る。

だが、見ていろ…というよりは、眺めながら考え事をしていた。福音と、その操縦者「ナターシャ・ファイルス」の事…。

福音と彼女は空を飛ぶ事が好きだ。
ナターシャ

福音の事を『子』として扱つていいのだ。

だが、このような事態を引き起こして、福音が墮とされたら…空を飛ぶ為の翼は一度と戻つてこない事だろう。だがやらなければならない。

そんな相手を暴走に追いやった犯人の目的は恐らく
「（ただ一人の妹の為に福音と彼女を犠牲に いや、実験体にし
たのか……）」

こんな壮大で馬鹿な話は正直、ウンザリする。

「（全ての原因の姉が演出、何も知らない妹の演じる茶番じゃねー
か）」

だが例え馬鹿らしくても、必ず福音の暴走を止めなければならぬ
のだ。

今止めなければ、操縦者の生命状態も危うくなつてくれる。

「はあ・・・アレを使う羽目になつたな」

俺は一息つき、外に出る。

そして鐵のデータを開く。

そこには

『Execution · mechanical · failure』
唯一使用特殊能力の文字。

『エクセキューション・メカニカル・フェイル
強制執行機能停止』

「俺がお前の『子』の翼を消す。・・・やらなければならぬ事な
んだよ。でなけりや、

お前たちの暴走は止められない

独断行動を先行して行つた五人が発つて時間はそこそこ経過した。
「早く終わらせるとしますか」

鐵を開いた。福音のいる方向へ加速始めた。

刹那が行動を起こす、少し前。
とある一室で眠っていた筈の一夏の姿が消えていたのはまだ誰も知
らない・・・。

作戦結果・・・（後書き）

うむん。束さんのキャラおかしいかな？

刹那クンのワンオファビリティ出ました！
その能力は次回に先送り～。

ちょっとおまつでましたよね？

感想、その他、待ってます（p_・・・）

無断撃墜作戦 開始。（前書き）

刹那クンの登場場面

……無！

無断撃墜作戦 開始。

刹那が行動を開始する前
先行して行つた専用機持ち五人の戦闘

「・・・・・」

海上二〇〇メートル。

そこで静止していた銀の福音は、まるで胎児のような格好でうずくまっている。膝を抱くように丸めた体を、守るように頭部から伸びた翼が包む。

?

不意に福音が顔を上げる。次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こす。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！」

五キロ離れた場所に浮かんでいるT5『シュヴァルツェア・レーベン』とラウラは、

福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した。

砲撃を行つた『シュヴァルツェア・レーベン』は砲撃パッケージ『パンツァー・カノーニア』を装備している
(敵機接近まで……四〇〇〇……二〇〇〇 くつ！予想よりも
速い！)

あつという間に距離は一〇〇〇メートルを切り、福音がラウラへと迫る。

その間もずっと砲撃を行つているものの、福音は翼から放たれるエネルギー弾によって半数以上撃ち落としながらラウラへ接近していく。

機動力に特化した福音は三〇〇メートル地点からさうに急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばす。

避けられない！

しかし、ラウラはにやりと口元を歪めた。

「セシリアー！」

伸ばした腕が突然上空から垂直に降りてきた機体によつて弾かれる。青一色の機体　　強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナード』を装備した。

ブルー・ティアーズによるステルスマードからの強襲だった。

『敵機Bを認識。排除行動へと移る』

「遅いよ」

セシリ亞の射撃を避ける福音を、真後ろから別の機体が襲う。

それは先刻の突撃時にセシリ亞の背中に乗っていた、ステルスマードのシャルロットだった

ショットガン二丁による近接射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩す。

けれどそれも一瞬のことで、すぐさま三機目の敵機に対して『銀の鐘』^{ベル}による反撃を開始した。

「おつと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」

リヴァイヴ専用防御パッケージは、实体シールドとエネルギー・シールドの両方によって攻撃を防ぐ。
防御の間にシャルロットの『^{ラピッド・スイッチ}高速切替』

加えて、セシリ亞の高速機動射撃、ラウラの砲撃により、福音はじわじわと消耗をはじめる。

『……優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

全方向にエネルギー弾を放つた福音は、次の瞬間に全スラスターを開いて強行突破を計る。

「させらかあつ！－！」

海面が膨れあがり、爆ぜる。

飛び出してきたのは真紅の機体『紅椿』と、その背に乗る『甲龍』であった。

「離脱する前にたき落とす！」

福音へと突撃する紅椿。その背から飛び降りた甲龍は機能増幅された衝撃砲を開き、放つ。

『！－！』

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱、その背後からの衝撃砲の弾雨が降り注ぐ。

「やりましたの！？」「

「まだよー」

『《銀の鐘》最大稼働 開始』

両腕を左右いっぱいに広げ、さらに翼も自身から見て外側へと向ける。

刹那、眩いほどの光が爆ぜ、エネルギー弾の一斉射撃がはじまった。

「くつ－！－！」

「第一一僕の後ろに！」

前回の失敗を踏まえて、紅椿は機能限定状態である。展開装甲の自動多用を防ぐため、

設定をし直したのだ。そう設定できたのは防御をシャルロットに任せられるからだ。

しかし、弾雨を防ぐ中、実体シールドが一枚、破壊される。

「ラウラ！セシリア！お願い！」

「お任せになつて！」

後退するシャルロットと入れ替わりにラウラとセシリアがそれぞれ左右から射撃をはじめる。

「足が止まればこっちのもんよ！」

直下からの鈴の突撃。双天牙弾による斬撃の後、至近距離からの衝撃砲を浴びせる。

狙いは、福音の頭部のマルチスラスター 『銀の鐘』

「もうつたあああつ！」

エネルギー弾を全身に浴びながら、鈴の斬撃。かなりの消耗をしながら斬撃は福音の片翼を奪う。

「はつ、はつ　…びつよ　　ぐつ！？」

片翼を失つてもまだ、姿勢を立て直し、鈴へと回し蹴りを叩き込み、海へと墜とす。

「鈴！おのれつ　　…」

篝は両の手に刀を持ち、福音へ斬りかかる。刃は福音の右肩へと喰い込んだ。

（獲つた　　…）と確信した所、信じられない事に左右両方の刃を手のひらで握りしめる。

「なつ！？」

刀身から放出されるエネルギーに装甲が焼き切れるが、構わず福音は両腕を最大まで広げる。刀に引っ張られ、無防備の篝に片翼だけ残った砲口を向ける。

「第一武器を捨てて緊急回避をしよう。しかし、篝は武器を手放さない。」

(……！」引いて、何のための……何のための力かっ！…)
エネルギー弾が触れる寸前に、ぐるんと紅椿は一回転をする。

その瞬間、爪先の展開装甲が簫の意志に答えるよじて開き、エネルギー刃を発生させる。

「たあああああつ！…」

かかと落としのよつやな格好でエネルギー刃の斬撃が決まる
ついに両方の翼を失った福音は、崩れるように海面へと墜ちていった。

「はつ、はつ、はつ……！」

「無事か！？」

珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、簫は乱れた呼吸をゆっくりと落ち着けていく。

「私は……大丈夫だ。それより福音は

「私たちの勝ちだ」と誰かが言おうとしたその瞬間、海面が強烈な光の珠によつて吹き飛んだ。

「！？」

球状に蒸発した海は、そこだけが時間の流れの無いよつやな空間に青い雷を纏つた福音がいる。

「これは……！？一体、何が起きているんだ……？」

「！？まずい！これは『第一形態移行』だ！」

ラウラが叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのように福音が顔を向ける。

無機質なバイザーに覆われた顔からは何の表情も読み取れない。けれど、

そこに確かな敵意を感じて、各エスは操縦者へと警鐘を鳴らす。

しかし 遅かった。

『キアアアアアアアア……！』

まるで獣の咆哮のよつた声を発し、福音はラウラへと飛び掛かる。

「なにつ！？」

あまりの速さにその動きに反応できず、ラウラは脚を掴まれる。そして、切断された頭部から、ゅうくつ、ゅうくつと、まるで蝶がサナギから孵かえるかのように工ネルギーの翼ひが生えた。

「ラウラを離せえつ！」

シャルロットはすぐさま武器を切り替えて近接ブレードによる突撃を行う。

けれど、その刃は空いた方の手で受け止められてしまった。

「よせ！ 逃げろ！ こいつは！」

その言葉は最後まで続かず、ラウラはそのままその眩いほどの輝きと美しさを合わせ持つた

工ネルギーの翼に抱かれ、工ネルギー弾を零距離で喰らい、海へと墜ちた。

「ラウラ！ よくもつ……！」

ブレードを捨て、シャルロットはショットガンを呼び出す。福音の顔面へと銃口を当て、引き金を引いた。

「ドンッ！」

しかし、その爆音はショットガンのものではなかつた。

胸部から、腹部から、背部から、装甲がまるで卵の殻のようにひび割れ、小型の工ネルギー翼ひが生えてくる。それによる工ネルギー弾の迎撃がショットガンを吹き飛ばし、シャルロットの体も吹き飛ばした。

「な、何ですの…? IJの性能……軍用とはいえ、あまりに異常な

」

再び高機動による射撃を行おうとしていたセシリアの、その眼前に

福音が迫る。

『瞬時加速』

それも、両手両足の計四ヶ所同時着火による爆発

加速だった。

「くつ！？」

長大な銃は接近に弱い。距離を置いて銃口を向けるが砲身を真横に蹴られてしまつ。

そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。セシリアは蒼海のへと沈められた。

「私の仲間を よくも！」

急加速によつて接近した篝は、続けざまに斬撃を放ち続ける。

「つおおおおつ…」

互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。徐々に出力を上げていく紅椿に、わずかに福音が押され始める。

(いける！ これなりつ)

必殺の確信を持つて、兩用の打突を放つ。しかし

キュウウウン……。

「なつ！また、エネルギー切れだと…? ぐあつー」

その隙を見逃さず、福音の右腕が篝の首を捕まる。

そして、ゆつくつとその翼が篝を包み込んでいった。(すまない。一夏……ー)

絶望的な状況の窮に、白が近づいていた。
その白は雪羅という守る為の力を纏いながら

無断撃墜作戦 開始。（後書き）

原作の一部を書いただけになりますた・・・。

福音擊墜作戦 終了。（前書き）

前々回の内容を変えました。

この話を書いてると「あれ? ビーしょ...」
と、悩んだのです・・・

まずは前々回の最後を見直してから

ビートル

福音撃墜作戦 終了。

「ぐへ、うへ……」

きつさりと締め上げられ、圧迫された箒の喉から苦しげな声が漏れる。

福音の手は硬く箒の首を掴んで離さない。
さらにはエネルギー状へと進化した『銀の鐘』が紅椿の全身を包んでいた。

(これまでか……。情けない……)

ぱつと光の翼が輝きを増していく。一斉射撃への秒読みが始まる
中、
箒の頭の中にはただ一つのことだけが浮かんでいた。

会いたい。

一夏に、会いたい。

すぐに会いたい。今会いたい。

ああ、ああ、会いたい。

「こち、か」

「一夏……」

さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めてまぶたを閉じる。
イイイインッ……！

『一っ』

突然、福音は箒を掴んでいた手を離す。

いきなりの出来ごとに混乱している箒が、瞳を空けた時に見たのは

強力な荷電粒子砲に

よる狙撃を受けて吹き飛ぶ福音の姿だった。

(な、何が起きて　　)

戸惑う暁のつ身に屈いたのは、さつきからずつと願い思つて止まない声だった。

「俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ！」

暁の潤んだ視界に写るのは

白式第一形態・雪羅を纏つた一夏であった。

「（？　新しい反応…？福音と先に行つた五人以外で誰がＩＳを）」

ＩＳのコア・ネットワーク情報によつて位置情報を確認している剝那の鐵に、

新しいＩＳ反応が出現する。このＩＳは

「（一夏！？なんで動ける？あんな重傷でどうやって…）」

白式が福音のいる位置に達したみたいで、恐らく戦闘が始まつたと予測できる。

「（・・・ちょっと急ぐか）」

何故、一夏が動けるのか、今はいい。

無理をして戦闘に参加するなら、それをサポートしてやらなければ。

「逃がさねえ！」

一メートル以上に伸びたクローが福音の装甲を斬る。シールドエネルギーに阻まれはしたが、

その一撃は確実に福音を捉えていた。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルAで対処する』

エネルギー翼を大きく広げ、さらに胴体から生えた翼を伸ばす
そして次の回避の後、福音の掃射反撃がはじまった。
一夏は避けようとはせず、左手を構えて前へと飛ぶ。

雪羅、シールドモードへ切り替え。相殺防御開始。

キンッ！ という甲高い音を鳴らして、左腕の雪羅が変化。
光の膜が広がって、福音の弾雨を打ち消していく。

光の膜 つまり、零落白夜のシールドだ。

「うおおおっ！」

強化された白式は大型四機のスラスターは二段階瞬時加速を可能とする。

これで福音のスピードに十分追いつける。

『状況変化。最大攻撃力を使用する』

福音の機械音声が告げると、回転しながら翼の砲口が全て開き、全方位への弾雨を降らせる。

全方位・・・それはダメージを負った仲間達にも被害が及ぶという事。

仲間の盾に走る一夏に

「何やつてんのよーあたしたちは腐つても代表候補生よ？余計な心配しないで、

さつさと片付けちゃいなさいよー！」

「鈴……わかった！」

一夏は仲間を信じ、雪片と雪羅、それだから光刃を作り、福音へと向かつて言った。

(私は、ともに戦いたい。あの背中を守りたい！)

強く、強く願う筈。

そして、その願いに応えるよつて、紅椿の展開装甲から赤い光に混じつて黄金の粒子が溢れ出す。

「これは……？」

ハイパー・センサーからの情報で、機体のエネルギーが急激に回復していくのが分かる。

『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……完了。

項目に書かれているのはワンオフ・アビリティーの文字だった。
(まだ、戦えるのだな？ならば)

一夏から渡されたリボンで髪を縛り、気を引き締める筈。

(ならば、行くぞ！ 紅椿！)

赤い光に黄金の輝きを得た真紅の機体は、夕暮の空を裂くよつて駆けた。

「ぜらあああつ……」

白式の零落白夜の光刃がエネルギー翼を断つ。

しかし、両方の翼を斬るのは至難の業で、またしても一撃目を回避されてしまう

そうしている間に失った翼は再度構築されて、一矢仇へと強力無比な連續射撃を行ってきた。

エネルギー残量=100%

予測稼働時間、三分。

(くそつーー)のままじゃ……)

「一夏！」

「第一？お前、ダメージは」

「大丈夫だ！それよりも、これを受け取れ！」

「な、何だ…？ エネルギーが 回復！？」

「今は考えるな！行くぞ、一夏！」

「お、おう！」

「うおおおっ！」

福音への横薙き。回避して光弾を発射する準備をする事は想定済みだ。

「第一！」

「任せろー！」

白式に向けられた翼を紅椿の斬撃で断ち切る。
そして、追い打ちの回し蹴り。

体勢を崩した福音へ突き進む一夏。

「おおおおおっ！」

「『エクセキューションメカニカルフェアリー
強制執行機能停止』：発動」

黒月の刀身が割れ、その中から蒼黒い雷を纏ったエネルギー刃が具現する。

刹那は目標の福音と、今までに福音に突き進む一夏を見つけた。

「ん？これは　俺が出る必要は無さそうか？」

零落白夜の刃を福音の胸に突き立てている所を見ると刹那の出番は

体勢を崩していた福音がエネルギー翼を使い強引に一夏の腕を払う。

「なつ！？」

驚愕した一夏、その体勢は無防備。そこへ福音が翼を向ける。

「ちいいつ！！」

『イグニッショングースト』瞬時加速。

刹那は福音に突撃する。

放たれた光弾を打ち消し、黒月の光刃でエネルギー翼を断ち切る。

『！？ 敵機より未知のエネルギー攻撃。右エネルギー翼再生不能』

「刹那！？ 助かっ」

「いいから、福音を止めるぞ！ 片翼はもう再生しない。俺がもう片

翼を消す」

その後は、お前がトドメを刺せ。と付け加え、福音へと向かう。

「お、おう！」

福音は片翼でもバランスを崩さない。体を丸め、全方位攻撃の準備に移行する。

「させねえよ！」

『エクセキュー・ションメカニカルフェアリアー』一気にも肉薄し、唯一使用能力

通称エクセキュー・ション

光刃で福音の残った翼を切る。・・・ これで、福音は一度と飛べない。

「一夏つ！ 今だ！」

「ああ！」

零落白夜の刃を腰に構え、福音に突き立てる。

「おおおおおつ！ ！」

飛びなくなつた福音の抵抗だらつ、動ける限界の状態で一夏の首へ手を伸ばす。

その指先が喉笛まで辿り着くギリギリで、銀のIISは完全に動きを

止めた。

ISアーマーが消え、操縦者のナターシャが海へと墜ちる……が海面に触れる直前、

鈴がナターシャを拾つた。・・・

周りにいた仲間たちと田線を交わし合ひ、頷く。

これで『銀の福音』撃墜作戦は終了。

「……終わつたな」

誰かの一言が終わりを告げた。

福音擊墜作戦 終了。（後書き）

次回（恐らくかなり短いであろう話）で三巻内容は終わります。
色々書いた感がハンパ無いですが、ね…。b

感想、その他、待っています（・3・）

とこりで、ミリリットルって漢字で書けたんですね！
『耗』って書くらしいですよ。
唐突に何言ってんだ？俺は…。

前回、言つた通り短めですねー。
では、どーぞー。

「作戦完了」と言いたいところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。

帰つたらすぐ反省文の提出と懲罰用のトレーニングを用意してやる

「・・・・・　はい」

戦士たちの帰還…それはそれは冷たいものだった。帰つて直ぐに正座。三十分は経つた。

「特に黒時、お前は先に行つた五人を止めようとしなかつたのでプラスで罰を取れるからな」

「・・・・・　理不尽。いや…妥当、か。

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……。け、怪我人もいますし、ね？」

「ふん……」

怒り心頭の千冬さんに対し、山田先生はおひおひわたわたりとしている。

さつきから救急箱を持つてきたり、水分補給パックを持つてきたりと忙しい。

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちやんと服を脱いで全員見せてくださいね。

「あつ！　だ、男女別ですよ！　分かつてますか、織斑くん、黒時君！」

俺、今、変態扱いされた気がする……。

「それじゃ、皆さんまずは水分補給をしてください。夏はそのあたりも意識しないと、

急に気分が悪くなりますよ

先生からドリンクを受け取り、口に含む。

「…………」

「どうかしたんですか？織斑先生」

一夏をじーっと見ていた千冬さんに声をかけた。

「…………しかしまあ、よくやつた。全員、よく無事に帰ってきたな」

千冬さんなりに心配をしてくれていたのだろう。照れ隠しだらう、後ろを向いて顔を逸らした。

あ、わっさと部屋出といへ。女子の診断があるんだ。

早めに部屋を出る。

「…………わっさと出でけ！」」「」「」

後ろから大きな声が聞こえ、一夏が慌てて出でくる。

「ははっ」

俺は楽しく笑っていた。

「んー、ん~。」

月明かりの下、何かの鼻歌混じりに岬の柵に束はいた。

「・・・・どうだつた、今回の事件の犯人さん？良い結果は取れたか？」

突然、背後から声をかけられる。声の主は

「やあ、せっちゃん」

刹那だつた。

「ん~？犯人は束さんで決定なのかな？」

「いや？誰も事件を起こした張本人が束だなんて言ってないぞ」

「そつか。まあ私が犯人かは分からなけど、良い結果は取れたんじやないかな？」

「どこかの誰かが作った機体のデータか？」

「さあねえ？それはせつちゃんの御想像にお任せ」

「はいはい。・・・てか今日の昼に言い忘れてたが、せつちゃん言うな」

「え？ あんなに髪が長くて女の子みたいだったら、せつちゃんでしょ？」

「だからその事を思い出すから止めろって言つてんの」

・・・幼い頃、I-S適合者になつた俺は束に会つた。

女性だけでなく、男でもI-Sを動かせる事が出来る。と束に俺を紹介

いや、実験材料の提供をした奴に連れられて。

最初、束は少し興味が沸いたらしく、俺に会いに来たのだが…

如何せん、俺の顔立ちと髪型 かなりの長髪 のせいで

『え？ 男の子じゃなくて、女の子だよー？』

と、言われたのだ。『女の子なら はい、これ！』

束に手渡されたのはフリフリヒラヒラスカートの女物の服だった。

・・・女装、という事だ。

その頃は特に意識をしていなかつたが、

歳を重ねるにつれ（俺が実験体としての生活を止め、普通の男子として生き始めて）

昔、何とも思つていなかつた行為がトンデモなく恥な行為だと知つた。

そこまでならまだいい？馬鹿を言つた。

束は『この服は男の子が着る服なんだよ～』と、俺を騙し、女物の服を渡してきた。

俺を玩具にしてやがつたんだ・・・。

「まあ、せつちゃんって呼び方が慣れてるから変えれないけどねー」「・・・・・・・・・・」

だから、だから俺は『せつちゃん』と呼ばれると、昔を思い出す。何の躊躇いも無く、女物の服を着る 女装 をして、いた自分をつ！

「・・・・・はあ・・・・・」

深い深い溜息を吐き、束に向ぐ。

「んじやーな、束。また会う時があつたら呼び方を変えといってくれ

「それは無理かなあー。ん、じゃあね、せつちゃん。」

それ以上は言葉を交わさず、俺は旅館へと戻つて行つた。

翌日。臨海学校最終日。

I.S及び、専用装備の撤収を十時くらいに終え、今はクラス別にバスへと乗り込んでいる。

『『『はい、どうぞ！』』』といつ大きな声が聞こえた。

バスの前にいる一夏が何かやつたんだろう。

そう思い、ふと、窓の外へ視線を向ける。そこに『千冬さんと福音の操縦者』^{ターシャ}がいた。

なにか会話をしているみたいだが、声は聞こえない。

2人の会話が終わり、千冬さんがバスに戻つてくる。その顔を見る限り、案の定、いい話ではなさそうだ。

まだ外にいたナターシャと目が合つたので窓越しに軍用手話で『悪かつたな。福音の事』

『いいえ。あの子を止める為には仕方なかつたことだもの』彼女も手話で返してくれる。

『… そうか。今回の事件の犯人を追うのは構わないが、暫くは大人しくしておけよ?』

『ええ。キミに言われなくても分かっているわよ。』

『OK。なら…』

『ええ。それじゃ…』

『…また、いつか』

バスが動き出す。

俺は先程までの張り詰めた空気を消し、気分を入れ替える。

「よしつ」

そろそろ夏休みに入る。

夏休みに何をするか、今のうちから考えとこ!。

お昼ご飯の為に寄つたサービスエリアで千冬さんから、学園に帰つたら『お詫』と書いて、『武術組手』と読む地獄の宣告

をされたのだった。・・・。

36話（後書き）

もつひょっと、刹那クンのトラウマ『笑』を上手く表現したかった

。

文才が欲しいですなー。

次回からNATUYASUMIですよっ！

感想、その他、待ってます(・・)γ

Let's 鳴海&訪問者ー（前編）

もう今更本題の本題になってしまですね・・・

「暑い……」

俺は自室にてクーラーを眺める。……うん、壊れたらしい。何で
か知らないけども……

教室で涼もうとしても授業が無いので
「暇だ」「ついでに暑すぎる

あ……学生の半分が帰省してるし……俺も家に帰らうかな?
「つと、まあそんなことよりつ

体を起こして学食に昼飯を喰いに行こう。
ガチャリ。

「あら、刹那くん。どこに行くの?」

「おや樋無さん。お昼を食べに行く所です。一緒にどうですか?」

「そうね。」「一緒させて貰うわ

樋無さんと飯食をとる事になった。

「ねえ刹那くん」

「はい?」

今日の日替わり定食を頬張つていて話を掛けられた。

「刹那くんは夏休み、帰省するの?」

「あー……そうですね。クーラーが壊れてる部屋で過ぐるのはキツ
いですからね……」

ちなみに職員室へクーラーの故障を伝えに行き、帰ってきた言葉が

『ふむ・・・我慢しろ。貴様以外にも故障届を出しに来た奴が多くてな』

である。誰が言つたかつて？千冬鬼さんだよ千冬鬼さん。

「・・・よし、明日から家に帰るとします」

一刻も早く快適温度の空間で過ごしたいからな。

「ふーん…。私も明日から実家に戻るのよ」

「そりなんですかー。何日くらいに帰省を？」

「まだ分からぬわね。一学期はかなり事件が多かったから、その調査や報告をしないと」

「大変ですね」

「そうねー」

こんな会話をしながら翌日、俺と樋無さんは各自の実家に帰省したのだった。

「ふうー・・・」

俺は自室でクーラーの風を受けながら呟く。

ここは自室。だが

ピーンポーン

家の玄関のベルが鳴る。

ここはI.S学園ではない。

そう、ここは『黒時』の表札が掲げられた我が家だ。さてさてー。誰かがインターホンを押したらしい。

「どちら様ですかー？」

玄関はマイク付きのドアホンだ。訪問者を確認する為に受話器を取る。

新聞屋か？それとも郵便かな？まあセールスとかなら即刻、帰つてもらつが

「はい、どちら様で

「はーい、剎那く

ガチャーンツッ！（受話器を思いつ切り叩きつける音）

「ふう……」

大丈夫。そう、大丈夫。

楯無さんは今日、実家に帰つてる筈だ。

今、こゝに、いる、筈が、無いッ！

今一度、カメラを確認。

よし、誰もいない。幻覚と幻聴だつたんだ。

そうと分かればアイスでも食べにキッチンへ

「兄さん、誰か来たようですよ？」

「ん？ああ…誰もいなかつたぞ。誰かがピンポンダッシュもした

んだる」

妹が一階から降りてきて、声をかけてくる。

「やうですか。でも一応、確認くらいはしておきます」

そう言って、玄関へ向かって行った妹。

誰もいなかつたんだ。無駄足だ

「おや？ お客様ですよ？ 兄さん」

「密？ 僕は誰も呼んでない」

「ですが、兄さんを知ってるみたいです」

むむむ？ 誰だ？ 誰も呼んだ覚えは無い。ついでに誰にも俺の家の住所を教えてもらえない。

「あー……」

誰だらうか？ と考えつつ（現実逃避中）玄関に向かい、ドアを開ける。

そこには

「はーい、刹那くん」

・・・・・・・・

ガチャン。誰・も・い・な・か・つ・た

「刹那くーん、何で閉めるのー？」

あれえ？ 樋無さん、今日は実家に帰るんじゃ？

ああ： やつぱり幻覚幻聴だな。うふ。たちと部屋に戻つて寝ると
しょひ。

玄関にいたであらひ、幻の樋無さんを放つておいて階段を上がる。寝て、起きたら幻聴覚は消えるんだー。

(現実逃避中)

ガチャリ。

「兄さんのお知り合いの方でしたか。兄が失礼をしました。ビリーハー

「いえいえ、お邪魔します」

妹が勝手に玄関を開けて樋無さんを家に上げやがった。

「何やつてんだテメエはああ！」

「いえ… ここで家に上げなければイロイロと話が続かない気がしたので」

「ワケの解らん電波を受信すんな」

「失礼ですね。私は機械ではありません」

「そんな意味で言つてねえよ…」

と、まあ、玄関先でキヨトンとしておられる、樋無さん

「ところで樋無さんは帰省されたんじゃ？」

「実は数日前に帰宅してたのよ」

「はあ？」

「で、帰つてきたら暇だったから刹那くんの家にでも遊びに行こうかなーって」

と、いう事らしい。

「別に構いませんけど…特に何もする事ありませんよ? 家^{ウチ}

うーん……。娯楽道具の一つくらいは探せばあるかもだが、如何せん何も無い気がする。

「困りました。我が家には一通りの家電製品くらいしかないですね」

「確かに何も無いよな…って、挨拶したつけ?お前」

「ああ、いえ。すみません。自己紹介がまだでしたね、私はコイツの妹です」

「兄を『コイツ呼ばわりすんな』

「更識 櫃無よ。学園では刹那くんと同室なの。ようじへ黒時

」

「妹です」

「いや、えつと名前の方は」

「妹ですか」

「適当に呼べって事ですよ櫃無さん」

断じて黒時 妹などとこいつぢではない。

「そう、じゃあよろしくね妹さん」

「はい。よろしくされましょ櫃無さん」

・・・何といふか、家に櫃無さんが来た。

Let's帰宅＆訪問者1（後書き）

妹さん登場。

樋無さん来訪。

話がグダってる・・・。

えっと…頭の中では話は纏つてるんですが、

それを文章にするのが難しいっ！

頭の中では妄想が爆発してるんですが・・・。

次回からはグダらせない様にします（・丁一丁）

309話（前編）

「えーっと…… いーなつた？」

「ふうー…」馳走様でした

楯無さんが両手を合わせて合掌。相変わらず礼儀正しい。

「お粗末さまでした」

俺と妹は合わせて合掌。礼儀正しいのは良いことだ。

「まさか剎那くんがこれ程までに美味しい料理を作れるなんてね~」
お昼ご飯が未だだったので俺と楯無さんと妹を含む3人で食事をしたのだった。

「ですよね。剎那は私よりも料理上手なんですよ」

「コイツ言つな。てか、お前の料理なんて暗黒物質しか見た事ねえ

そんなこんなで食事を終えたのだった。

「さて、一体何をしましようか

楯無さんに希望を取つてみる。

「ん~…特に何かしたいってワケじゃなくて、ただ ゆっくりしたいのよ」

「なら俺の家じゃなくても出来たんじゃ……?」

じーーーーーーー。楯無さんと妹がジト目で見つめてくる。なんだ?

「はあ…乙女心は全く理解してないですもんね兄さん

「これ程までに鈍感にされると おねーさんショックだなあ
非難を浴びている気がするが…・何を言つてる?

「そーだ」

楯無さんが急に何かを思い付いた様に口を開く。

「刹那就くんのお部屋、見せてもらつてもいいかしら?」

「俺の部屋?構いませんけど…行つて何するんです?」

「いいからいいから」

楯無さんに引つ張られながら俺の部屋へと向かつた。

「これはまた…」

俺の部屋に到着した途端、楯無さんはドアを開き、中を見渡す。

「特に面白いものなんてありませんってば」

何せ、俺の部屋は

机・ベッド・クローゼット・本棚(エリ学園に入る前に渡された分厚い本とその他数冊のみ)

白い壁紙。窓が二つ。それが広い部屋の隅っこに集結しているだけだ。

「おじゃましまーす」

楯無さんが言つなり、入室。イロイロと物色を開始する。

「ふむふむ」

「何故に俺の机の中を見るんです」

「ん~えっちな本は無いかなーって」

「持つてません」何を見に来たんだこの人は…。

「ふー。とか言いながら次はクローゼットへ向かう。

「兄さん余裕ですね。普通は女子が自分の部屋に来ると隠すモノがあつたりなかつたり?」

「無いもんは無い」

「ちつ…あ、櫛無さーん、兄さんのエロ本は机の中にカバーでカムフーラージュしてますよ」

「持つてないって言つてるのに、何で嘘を教える!?」

「あーあー聞ーこーえーなーいー。ノリですよーノリーー」

「イツ殴りてえ・・・・

「刹那くん」

「あ、はい?」

「クローゼットの中身だけ?」

特に変なモノは無いはず。あるのは私服くらいだぞ?

「なんで全部の服が黒色オンリーなの?」

「え? 何か問題でも?」

色なんて別にいいじゃないか。何と無くですよ。

「問題でも? つて、…ああ、確かに寮でも黒い服しか見た事無かつたわね。

他の色の服は無いの?」

黒色以外の服? そんな物は

「ありませんね。ええ、全く」

「刹那くん、後で服を買いに行きましょ」

え、いや別にいいですよ。と告げる前に

「決まりね」

決定された。私服なんて休日以外、特に着る事あんまりないのに…。

ドアホンが鳴った。『宅配便でーす』何が来たのだろうか？

「すみませんが兄さん、行って来てください」

楯無さんはまだ俺の部屋でイロイロ見て回ってるからその間にに行けばいいと思い、

お密を放つておいて、玄関へと降りる。

「うーん…刹那就くんつばホントに何も持っていないわねえ（えっちな本とか）」

私は刹那就くんの部屋にあつた本棚を探り終え、彼に話しかける。

「兄さんなら郵便物の受け取りに行きましたよ楯無さん」

刹那就くんの妹さんが教えてくれる。

「あら。気付かなかつたわ」

「なんですか？貴女ほどの実力の持ち主が気付かないなんて」

突如、妹さんを纏う空気が変わった。そして、声のトーンを少し落として言つ、

「更識 権無。更識家当主。IIS学園生徒会長。そんな貴女が兄さん^ツに何の用で来たんですか？」

「……私、更識家の当主なんて一言も言ってないわよ?」「そこは気にしたら負けです。色々な意味で」

・・・この子…何者?

「ああ、すみません。そつ身構えないでください。少し聞きたい事があるだけです」

「…聞きたい事?」

一応、向こうは普通の態度に戻ったけど、私は警戒をしておく。「ええ、兄さんと接触する理由は何ですか?男性IIS操縦者としての興味?」

それとも裏の人間である兄さんの監視?それとも好意?その答えが聞きたいだけです」

「それだけ?」

「ええ」

間も無く頷く妹さん。

・・・・・正直、答えるのは恥ずかしいんだけど。

「こ」は答えておこへ。

自分の気持ちをハッキリさせる為にも。

「すみませんね、ちょっとばかし量が多くて…!」

「ちょっとつてレベルじゃないんですけどねっ!」

郵便配達員の人と大きな大きな段ボール箱と一緒に抱える。中身?妹がネット通販で購入した本 数にして何百冊を超えるだ。

つたく…なんでこんなに購入するんだ。本の内容は全く知らんが、勉学方面では無いと思われる。

しばりく、この荷物を運ばないといけないので部屋に戻るのは遅くなりそうだ。

「最初はただ単に興味が沸いて刹那くんに近づいたわ
そう。最初は興味本位で接触してみただけ。なんだけど
「でもだんだんと刹那くんを見てたら最初の興味と違う興味が沸いてきたの」

「違う興味? それは何でしょう」

・・・なんで妹さんにこんな事言わないといけないのだろうと思つけど…。

「私は刹那くんが自分の意思で何かをしている、って事がんまり無いと思つてゐる」

彼は必要最低限（生活面などに置いて）な事以外は特に何をするでもなく、
何もせずに過ぐしているだけだ。

「自分が何をしたいのか、自分自身を分かつてないような感じなのよね

「そうですね。その通りですよ。成程、そこまで気付いてるんで

すか・・・

そう言つて妹さんは脚立を持つて来て刹那くんの部屋の天井を開けた。

「どうぞ」

妹さんが私に天井裏から取り出した本を数冊手渡してくる。

一体何の本なのだろうかとタイトルを見た。

「これって…」

「ええ。『ご覧のとおりです』

タイトルを見る。全て同じ本ではなかつたけど、書いてある事はどれも似たような物だつた。

『人間とは』『自分自身を見つめる』『今、自分が何をしたいのか』そのような言葉が数多く見られた。

『兄さんは昔、『兵器』としか己の事を思つていませんでした。けれど今は『人』として生きています

『人』として生きるとは何かを考えています。人として生きる...そんなモノは誰にだつて

分かりはしません。どんな生き方をしても人は人なんです』

そう、その通りだ。例えどんな無様で救いようの無い人生を歩んでいても、人に変わりはないのだ。

「けど、刹那くんはその答えを見つけようとしている」
人とは何か

「はい。全く...無意味で馬鹿らしいですよ。

それで?大きく話が逸れましたが、楯無さんが兄さんと接しているワケは何でしょ?」

「そうね...」

「ゼエ…はあ…はつ…はつ…はつ…」

「お、お疲れ…さま…でした…」配達員は去つて行つた…。

配達員の人とダンボールを運んでいると、ダンボール箱は一箱だけでなく、

数十箱くらい運ばれてきていた。中身は知らん。でも薄くて高い本だとヤツ^妹は言つていた。

つーか…アイツ…こんなに本を買つても全部読めねえと思つぞ、この冊数…。

家には使つてない部屋があるけども、こんな量の本、何処に置くんだ…？

そして残り一箱を運ぶ時に気付いたが…鐵を開いて運べば楽だったのに…。

気付かなかつた自分が憎い。

さて、結構時間かかつたけども部屋に戻るか

ガチャリ。玄関のドアが開き、櫛無さんと妹が出てくる。

「櫛無さん、コイツの事、面倒見てやってくださいね^{刹那}」

「ええ、任せてちょうどいい」

2人は二口二口笑顔で家から出てきた。何か楽しい事でもあつたのだろうか？

「と、いう事なので兄さん。櫛無さんと買ひものでも行つてきてく

ださい」

「は？」

「それじゃ刹那くん、一緒にお買ひ物に行きましょ

「はあ？」

「さつさとひつたでしょ。ほら、早く行きましょ」

「はあ…分かりました…」

楯無ちゃんに引き摺られて出掛けの事になってしまった。

38話（後書き）

・・・・・まあ…次回からは、ね?
正直、こんな展開になるとは自分でも予想していなかつた…。
ヽ(。ロヽ)ゞーシテ「コーナッター(ヽロ。)」

ある喫茶店にて（前書き）

久し振りの投稿ですっ！

どんな話にするかを考えた結果、この話になりました。

では、どうぞっ！

のある喫茶店で

櫛無さんと出掛けている時……。

偶々通り掛かった店（確か名前は@クルーズだつたっけ?）に一人で入って休憩中。

「それにしても櫛無さん」

「?」

「買い過ぎでしじう……」

「あら? 刹那くんが『適当に選べばいいですよね服なんて』とか言つから私が選んであげたのに『それもそうですけど。そつちじやなくて、櫛無さんの服ですよ』

「俺の服だけでなく、櫛無さんまで服を買いました。『そんなに何着も買つてどうするんですか?』

「女の子なんだから可愛い服を着てみたいのよ」

「? ? ?俺にはよくわかりませんね」

「服なんて着れればいい。機能性があればいいのではないかと思つけどなあ。」

「つと、まあ……何か注文しましよう……すみませーん」

店員さんを呼ぶ間に期間限定のパフェを一つ食べようか三つ食べようかを考えておく。

「櫛無さんは何頼みます? 僕は期間限定パフェを三つほど頼みますけど」

「……糖分の取り過ぎじゃないかしら? 私はアイスコーヒーでも頼

むわ

ちょっとお手洗いに行つてくるわね、と席を立つ櫛無さん。

ふむ。つてか、糖分の取り過ぎ?・・・「ねぐらこ普通じゃないか?

「注文はお決まりでしょうか? お客様?」

「はい、期間限定のパフェを三つ。後、アイスコーヒーを一つ。以上で…す?」

・・・おかしいな。この店にはシャルロット似の美少年《執事服ver》でもいるのだろうか?

「いやいやいやいやいやいや。シャルロット? ビクウツ! と怯えた様に肩を震わせる店員。

「な、なにを仰られるのでしょうか? ま、僕はシャルロットなんて名前ではありません」

「・・・(拳動不審過ぎるだろ)。ふむふむ。ま、いいや

「何がいこのかしら?」「
シャルロット?」
店員の背後から声が掛かる。

「ああ櫛無さん。いや、俺のクラスのシャルロットにっこい似てる奴が、ほらここに」

「シャルロットちゃん? ああ、あの?」

どれどれ? とシャルロットの顔を覗き込む櫛無さん。

「確かにソックリね」

「あ、あの…僕はシャルロットって名前じゃないです。きっと人違ひなんじゅ……」

「らしいですよ櫛無さん?」

「と、いうより…どちら様でしょ?」

俺じゃなくて櫛無さんの方に言つてゐただろうと思つたが、

「知る必要は無いですね？シャルロットじゃないんでしょうか？」貴

方は

「や、その通りですけど……」

「そうだ。シャルロット似の美少年がいるってクラスの皆さんに伝えてみるか？」

「そうね。私もシャルルくん似の美少年がいるってクラスの皆さんに

」

「わあああああ！ 待つて！ 待つて刹那！」

携帯電話を取り出した俺と楯無さんの手を押さえるシャルロット（
確定）

「で、ここで何やつてんの？」

「ちょっとお昼に@クルーズの人々に頼まれて……。

それに僕だけじゃないよ、ラウラも……ほら」

辺りを見渡すとメイド服姿のラウラもいた。

「刹那こそ何やつてるの？ いらっしゃの方は？」

「買い物だ。それとこの人は……」

「私の名前は更識 楠無。IIS学園の生徒会長よ。よろしくねシャルロットちゃん」

「あ、はい。僕はシャルロット・デュノアです。よろしくお願ひします更識先輩」

「つーかシャルロット、注文頼む」

「あ、うん。期間限定パフェ三つ、アイスコーヒー一つだよね。それじゃあ待つてて」

カウンターに向かつて行つた。

「まさかシャルロットにラウラがいるとは」

「なかなか可愛らしい一人ね。でもなんでシャルロットちゃんは執事服のかしら？」

「ラウラはメイド服なのにシャルロットは執事服…なんででしょう？」

少しばかり楯無さんと雑談をしているとメイド服のラウラがトレーを持つてきた。

「よおラウラ。一夏でも呼んでくればよかつたか？」

「なつ！？ や、やめろ…」この様なフリフリヒラヒラな姿を見せるわけには！」

「冗談だ。だからトレーを静に置け。パフェが崩れる

「くつ！ ……といつより、コイツは誰だ？」

「一応先輩なんだからコイツって言うなよ…」この人は

「私は更識 横無。IS学園の生徒会長よ。よろしくねラウラちゃん」

「ラウラ…ちゃん？」

何故かラウラが、ちゃん付けで呼ばれた事で、不思議な顔をする。

何故だろ？ かね？ 知つた！ ちやないけども。

ともあれ、頼んだ物も来た事だし、頂くじよつ。トレーを持ってきたラウラは仕事に戻つて行つた。

少しばかりシャルロットとラウラの仕事振りを見させてもらおうかね。

シャルロットは

「お待たせいたしました。紅茶のお客様は？」

「は、はい」

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？ よろしければ、一ぱら

で入れさせていただきます

「お、お願ひします。え、ええと、砂糖とミルク、たっぷりで」

「わ、私もそれでっ」

・・・なんつーか。客の態度がおかしい気がする。

お次にラウラは

「ねえ、可愛いね。名前教えてよ」

「・・・・・・」

「あのわ、お店何時に終わるの？一緒に遊びに」

ダンッ！ とテーブルへと垂直に半ば叩き付けられたコップが大きな音と共に滴を散らかす。

「水だ。飲め」

「い、個性的だね。もつと君の事をよく知りたくなつ」

台詞の途中でオーダーも取らず、ラウラはテーブルを離れる。そしてカウンターに着くなり何かを告げ、少しして出されたドリンクを持って行つた。

「飲め」

先程よりは多少優しめに（多分、ソーサーが割れるからだと想つが）カップをテーブルに置く。

多少優しく置いても、中身は遠慮無くこぼれた。

「え、えっと、コーヒーを頼んだ覚えは…」

「何だ。客で無いのなら出て行け」

「そ、そじやなくて、他のメニューも見たい訳でさ…例えばモカ

とかキリマンとか

「はつ。貴様ら凡夫に違いが分かるとでも？」

「いや、その…………すみません……」

ラウラの絶対零度の視線に男たちは小さくなつながら「ヒーヒーをすすつた。

「飲んだら出て行け。邪魔だ」

「はい…」

・・・接客業つてなんだつけ……。

ラウラの接客態度を見ていると疑問が浮かぶ。

ラウラが担当したテーブルからは

「あ、あの子、超いい…」

「罵られたいつ、見下ろされたいつ、差別されたいいつ！」

など。

シャルロットが担当したテーブルからは

「あ、あのつ、追加の注文いいですか！？　出来ればぼひきの金髪執事さんで！」

「いっつにも美少年執事さんを一つ…」

などなど。

・・・・・

「…樋無さん」

「なにかしら？」

「@クルーズつて　どんな店でしたつけ？」

「喫茶店だった氣がするわよ」

正確にはメイド＆執事喫茶だった氣がするが…。

どつかの変態共が集まる店じゃなかつたよな？

と、まあそれは置いて。樋無さんと雑談を一小一時間程度。

そろそろ休憩を終えて、店を出ようとすると、事件は起つた。

「全員、動くんじゃねえ！」

ドアを破る様に雪崩れ込んできた男が三人、怒号を発する。一瞬、何が起こったのか理解できなかつた店内の全員が、次の瞬間の銃声により悲鳴が上がつた。

「きやああああっ！？」

「騒ぐんじゃねえ！ 静かにしろ！」

男たちの恰好は 顔に覆面、手には銃、バッグには紙幣が何枚か飛び出していた。

「（見るからに強盗だな）」

店内の誰もが男たちの格好にぽかんとしたが、そこはそれ。銃を持つ凶悪犯の言う事は聞かない訳にはいかない。

『あー、犯人一味に告ぐ。君達は既に包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返す』

窓から見える店外にライオットシールド装備の警官達が見える。

中々に警察の対応は迅速だ。

「……なんか」

「……警察の対応も」

「……古……」

数名の客がそう呟いた。

「ど、どうしましよう兄貴！ このままじゃ、俺たち全員 」

「うひたえるんじゃねえ！ 焦る事はねえ。こっちには人質がいるんだ。

強引な真似は出来ねえさ」

リーダー格であろう体格の良い男がそう告げると、後の一人も自信をつけ始める。

「へ、へへ、そうですよね。俺たちには高い金払って手に入れたコイツがあるし」

「ジャキッ！」と音を立てショットガンのポンプアクションを行う。そしてその瞬間、威嚇射撃を天井に向け撃つ。

「きやあああっ！！」

蛍光灯が破裂し、パニックになつた女性客が耳を塞ぐ。

「大人しくしてな！　俺達の言う事を聞けば殺しあねえよ。わかつたか？」

女性は顔面蒼白になつて何度も何度も頷く。

「おい、聞こえるか警官ども！　人質を安全に解放したかつたら車を用意しろ！」

勿論、追跡車や発信器なんかつけるんじゃねえぞ！」

威勢よく言い、警官隊に向かつて発砲する。

幸いパートカーのフロントガラスが割れたようなので怪我人は無いが、野次馬がパニクつただろう。

「へへ、ヤツら大騒ぎしますよ」

「平和な国ほど犯罪はしやすいって話、本当ッスね！」

「まったくだ」

暴力的な笑みを浮かべる男達。

(はあ…どうします樋無さん?)

(まずは状況を冷静に分析することね)

俺と樋無さんは小声で話す。

一人はショットガン、一人はサブマシンガン、一人はハンドガン。

(見た所武器はそれだけですけど、他にも隠し持つてゐるかもおつ

！？)

「・・・・・」

店内で強盗意外に立っていたのはラウラ。銀髪に眼帯、そして美少女とくれば誰の目にも止まってしまうだろう。

(アイツは一体何考へてるんだよ…)

正直マジで驚いた。何やつてんだ?と。何か考えがあつての行動なんだろうが。

男達三人の内、リーダーがラウラにメニューを持つてこいと言つた。カウンターに行き、取つて来たのは氷が満載の水だつた。

「……なんだ、これは?」

「水だ」

「いや、あの、メニューを欲しいんスけど…」

「黙れ。飲め。飲めるものならな」

ラウラは突然トレーレをひっくり返す。当然、氷水が宙に舞うが、それらを回転するような動作で掴み　弾いた。

氷の指弾。それをトリガーから離れていた人差し指に。

突然の出来事に反応できず、瞼に、眉間に、喉に、一瞬で当てる。

そして犯人の怒号より早く、男の懷に膝蹴りを叩き込む。

「ッ ザけやがつて!　このガキ!」

リーダーがハンドガンを放つがラウラには当たらない。

ソファを、テーブルを、観葉植物を、イロイロな物を櫛にして店内を駆ける。

「あ、兄貴つ!/?　こ、こいつッ　」

「つるたえるな!　ガキ一人、すぐに片付けて　」

「一人じゃないんだよねえ、残念ながら」

リーダーの背後から迫る男装の美少女シャルロット。

「なつ！？」「のっ！」

「あ、執事服で良かつたかな。うん。思いつきり足上げても平氣だし」

そう口にしながらシャルロットはリーダーの拳銃を手^ノと蹴り上げる。

その後は振り上げた足がショットガン男の肩へ。
「ギンッ」という音がして男の腕は力なく垂れた。

「（流石、HS専用機持ち。『ありとあらゆる事態』を想定して訓練済みだからお手の物だな）」

「目標2、制圧完了。ラウラ、そつちは？」

いつの間にか下端のもう一人を倒していたラウラが
「問題無い。目標3、制圧完了！」

意識及び行動力の喪失（つまりは氣絶）を確認して、リーダーへ目標を向ける。

「ふつ、ふざけるなああつ！　お、俺がつ、こんなガキどもにいつ！」

ハンドガンを構え、ラウラに標準を向けた。
だが身を捻つて初弾をかわした。そして足元にあつたトレーを踏み付け

トレーに乗っていた『物体』つまり拳銃を向中に投げる。

それを手に収めて、リーダーの眉間に突き付ける。
「遅い。死ね」

「えつ。ラウラ、待つ」

黒く鈍く光る物

ハンドガン

ガツンッ！と銃弾で無く、グリップを額に叩き込まれ、男はその場に倒れて伏せた。

「全制圧、完了」

「…はあ。一瞬びっくりしたじゃない…」

「つたく…まつたくだ。いきなり一人揃つて飛び出すんじゃねえよ」

「まあ、終わつたんだからいいじゃない」

楯無さん…確かにそうですけどね。

ラウラなら撃ちかねない。と内心は思つたんだ。

しーん、と静まり返る店内。

「お、終わつた…？」

「助かつたの、私たち…」

「い、一体何が…」

危機を脱した事は理解できたようだが、まだ状況の把握が出来ていないうだ。

「お、俺達助かつたんだ！」

「やつた！ ありがとう… メイドさんに執事わん、ありがとうございますー。」

状況把握ができた人達が声を上げる。

騒がしくなつた店内の様子に気付いた警官隊が詰めかけてくる。

「ふむ、日本の警察は優秀だな」

「つーかお前ら、代表候補生で専用機持ちなんだから公になるのは避けなくていいのか？」

「…そもそもそうだな。このあたりで失敬するとじつ

警察の張つた立ち入り禁止のロープを乗り越えるマスク関係者が目に入った所で一変。

「捕まつてムショ暮りじになるへりになら、いつそ全部吹き飛ばしてやらあつ！」

氣絶したと思われたリーダーが立ちあがり、革ジャンを左右に広げる。

そこにあつたのは、軽く四〇平方mは吹き飛びそうなプラスチック爆弾の腹巻。

起爆装置はリーダーの手の内にある。

「わー…」

「最後まで古…」

そんな言葉を漏らしたのは誰だか知らんが、すぐさま店内は先刻以上の一撃に。しかし

「あきらめが悪いな。… もうお前らの出番だったから今度は俺達かな？」

俺は「樋無さん！」と叫ぶと

「了解！」

そう返された。連携つて素晴らしい。つーか以心伝心か？

床に転がっていた銃二丁を軽く蹴り上げ、手に取める。

ダダダダダダンッ！

五連×2の連射で爆薬の信管と起爆装置、そして導線『だけ』を擊ち抜く。

そして俺はリーダーへ向けてダッシュ。

樋無さんの動きに合わせて

「THE・END」

俺は二丁の銃を男の眉間と喉へ突き付ける。

樋無さんは持っていた扇子の紙の部分で男の頸動脈を押さえ込む。

「まだやるのかしら？」

「やるならアソタの顔面を吹き飛ばそつか？」

「す、すみつ、すみませんつ！ も、もうしまつ、もうしませんつ。
い、命ばかりはつ！」

無様な敗北宣言を聞く事無く、俺と櫛無をさ、シャルロットとリウ
ラは颯爽と立ち去つたのだった。

のある喫茶店にて（後書き）

いやー…久し振りに適合者の更新です。
これからは更新スピードを上げて行こうと思います。
ではつー（。ロー）

/ . .)
~~~~~

40話（前書き）

後半がつづりますね…。

夕方。強盗事件から一時間くらいが経過した。

「あー……」

やってしまった。やってしまった。

先程の店『@クルーズ』でパフェをパフェを喰い損ねた。  
糖分だ。糖分が欲しい。

パフェが食えなかつたのはあの強盗共のせいだつけ…？

今から留置所に乗り込んで強盗共、叩きのめしてやるひつか…。

「……やっぱメンドーだからいいや…」

「何が面倒なの？」

楯無さんだ。

「ええ…強盗共を血祭りにあげようと思つたんですけどね。やっぱ  
りやめました」

「刹那就くんには何の被害も無かつたでしょ？」

「大アリですよ…甘い物が食べたかつたのに…」

「一五〇〇円もするパフェを三つも頼んでいたわね」

「値段は特に関係ありませんよ。問題なのは糖分です糖分」

「値段なんて特に気にしない。だって

「そもそも俺は金ならある程度持つてますしね」

ほら。と、俺の財布を楯無さんに見せてみる。

「かの有名な諭吉さんが數十人もいるわね。どうしてこんなに持つ  
てるのかしら？」

「昔、研究所とかで過ごしてゐる時とかに入つた金があつてですね」

身体を弄<sup>IS適合の為に</sup>されていた頃に、研究者たちは俺に『実験体料』として金を払っていたんだ。

その時に払われた金が半端無い金額だったのを使いきる事無く、銀行に預けている。

「…そう。ちなみにどれくらい持つてるの?」

「財布の中は…十四万で。銀行の預金は…えっと…確かに一億

…ちょいでですかね」

「高校生が持つ金額ではないわね」

そうなのか。一般的な高校生はどれ位持っているのか分からんだけど。

「それはいいとして、刹那くん。向こうの公園に行つてみましちょ？」

「公園ですか?」

「そう。城址公園。元はお城だった場所よ」

へえ。面白そうなので、樋無さんと一緒に公園へ向かう。

と、なんだ？さつきから後ろを付いて来るヤツがいるんだが…。  
数は三人。コソコソ隠れるように俺達の後ろをついてくる。(IS)  
のハイパーセンサーで確認した)

つーか、足音も消せていない。気配も消せていない。  
追跡の仕方が素人すぎて簡単に気付いたぞ。

(樋無さん。後ろの三人、知り合いでですか?)

(違うわ。私たちに何か用事でもあるんじゃないのかしら?)

(なら )

立ち止り振り向く。そして

「何か用でもあるのか？隠れてるお前ら。ストーカー行為は楽しいか？」

声をかけると三人の男達が木の影から出てきた。

「ちつ！バレてやがったのか。ま、別に関係無いけどな」

「用事つづーか。ちょっとお前の持つてる物が欲しくてな」

「持つてる物？なんだ？俺が何を持つてるって？」

「ふひひ。しらばつくれてんじゃねえよ。テメエの持つてる金が田當てなんだけどよ」

「あらカツアゲかしら。刹那くんも大変ね」

ホントだよ。何で俺が標的なんだつーの。

「あとそこのかノジヨにも用があるんだけどな！」

「俺達とちょっと遊ぼうぜ。楽しい所に連れてつてやるからやあ」

「おや楯無さん、お誘いですよ」

「残念ながらお誘いは断らせて貰つわ」

あーあ。バカ共現れた三人、拒否られちゃつたな。

「まずはテメエだ。テメエの持つてる財布金を渡してもらおつか」

「さつき財布の中身を偶然見ちゃつてなあ

「ちょっとばかし俺達に恵んでくれよ」

最初から俺からカツアゲする気だつたな。コイツら。

「どうするのかしら刹那くん？」

「俺は今、さつきから溜まつてた苛々を発散させたい所でしたし…

「そんなんに甘い物が食べたかったのね…」

「ええ…だからちょっと…ストレス発散しまじょうかヤッてじまー」

「あ、ア！？」

「さつきからテメエらで話してんじゃねえぞコラ！」

「さつさと金を渡せばいいんだよ！」

自己中<sup>ハニチヨウ</sup>。

ヤッちまえ！

そんな声が聞こえた瞬間、三人は俺目掛けて殴り掛かってくる。<sup>バカ</sup>

「まずは一人目」

突つ込んでくる先頭<sup>トッピング</sup>。隙だらけだ。

ゴッ！

腹部に一撃。続いて強張った身体全体に

ドガッ！

脇腹に回し蹴り。 おおークリティカルヒットだったと思うぞ、今の一撃。

「…………！」

声も出せずに氣絶する一人目<sup>墮ち</sup>。

「なつ！？ て、テメエ！」

懐から刃渡りが長いナイフを取り出す一人目。

「おいおい、銃刀法違反じゃねえの？」

別に俺には関係ないけどさ。ナイフまで出して金を求めるなよ。こんなことするより働けって……。

バシッ！ ドゴッ！

ナイフを持つ手を払い、左の拳を顔面へと放つ。

「二人目終了 次は……」

最後の三人目を見ると、樋無さんが柔術で腕を捻り上げていた。

「なつ！？ つて！…痛たたたたつ…！」

「近寄らぬでござるか」  
田村がニヤニヤしながら、「口サク！」

二年生

「アーチー君はお前がおらぬ間に、どうしてアーチーの名前を知ったのです？」

• • • 息の説玉の筆

つーかなあ

一  
て  
し  
レ

一  
て  
痛  
か  
一  
二

ややあぎやあと煩かつたのでビンタをかましておく。

「これ以上継けたしか？」

はい！

列カ三ハ用ヒテは雙ツ線セン一イハを言ヒトシうにがり云ヒトシて行ヒトシカ

「ええ、心配してくれて

—ですよねー

匪賊の強盜共どし。わざわざ二人とし。

話にならない。

「それよりも、刹那くん」

「はい？」

「甘い物が食べたいならアレを食べましょ」

公園の中はクレープ屋があり、その店を指す櫛無さん。

「クレープ屋？　何でクレープなんですか？」

「あら、嫌だつたかしら？」

「いえいえ。嫌じゃないですよ？　是非食べましょう」

バン車を改造した移動型店舗であるクレープ屋へと向かう。

「すみません、クレープを一つくださいな。ミックスベリーで」

そう言つと、お店の主である五十代後半の男性が、無精ヒゲにバンダナという風体でありながら人懐っこい顔で頭を下げる。「一つか櫛無さん、何故にミックスベリー？　別に美味しいだからいいけど。

「ああー、『めんなさい』。今日、ミックスベリーは終わっちゃったんですよ」

「あら。そうなんですか。残念ね…。刹那くん、別のにする？」

「え？　…・・あ、そうですね。ならイチゴとブドウを注文しますね」

「一つ、お願ひしますと付け加える。そして料金も全額払う。

「刹那くん、わたし、自分の分は自分で払うわよ？」

「構いませんよ。齧りつてやつですって」

しばらくして出来たてのクレープがやってくる。

「櫛無さんはどっちがいいですか？」

「ならイチゴを貰つわね」

俺達は店から離れたベンチに並んで腰かけて出来たてをかじる。クレープ

「はむつ。んー… good。美味しいですね、これ」

「はむはむ。ん。とっても美味しいわね」

櫛無さんがミックスベリーが欲しかったみたいだけど、イチゴ味のクレープを食べて笑顔になつている

「はい、樋無さん。どうぞ」

俺のクレープ《ブドウ》を差し出す。

「えつ？ どうしたの刹那くん。急に差し出されても」

「はい？ えつと、コレ美味しいですよ？だから樋無さんこむ」

「え、あ、えつとい、いただきます」

妙に落ち着きの無い樋無さんが あーんとクレープを食べる。

「た、確かに美味しいわね」

「これで目的の味が食べれましたね」

「え、え？」

「あの店にはミックスベリー味なんてメニューにありませんでした

よね」

「え、そつなの？」

「はい。厨房の奥も見てみましたが、それらしい色のソースは無かつたですし」

「よく見てるのね」

「初めてクレープ屋に入つたから興味が沸きましたね」  
結構新鮮な作りだったなーあのバン車。

「こういう事で、ミックスベリーが食べれましたよ?」

「？」

「俺のクレープって何味でしたっけ?」

「確かブドウ味 ああ。ストロベリーとブルーベリー、ね

ピンポン。正解です。

「つて…刹那くん。ブルーベリーはブドウじゃないわよ?」

「ゑ・・・マジですか?・・・まあ、ブドウみたいなものでつて

美味しかったからそんなこと関係無いけども。

まさか…まさか 刹那くんが自分の食べている分を差し出してくるとは思わなかった。

「（そして男の子の刹那くんの方が女の子の感性より…女の子らしい）」

ちょつとばかりく「むわね…。

い、今思えば…か、間接キス…しきやつたのよね。

刹那くんは特に気にする事 いや、彼の態度からして全く気が付いて無いのだろうけど。

なんだか私だけが恥かしい思いをした様で 何とも言えない感じね…。

そろそろ俺と樋無さんのクレープも無くなる頃だ。  
さつきから樋無さんが黙々と食べているから、何だか話しかけ辛い。  
隣に座る樋無さんを見つめてみる。

「（んー…）」

小さじ口で ちょこちょこクレープを食べる姿はとても可憐うつくしい。

あ、田が合つた。

「ど、どうしたの？ 刹那くん

「へ？ いや、なにも？」

「や、そう？」

「ええ。ただクレープ食べてる樋無さんを見てただけですよ」

「！？……あ～…う～…」

何で唸つた様な声を出すんですか。そして何でそっぽを向くんですか。

まさか、もー一つ食べたいなあ…。って思つてたり？

「・・・今、刹那くんが考へてる事は多分違つわよ？」

「むむむ。失礼しました」

違つたらしい。つてか読心されたよ久し振りに。何で出来るの？ 読心。

そんな事を考へていると、

「刹那くん」

名前を呼ばれ、樋無さんの方へ振り向く。

「もべつ？」

口の中に広がるイチゴ味。ビリセラリ樋無さんが食べていたクレープを俺の口に捻じ込んだらしこ。

「もべつー もふふ、ふふふん（ちゅー いきなり何するんですか）

「！」これで刹那くんもミックスベリーが食べられたわよ？

「もふああ。おお、確かにその通りですね」

クレープを飲み込む。うん、美味しかった。

「（じ）馳走様でした」

手を合わせて合掌。礼儀って大切だぞ？

「じゃ、じゃあ刹那くん。私はこの辺で学園に帰るわね

「いきなりですね。学園までご一緒にしましょうか?」

「ううん。大丈夫よ、ありがとう」

「そうですか。なら気を付けて帰つてくださいね」

俺が言つたが早いが、樋無さんは少し足早に去つて行った。

…?何か急ぎの用事でもあつたのかな?

そんな事を考えつつ、俺は樋無さんが見えなつてから家への帰路へと付いた。

## 40話（後書き）

多少……いや、かなり強引に楯無さんのキャラを弄った気がするなあ。  
……。

次回は楯無以外の原作キャラ達との夏休みです。

感想、その他、待ってます(・・)y

## 41話（前書き）

今回の話・・・原作をちょっと弄った程度です。

「羅...ソマ...ひめ」

俺こと黒時　刹那は只今絶賛、暇である。  
つて、意味の解らない事を考へる位、暇だ。

pi pi pi pi ! ! !

携帯の着信音たち

「もすもす？」終日？  
「アイツ」

『なんだ今の……？』つて、あっす刹那

お一夏かどりした? 遂に夏の暑さで頭かやられたか?」

冗談。ジョークだつて。

「で? 可か用か?」

『ああ、今いつものメンバーが俺ん家に来てるんだ。刹那も来ないか?』

「いつも  
「行く行く。  
箒にセシリアに鈴にシャルロットにラウラの五人か。  
今ちょうど暇してたんだ」

『OK。じゃあ待つてるからなー』

「はいよ。何か持つていいく物あるか？」

「了解。じゃあ数分したら行く

『おこよ』

ブツッ！　ツー、ツー、ツー…。

電話を切り、出掛けの準備。

夏休みに入る前に知った事だが、一夏の家と俺の家は結構近い距離にあるみたいなのだ。

歩いて数分で着いてしまう距離だ。

机の上に置いてあつた《鐵》の待機状態であるネックレス（唯一の武装、黒月のミニチュアサイズ）を首にかけ、携帯と財布をポケットに入れる。よし、これで準備完了。

夏の日差しを浴びながら一夏の家へと向かった。

目的地へ到着。一夏田標を呼び出そう。

ピーンポーン。ピーンポーン。ピンポンピンポンピンポン…。  
「つるせえよー!? 聞こえてるって!」

あ、一夏が出てきた。

「来たぞー。ほれ土産のアイスだ。お前の分だけレンジで温めたぞ

言いながらここに来る途中にコンビニで買った人数分のアイスを渡す。

「温める必要無いだろー!? アイス溶けただろ絶対ー!」

「溶けただろうな。ここに来る道中が暑かつたからな。ノリでやつた」「いい迷惑だよー！」

「落ち着け落ち着け。冗談だ冗談。ちゃんと全員分用意してるから」「サンキュー。なんか…お前のせいでかなり疲れた」

「そうか。こっちはかなり楽しませてもらつた。」

「それじゃ、入ってくれよ」

一夏の後に続き、家の中へと踏み入れる。

「へいへい～」

リビングに着き、先にいたメンバーに挨拶をする。すると直ぐに挨拶を返された。

「さて、刹那も来た事だし、この後どうする?」

「おい。何をするか決めて無かつたのかよ・・・。」

「今までお昼ご飯を食べてたんだよ」

キッチンから出てきたシャルロット。一夏の手伝いでもしたのかな?

「ふーん。で?これから何するんだ?」

「つちはあんまり皆で遊べるものとか無いぞ」

「まー、そういうだろ?と思つて、あたしが用意してきてあげたわよ。はい」

そう言つた鈴が広げた紙袋には、トランプや花札。モノポリーに人生ゲーム、

その他様々なカードゲームやボードゲームが溢れていた。

「じゃあ、これで遊ぶとするか。みんなは希望とかあるか?」

一夏に言われ、俺達も紙袋を覗き込む。

「あら、日本のゲーム意外にもありますのね」

「あ、これやつたことがある。材木買うゲームだよね」

「ほひ、これが日本の絵札遊びか。なかなかにミヤビだな。」

今度、帰国する時には部隊に土産として買って行くとしよう  
「私は将棋がいいのだが、あれはふたりでしかできないしな」  
「ふむふむ、なるほど。どれも知らないモノばかりだ」

皆で何をするかで盛り上がる。

「じゃ、全員でやれそうなやつから行くか」

そう言った一夏が取り出したのは、バルバロッサといつねのゲーム  
だつた。

バルバロッサ？ 第二次世界大戦のナチス・ドイツの奇襲攻撃作戦か？

「ほう、我がドイツのゲームだな」

ドイツ国旗を見たラウラが腕組みをしながら少し嬉しそうにする。

「それで、これはどういうゲームなの？」

「このカラー粘土で何かを作つて当てるというゲームよ。質問とかしていいわけ」

「え？ それでは、作る人間の技量に左右されるのではなくて？」「そんな事はないわよ。寧ろ逆。上手く作り過ぎると、すぐに正解されてポイント入んないから。

適度にわからないくらいがいいわけ」

「んん？ と言つ事はつまり、下手過ぎるとやはり不利なのではないか？」

「いや、質問次第なんだよ。答えたに当たりを付けて、質問で埋めていけば大丈夫だ。」

どつちかって言つと、造形遊び「いつ上手く質問する方がこのゲームの鍵だぞ」

よく解らなかつたけど、要するに

『何か作つて、質問に応えて当つてもらえばOK』って事か？

経験者の一夏と鈴が最初に説明役に回り、ゲームが始まった。

・・・・・

何か、この粘土で作ればいいんだよな？

何を作ろうかを考えていると、自分の首元に視線が向いた。あ、これにしよう。

「できたっ」

「それじゃ、スタートね」

シャルロットからサイコロを振り、ゲーム開始。

「えーと、一、二、三、と」

「あ、宝石を得ましたわ」

「私は…質問マスか。よし、ではラウラの粘土に質問するぞ」

「受けて立とう」

「因みに回答は『はい』『いいえ』『わからない』よ。

『いいえ』を出されるまで質問は出来るから、最初は大分類で始めるとお得ね」

鈴の説明を聞いた筈がラウラの粘土を見る。

その粘土は『ゴゴゴ…』と静かな威圧を放つ円錐状の何かで、見当が付かない。

俺以外だけじゃなく、ラウラ以外の全員が『あれは何だ?』と思っている筈。

「それは地上にあるものか?」

「うむ」

「よし…。では、それは人間より大きいか?」

「そうだ」

ふむ。なら、道具の類じやないんだな。

「それは都会にあるものか？」

「どちらともいえないな。あると言えばあるが、ないと言えぱない  
え？　どーゆ事？それって東京タワーじゃなかつたのか。

「人間の作ったものか？」

「ＺＯだ」

質問終了。――で筈はこのまま回答できるが

「そうだな。外しても失点は無い様だし、答えよう」

正式なルールでは答えは紙に書いて制作者に渡すのだが、今回なお試しと叫つ事でルール変更

「じゃ、答えをどうぞ」

「油田だ！」

「違う」

膝を地面に付き、うな垂れる筈だつたが　俺達は全員『なぜ油田？』  
といつた表情だ。

そんなこんなでゲームは進んでいく。あ、因みにラウラの作ったのは『山』らしい。

「次は俺が質問される側か

「そりよ。回答はさつき言つた通りだからね」

質問者は一夏。回答者は俺という番だ。

「刹那のソレは… IISか？」

「ye s… つーか何故分かつたんだよ」

俺は自分のIIS『鐵』を粘土で作つたのだ。バレないよ!テキト  
ーに作つた筈なんだけど。  
「…答え言つていいか？」

なんだと？　一夏め、もつ分かつただと？そんなバカな

「じゃあ答えは?」

「刹那のIS『鐵』だ」

「あれ? なんで分かつたんだ?」

「そりや、見たらわかるつて

「どうからどう見ても鐵にソックリだよ」

「アンタはさっきの話聞いてたの？直ぐに答えが分かられない様に

「作るのよ？」

……めりちゃくちゃテキトーに作った筈なんだけどなあ」「

トマト栽培の基礎知識

また翼の部分とが  
非固定遊部位の翼も作って

他の順番が結構で、次回は質問と回答が如きを

ノルマの會

「我が祖国、イギリスですわ！」

と、言われた時には全員が沈黙した。

何度か俺の順番になつて、『打鉄』や『ラファール・リヴィアイブ』

俺自身は解られない様にテキトーに作ったのだが、こと「J」とく即正

角川文庫

「（あ、ナーサー）この家つてナタセさんも住んでるんだっけな……」

屏へ手を動かし、顔形する。

「できた」

何で皆して黙るんだよ。今回のは難しいぞ？

「じゃあ、あたしが質問ね。それはかなり恐ろしいわよね？」

「ん？ もう答えに気付いたのか？」

「ああ。確かに恐ろしいな」

「じゃあ、次。いつも手に金属的な何かを持つてるわよね？」  
いつも持つてるっけ？ ・・・いつもは持つてないだろ。てか金属・  
・・？」

「ＺＯだ」

『え？』と俺以外の全員の顔が驚きに変わる。

「どうする？ 答えを書いつのか？」  
「そうね……よし、答えるわ」  
「正解は？」  
「鬼よ」

は？ 鬼？ 正解っちゃん正解だが、鬼と書いて読み方が違うぞ？ これは。  
ガチャ。バタン。ん？ 何の音だらうか？  
「つてか、残念。不正解」  
「はあああ！？」 なんですよ？ どうからどう見てもツノを生やし  
た鬼でしょ「うが」

「鬼は鬼でも鬼とは読まないぞ」  
「ほう？ なら鬼と書いて何と読むんだ？」

「え？ ああ、鬼と書いて『ＩＳ学園の教師』と読むんです」  
「そうちかそうちか。ところで、その教師とやらは誰なんだ？」

おい、頭の中で『危険信号』が鳴るんだが。それに背後から殺氣を感じる。  
つてまでまで皆。なんで俺から遠ざかる様に離れるんだ？  
ギギギギッ！ と、首を真横に九〇度傾ける。

視界の中に映る人物は普段持っている出席簿は無く

「へ、hello…千冬さん」

「ああ、挨拶は大事だな。だから私も挨拶を返してやるつ  
スツツと握った拳を構える千冬さん。

「教師に対して敬意を持って馬鹿者めが」

ゴチンッ！

俺が粘土で作った鬼は  
千冬さん  
鬼だった。俺が作った造形物の鬼と、後ろに立つ鬼は実にそっくり  
だった。

## 41話（後書き）

橋無さんの出番無し……。

橋無さんの話書きたいんだけど、ネタがないなあ……。

感想、その他、待ってます( - 。 - ) y . . . z z z

## 夏祭り（前書き）

… ひどつてゐる。  
… 更に急展開。  
・・・まあ、大目に見てくれれば嬉しいです。

## 夏祭り

夏休みも残り僅かだ。

近所の夏祭りがもう少ししたら、始まるみたいで、祭りの終わりには花火もあるとの事だ。

「どーするかなあ…行くか、行かないか」

頭の中で考える。

行かない つまらない 暇 たのしめる 繼続。  
行く 暇終了。

よし。行こう。

「（一人で行くか？ それとも誰か誘つて行くか？ ん~……）」

考えた結果、俺はケータイで一人、誘つてみた。  
誘つてみた人物は

「ま、まさか…刹那くんから誘つてくるなんて……」

楯無さんである。

「？」

場所は篠ノ之神社。篠ノ之といえば、篭や束の実家なのだろうか？

先程見た舞を踊っていた巫女さんは篭に見えた気がする。恐らく見間違いではない筈だろ？

と、まあ、そんな事よりも、…だ。

「浴衣なんて久し振りだつたけど、変じやないかしら?」

そう、浴衣。今の樋無さんの格好である。

水色をメインとした色。所々に水玉模様。隠れた所に小さい華の柄。「かなり似合つてますよ」

浴衣を着た樋無さんはいつもと違つ雰囲気を纏つていた。

「あ……。うう~…」

率直に『似合つている』と言つたのに唸り声を上げられた。なんで?「つと、早速回つてみましょ~う? 樋無さん」

「そ、そうね。」

さて、夏祭りを楽しもうか。

「刹那くんつて、甘い物が好きよね」

「糖分を摂取しないと生きていけない氣がする位、好きですね」

手に持つリング飴を舐めながら答える。

「ところで樋無さんは何処から回りたいですか?」

「そうね~。今のところは特に無いわね」

「そうですか? ならこのままテキトーに見てまわ

前方より突如飛来してきた何かを首を捻つて避ける。

飛んできた方向を見ると、

危なつ

「射的?」

射的屋だった。

よく見ると店主のオヤジが誤つて弾「ルグ」を発砲してしまつたみたいだ。

「悪い悪い。銃に弾を詰めようとしたら失敗しちまつてな」

謝罪の変わりに、と無料で射的をうせてくれるらしい。

「じゃあ先に楯無さん、どうぞ」

「そう? なら先にやらせて貰うわね」

店主から銃を受け取り、楯無さんは狙いを定める。

何と無く、楯無さんを見ていると

「あれ? なんか構え方が・・・」

構えている銃はスナイパーライフルと同じ形で。

「楯無さん。ちょっと失礼しますねー」

「? なにかしら ひやあ!」

「うわっ、ビックリした!」

「わ、私の方がビックリしたわよ...? えっと、なにかしら?」

「ああ。えっと...楯無さんって射撃苦手ですか?」

さつき思つた事、それは楯無さんの銃の構え方について。

あまり安定しない構えだったので気になつたんだ。

「苦手つて訳じやないけれど、得意つて訳でもないわよ」

「ふむ。普通つてことでしょうか? 銃の構え方が気になつたもので」

姿勢がおかしかつたから、手を取つて直そうとしたんだ。

「そうなの?」

「はい。だから、もう一度構えてもらつていいですか?」

「え? ええ...」

そつと銃を的へ向けて構える楯無さん。

「ああ、そこで脇を閉めて 『いい』ついで...引き金を引く手は

手を取つて構えを調整する。

「おやぢ。おやぢ。おやぢ。」

「あう～～～」

顔を真っ赤にしながら頷く櫛無さん。何かあったのかな?

「お、準備できたか。さあ一発用だ！」トリガ

世間のオヤジに促され、櫻井さんから毛金を引く。

ハンジ

二

コルクの弾が飛んで行き、獲物へ当たる。

11

「  
」

「惜しいなお嬢ちゃん」

弾が当たつたのは液晶テレビと書かれた木札。

「たゞ所は良か二たのたか  
木か倒れなか二た  
ど二じてたゞ二か?

「惜しかつたですね。次は倒してみましょう。まだ後、四発もある

「アーティストの才能を引き出すためには、アーティスト自身の才能を尊重する必要があります。」

再度、銃を構え直して発砲。今度は液晶TVの隣のノートPCと書

力れた木へ

パン。  
ベシん。  
しーん。  
・  
・  
・  
。

卷之三

「はつはつはつ。惜しいな嬢ちゃん。あと二発だ」

卷之三

構えは乱れて無い。景品名が書かれた札への当たり所も悪くない。  
これつて

(樋無さん) 小声で声をかけてみる。

(何かしら?)

(もう一回、やつきの札のビビッちかを狙ってみてください。)

(? 別に構わないけれど)

新しい弾を装填し、発砲。そしてヒットする。だが結果は先程と同じ。

(やつぱりか)

(何がやつぱりなの?)

(二つの札、固定されてると思つんですね)

只の札なら普通に倒れていた筈だろ?。

(どうします? 他の景品に狙いを変えます?)

(いいえ。このまま狙いましょう)

見事に言い切った樋無さん。

(倒れない札を倒してみるのって何だか燃えてくるわね)

おお、ちょっとした鬪志が芽生えた様だ。

「狙いは液晶TVで行くわ」

「了解です。なら全弾使って倒しましょ?」

#### 四発目 失敗。

「さあ後一発だぜ、お嬢ちゃん」

店主がニヤニヤした顔で眺めている。その顔はいつも語っている。

『その鉄の札が倒せる訳がない』と。

そんな余裕顔を挫いてやろうと銃を構えた樋無さん。視線を目標へ向け、引き金へと指をかける。

「すうー…はあー」

どれだけ気合入ってるんですか、と言いたくなつた緊張感が漂う。

パンチ。

「あ」

「あーあ」

「あー、残念だつたな…つて!…?」

べしんっ。ぱしっ。べしんっ。

着弾した所が景品が置かれる棚の角。

そこへ当たつた弾が跳ねた。跳弾といつやつだ。

一度目に跳ねた弾は液晶TVの札へ。

当たり所が最良だつたのか、札は倒れる。

そしてまたも弾は跳弾。隣のノートPCへ。そして倒れる。

・・・・・奇跡か? ギヤグか? 跳弾つて実弾で起ると危ないんだぞ?

「そ、その鉄の札一枚を倒すとは…! エ、液晶TVにノートPC当たり〜〜〜つ!」

「え?」

「すげえな、お嬢ちゃん! 絶対に誰にも倒せない様に

あ

あ、なんでもない  
やつぱり倒れないように細工したのか。

「はあ…」

「やりましたね~。まさか2つとも狙うなんて

店主から赤字だコノヤロウ。と商品を貰うが、今は邪魔になるので後で貰う事にした。

「」

「ば、バカなつ…！」

とある店 金魚すくいの露店で敗北を味わう俺。

橋無さんが偶々発見した金魚すくいの店。

事の始まりは数分前

「刹那くん、アレをやってみましょう」

「アレ？」

橋無さんが指差す先は『金魚すくい』。

「金魚すくい？」

「おお、やつた事は無いけど知ってるぞ、アレ。

「ああ、知っていますよ。金魚すくい。モナカってので金魚をすくう  
ヤツですよね」

「あら？ 刹那くんは初めてなの？」

「はい」

そりゃ初めてですよ。夏祭り自体、数えるほどしか来た事無いんですけど。

「なら勝負は止めておきましょうか」

「勝負？」

「そう。負けた方が食べ物を奢るってこいつのせ、どつかしいっ！」

「別に奢らなくても俺が払うんですけど？」

「まあいいじゃない。やってみましよう？」

「いいか。初めてだけど面白そうだし。

「でも初心者には難しいわよ？」

「む。なら俺が勝つて見せましょ。口をせんぬめればイケる筈ですから」

「むむ。言ひじやない」

俺達は一人で金魚すくいの露店へ進んだ。

先客がいたので、金魚すくいのやり方を観察する。

うむむむ。案外難しそうだ。」

そう考へてみると店主に呼ばれ、俺と樋無さんとモナカとお椀が渡される。

「それじゃあ……」

「ええ……」

「「始めましょう（か）」「

モナカが破れない様に水へ付ける。そして金魚をすくつ。

・・・一匹目。なんだ、簡単じゃないか。これなら余裕だ。

「ふつ。余裕ですね」

「あら。やるじゃない」

隣の樋無さんから掛かる声。手元を見ると既に一匹目を終え、一匹目をすぐつっていた。

「やりますねつ！」

と、まあ…そんなこんなで白熱していたのだが……。

「まさか…ね。つたぐ金魚の奴め、裏切りとは大した度胸でした

よ

もつそろそろでモナ力が破れる頃、俺と同点だつた樋無さん。二人同時にモナ力が破れたので、勝負は中断。お椀に残っている金魚を数える所で、

ばしゃつ！

は？

え？

ひゅるるる…。

ばしゃつ！

俺が持っていたお椀から一匹が飛び跳ねる。

そのまま空に向かつて飛翔。

滞空時間は何秒だったか…。金魚は樋無さんのお椀へ<sup>ヤツ</sup>。

で、俺の負け。

これは勝負の最中に起こった事だから文句は言わないけど。

「イレギュラーな金魚でしたね」

「確かに型<sup>イレギュラー</sup>破りだつたわね」

露店から出て、他の所を回りに行く。

一人で祭りを楽しんでいると、花火が始まる時間が近づいてきた。

「そろそろ花火始まるようですし、移動しましょうか

「どうしてかしら？」

「花火を見るには良い場所があるんですよ

幼い頃に一度だけ見た時に発見した場所である。

「でもその前に

「？」

「樋無さん、何が食べたいですか？」

さつきの勝負で負けたら云々だ。

「ああ、その話ね。 そうねなら 「

ここは他の場所よりも少し薄暗い。

神社より少し離れた場所で、寝転がれる程広い開いた空間。  
辺りは木々が囲つており、静かで落ち着く所だ。

「そろそろ始まりますねー」

「そ、そうね」

力キ氷を手に頷く樋無さん。

そわそわしているのは花火が楽しみなのだろうか。

「と、ところで刹那くん？」

「はー?」

空を見上げるのを止め、樋無さんへと向ぐ。

振り向いた樋無さんの顔は何故だか真剣な瞳でこちらを見ていた。

今日は刹那くんの急な誘いから始まった。

「(いきなり『夏祭り行きませんか?』なんて驚くわよ...) 「

突然の事だったから、言われて直ぐには言葉の意味が分からなかつ

た。

浴衣を着るは久し振りでサイズが変わつてないか心配だった。

・・・・・ 最近、刹那くんと話をする時にかなり緊張している気がする。

「(やつぱり妹さんに言われたからかなあ...)」

彼の家へ押し掛ける形でお邪魔した時、妹さんと話した事

『好き、だから刹那くんと一緒にいたいのよ』

言つてしまつた。

『うわー・ハツキリと言いましたね。恥かしくありません?』

『...何故かしら。貴女と刹那くんと話してるとペースが乱されるわ』

話の主導権をいつの間にか握られている感じね。

『そりでしょ? けど、まあ、楯無さんの気持ちは分かりました』

ですが、まだまだですね。と付け足される。

『まだまだ?』

『楯無さん、あなたは兄さんが好きなんですね?』

『え、ええ』

『恋愛対象としてですよね?』

『や、やつね』

この子...相手にするのが少し辛い。

『まだまだです』

『何がかしら?』

『恋愛経験の無い刹那<sup>ヤナ</sup>を落すには、まだまだ。と言つてます』

え？

『好きなら好きっていいじゃないですか？』

『！？』

『それを躊躇つてたら刹那バカは何時までも気が付きませんよ』

簡単に言つけれど……ねえ？

『と、言つ事だ。これから買い物でも行つてきて、好感度ヒトツカが狙つてください』

といつ流れで買ショッピングい物に行つたのだけれども。

今は誰もいない場所にいる。一人きり。

もしかしてチャンス…？これってチャンスなのかしら？

誰に問うたのか、と訊かれれば、

その問の答えはこうだ。『答えは血フライ・アート・マイ・マイノズのうちの中にある』、ヒ。

すうー…はあー。

深呼吸をして、気持ちを落ち着かせる。

よし、言おう。このまま黙つてこるのは私らしくない。

「刹那くん」

・・・せつから何故に樋無さんは黙つているのだろうか？  
俺の名前を呼んだ後、じつ。と見つめたまま黙られた。

どうかしましたか？ と声をかけようと

「せ、刹那くん！」

「はい？」

大きな声でまた名を呼ばれる。

「私は…刹那くん。あなたの事が、す

ドオ――――ン！

「お？ 始まりましたよ楯無さん」

「・・・・・」

楯無さんが黙つたまま「チラを見てくる。

「・・・・・」

「・・・・・」

無言で見つめ合つまま時間が過ぎていく。

「ほ、ほひ。綺麗ですよ花火」

俺がそう言つと、楯無さんは間をおいて、何時も通りの笑顔になる。

「 そうね。本当に綺麗ね」

何とも言えないまま俺達は夜空へ放たれる花火眺めていた。

夏祭りが終わり、楯無さんと別れて、俺は家に戻つてくれる。  
自室のベッドに寝転がる。

「・・・・・」

聞こえた。

花火が始まった瞬間に楯無さんが口にした事。

『私は…刹那くん。貴女の事が、好きなの』と、楯無さんは言った。絶対にそう言った。

『好き』……？どういう意味だ？好き？人が、人の事を、好きになる？

なんだよ、それ。

『あの食べ物が好き』と『あなたの事が好き』…。その一つは違うモノだと理解できる。でも…

「さつきの『好き』ってどんな意味なんですか？」楯無さん…

その答を知りたかったが、俺の疑問に答えてくれる楯無さんはない。

**夏祭り（後書き）**

ど・う・し・て・こ・う・な・つ・た・！

後悔はしていない。己の信じた道を進むのだっ！

感想、その他、お待ちしております。（ロ／＼）（＼＼ロ。）／＼

**俺は……。（前書き）**

ど・う・し・て・こ・う・な・つ・た・！  
ホントにどうして こうなつた！？

俺は  
。.

夏祭りの日から数日経った日の夜。

—  
•  
•  
•  
L

好き

その意味が解らない。  
解らないから答えを知る必要は無い？

否、知らなければいけない事なんだと思う。  
でも……。

「なんなんだよ『好色』って  
考える。考える。考える。  
けれど解らない。

もつすぐ一学期…。

根無さんと会ふ事にがる力不全

そこで樋無さんに『好き』とは何か、訊いてはならない気がする。  
彼女

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

何なんだよ…このモヤモヤ。

俺は言い表せない気持ちで意識を闇へと沈めていった。

「・・・・・」

ガギインツーと鋭く重い金属音を響かせ、俺と一夏は刃を交えて対峙する。

先程の鈴と一夏の試合後、一夏が俺と模擬戦を挑んできた。二つ返事でOKし、今は俺が優勢。一夏の絶望的な状況だ。

「・・・・・」

今の俺は酷く無表情な顔だろう。己の意思を持つてない感じだ。

「くつ！」

『ハクセキユーモニカルフエアリアー』

「『強制執行・機能停止』…発動」

自分でも何をしているのか驚いたが、いつの間にか唯一<sup>ワントラウト</sup>使用能力を使っていた。

「！？ なんだよそれっ！」

危険を察知したのか、一夏が刃を交えずに回避する。

「……っ！？」

俺は慌てて黒刃から出でてくる、鈍く、蒼黒いエネルギーの刃をしまう。

「一夏…中止だ」

「は？」

「…授業つつても、ダルいから休憩。他の奴と模擬戦してくれ。な

？」

「お、おう」

「いやあー身体がダルいんだよ。夏バテつてやつだ、うん」

「そうなのか？ 水分はしつかり摂らなきゃ駄目だぞ？」

「あいよー」

アリーナの地面へ着陸。《鐵》をネックレスへと戻す。

「黒時」

「ん? 千冬さん?」

「はい?」

「先程使ったモノは? それに今日の態度は何だ。だらけていろるが」  
「...ですよね。」

「ふうー。今日は...ってかヤル気が無いのは夏バテです」

実際は違うけど。

「さつき出したのは...すみません、迂闊でした」  
「いや、私はあれは何か?と説明を求めているんだ」  
「へ? 知りませんでしたつけ?」  
「知らん。聞いた事も無い」

「そうでしたつけ? あれはワンオフ。エクセキューションメカニカルフェアリアーで強制執行・機能停止ファーストシフトす」

そう、全ての機械類に対しての天敵。  
「鐵のワンオフだと? まだ一次移行だらう?」

「ちよ、え? あのー...」

「一夏だつてそうでしたよ」

「...まさかお前もだと思わなくてな」

「あらら。そうですか。ああ、えつと能力はですね」

黒月の刀身が割れて、出てきたエネルギー刃。

(刀身が割れるのは第四世代の展開装甲だかららしい。束が言つていた)

そのエネルギー刃が機械に触ると、その機械はもう一度と使えな

くなる。

以前、『銀の福音』のエネルギー翼を斬りおとした時、再生しなかつた様に。

しかし、一度と使えなくなると言いつても、黒月で斬った場所だけなので、機械の『核』に触れなければ、機械の全てを止める事は不可能。あくまで斬った部分、一部だけ。だ。その説明を千冬さんへする。

「それがお前の言つていた黒月が必要と言つ事か？」

「ええ。ですが、今の様に戦闘で使用するつもりはありません。俺は目的の為だけに使うだけです。先程のは…スミマセン」

自分で無意識に使つていたのだ。

「…分かった。今後は気をつけろ、いいな？」

「はい」

ふう…何やつてんだか、俺。

授業終了の鐘が鳴る。次は昼飯の時間か。

「朝は特に何にも無かつた様にしてたからなあ… 楠無さん」  
何時も通りの態度でいられると、聞きたいた事が聞き辛い。

「ふうーむむむ」

「 刹那はどう思つ?」

昼食のデザートを食べていると、声がかかった。

「んあ？ 何が？」

「いや、だからなんで俺の白式が第一形態移行したのに負けたんだ  
るつって」

ああ、その話か。

「元より燃費の悪い機体なんだ。それにシールドエネルギーを削る  
能力なのに、

それが二つに増えたら尚更だつての」

「うーん……」

唸りながら考え込む一夏。……エネルギー運用を上手くすればいい  
だけだと思つた?

そもそも一夏は無駄な動きが多すぎる。

相手からの攻撃には防御じゃなくて回避すればスピードを落とす必  
要も無いものを。

考へていると笄、セシリ亞、鈴、シャルロット、ラウラと一夏が話  
していた。

昼食を終え、午後の実習へ向けて再度アリーナへ向かつた。

「やつぱり無駄に広いもんだ…」

「何を今更。そんなこと考へてるなら、白式の調整でもしどけ」

俺に言われた通りに白式のコンソールを呼びだす一夏。

それを見ていると、俺の視界は暗くなる。…あ？

「なつ！？」

誰かの指が、俺の視界を塞いでいる。気配を感じなかつた。

「だーれだ？」

この声は……。それに、この感覚……。

視界をふさいでいる指はさりさりとして、すこし冷たいのが気持ちいい。

やつぱり……後ろの人は

「樋無さん、何やつてるんですか？」

「はい、正解」

予想通り、樋無さん。特に何か変わった様には見えない。こんなにも何時も通りの表情でいられると、『あの事<sup>好き</sup>』が聞き難い。

「誰？」

一夏が疑問を口にする。ああ、初対面だっけか。

「IJの人は」

IJ学園生徒会長だぞ。と言つ前に人差し指で口に蓋をされる。教えちゃ駄目、と言つ事だらつ。

「んふふ」

「なあ刹那、この人は？」

「何で俺に聞く？ 本人に聞けばいいだろ？」

「あ、そうか。あの、あなたは」

「あつ」

俺達の後ろに樋無さんの視線がずらされる。

何だろう、と一夏が振り向く。バカめ。何も無い一つの。

そう簡単に背後を許すな……あ、俺、今さつき背後捕られたばつかだ。

「引っかかったなあ」

「

「それで一夏へ扇子を突き出し むひつ。…ぬ? 僕?

え? そこは、じへ、一夏にやるトロロドは…?

何とも言えない空氣の中、樋無さんが口を開き。

「それじゃあね。刹那くん達も急がないと、織斑先生に怒られるよ

「え?」

嫌な予感 壁の時計へ視線を 授業開始、三分経過…。  
「だあああつ! や、やばい… ますい!」

「一夏あつ! 走れ!」

「お、おうつ!」

走りながら後ろを確認。元凶の樋無さんは既にいなかつた。

授業へ遅れた時、一夏はシャルロッタによる『ラピッド・スペイチ高速切替』の実演と

言つ形で、遅刻の罰は許されていた。

俺はそれに巻き込まれたんだけど…。

「ふーー…」

「…しても…」

樋無さん、いつも通りだったな。と思い返す。

朝に樋無さんと会つたが、毎に見た時と同じく、いつも通り。  
・・・・・これつて。

「俺の気にして過ぎ…?」

いや、違うと思つ。そんな事は無い筈。

ガチャリ。おや?

「ただいま～」

楯無さん。

「お帰りなさい。今日は新学期の始めですし、忙しかったんですか？」

極力、今は何も考えず、普段通りにじょひ。

「そうねー。もうすぐ学園祭だから、生徒会の方で話し合いをね

「お疲れ様です。で？学園祭って何をするんですか？」

「…相変わらず人の話を聞いて無いわね」

「スミマセン」

ホームルーム

いや、だって、HRとか寝てるし（バレない様に）

「各クラス毎に催し物をするの。それで、最も

と、そこまで言って黙る。

「最も 何ですか？」

「内緒、よ。楽しみにしておいてね」

「はあ」

別にそれなら詳しく述べないけど。

・・・・・ 話が途切れた。

いかん。何故だか話しがけ辛い。 なんでだ！？

「あ、あの…楯無さん」

何とか話を続けようと、俺が発した言葉

「夏祭りの時の…『好き』って、どうこう…意味ですか？」

「…え？」

……後悔した。

なんで……なんで、その話を持ちだしたんだよ、俺……。

沈黙。 静寂。 その言葉の通り、静かだ。

数十分か、それとも数分か。 鬼に角、長時間が経過したと感じる。 実際はほんの数分かも知れないが。

「……」

「……聞こえていたの？」

静寂を破ったのは樋無さん。 その双眼は彼女には似合わない……怯えた様な眼。

「ええ……」

「そう……」

またしても沈黙が始まる空氣となるが、今度は俺が話しかける。

「……聴こえました。『好き』って言葉

聴こえたのだが、意味が解らない。

「けど、俺にはよく解りませんでした」

「それは……どういう意味、かしら?」

「樋無さんが俺に言った『好き』って言葉の意味、です。

好き、それが人 僕に向けられた言葉なのは理解しました……

けど

「……けど?」

「人が人を好きになるって、何ですか？」

「え？」

そんな驚いた顔をしないで下さいよ。

「それは…愛情ってヤツですか？」

愛情…辞書で意味を調べてみた事があつたが、結局理解不能だつた。  
親が子へ注ぐ愛。異性に對しての愛。

「なんなんですか、愛<sup>それ</sup>つて…」

「それ、つて…」

「親から注がれた愛？ それは俺にもあるんですか？ あれが愛なら…」

「俺は…」

過去を思い返す。

：親との記憶。

己の為に…息子と娘を力ネの為に差し出す両親…。  
人を人とも思わない態度。

そこにあつたのが愛なら…

「俺は…」

「俺は…愛情なんていらない！」

「 ッ！」

その言葉が樋無さんにどれ程の重みがあつたのかは知らない。  
だけど、その言葉が彼女の心に大きな傷を負わせた事は分かる。  
薄らと浮かべた涙を零しながら、部屋を出ていった樋無さん。

俺は……何も感じる事も無く、開いたままのドア眺めていた。

**俺は……。（後書き）**

話がどんどん難しく……。

一応……この先の展開は考えてるんですけど……ね。

この先の話を考えるので、更新が遅くなるかもです……。

感想、その他、待ってます／＼（。ロ＼＼）（＼ロ。）＼＼

## 44話（前書き）

今日は… 一体、何を書いたんだろうか？

翌日。全校集会が行われた。

内容は学園祭の事だらう。

「（あの後、楯無さん 部屋に帰つてこなかつたな…）」「いや、朝には戻つて来たが、すぐに出でていってしまったのだ。

「それでは、生徒会長から説明をさせさせていただきます」

生徒会役員の一人であるう人の声で、騒がしかつた空気が消えていく。

「やあみんな。おはよっ」  
「楯無さん…。

作り笑顔で話している感じ…。

何ヶ月も一緒にいるのだ。 それ位は感じ取れる…否、俺がそう思つていいるだけか？

「さてさて、今年は色々と立て込んでいて ちゃんとした挨拶がまだだつたわね。

私の名前は更識 権無 君たち生徒の長よ。以後、よろしく

につりと微笑んだ楯無さんに、熱っぽい溜息を洩らす一部の生徒たち。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回は特別ルールを導入するわ。

その内容というのは

慣れた手つきで扇子を取り出し、横へとスライドさせる。

それに応じた様に空間投影ディスプレイが浮かび上がった。

「名付けて、『各部対抗織斑一夏＆黒時刹那争奪戦』！」

ばあんっ！と小気味のいい音を立て、扇子を開く。それと同時に俺と一夏の写真が映っていた。

- は？

一  
え  
...  
」

全校生徒による驚愕音声。  
ホールが…揺れた。

何を考えているのか考えていると、一斉に俺と一緒に夏に視線が集まる。「静かに。学園祭では毎年各部活動」との催し物を出し、それに対して投票を行つて、

「織斑一夏と黒時刹那を、一位の部活動に強制入部させましょー！」  
再度、雄叫びが上がる。

「ハセキルの魔術」

「一素體がいわゆる御一」

「…さみせへいをあめざへひす…ひだりなみ」

「今日から直ぐに準備始めるわよ！　秋季大会？　ほつとけ、あんなん！」

色々と大丈夫なんださうか？ 今叫んでいたやつら、  
けどなあ：部活、か。 何をやればいいのか解らんぞ。

「どうか、俺の了承が無いぞ…」

前から一夏の声が聞こえる。 蹄める。愚痴つても何も変わらない

から

一度火が付いた女子の勢いは止まらない。

熱く燃える女子達を余所に、全校集会は終わった。

同日。教室の放課後の特別HR。

今はクラスの出し物を決める為、ワイワイと盛り上がっていた。

「……おい、一夏」

「ああ……分かつてる……」

<sup>一夏</sup> クラス代表と俺（千冬さんに命令されて）は皆の意見を纏めなければならないが…

内容が…

『織斑一夏と黒時刹那のホストクラブ』『織斑一夏&黒時刹那とツイスター』『織斑一夏&黒時刹那とポッキー遊び』

「「却下!」「

最初はどんなモノか知らなかつたが内容を知らされて、却下した。  
えええええー！！！と大音量サラウンドでブーイングが響く。

「ふざけんな！ 誰が嬉しいんだよ、この企画！」

「そうだ！ 誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

「私は嬉しいわね。断言する！」

「そうだそうだ！ 女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「ウチのクラスの男子一人は共有財産である！」

「他のクラスからいろいろ言われてるんだってば。ウチの部の先輩も煩いし」

「助けると思つて！」

「救世主氣取りで！」

「うん、意味が解らねえ。 といつか、俺に何をしろってんだ？  
千冬さんは職員室へ行つていて、この場にいない。

なので、

「山田先生、許可できませんよね？ やつぱり眞面目に考えるべき  
ですよね？」

「えっ！？ わ、私に振るんですか！？」

「ラ、副担任だらうがアンタ。

「え、えーと…うーん、わ、私はポッキーのなんかが  
「はい、もういいです。先生に訊いた俺が愚かでした」  
頬を赤らめながら言わないで、副担任…。

「刹那の言つ通り、眞面目に考えてだな！」

「メイド喫茶はどうだ」「突然響く声。ラウラだ。

「密受けは良いだろ。それに、飲食店は経費の回収が行える。  
確か、招待券制で外部からの密受けはいいだろ？ それなら、休  
憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

「ふむむ…。みんなはどう思つ？」「

クラス中の俺とラウラ以外がぽかんとしていたので訊いてみる。  
「いいんじやないかな？ 一夏と刹那には執事か厨房を担当しても  
らえればOKだよね」

シャルロットの押しの一言は皆の心に響いてする。

「織斑君、黒時君、執事！ いい！」

「それでそれで…」

「メイド服はどうする…？ 私、演劇部衣装係だから縫えるけど…」

覚醒する女子一同。何がそんなにテンションを高くするんだ？

「メイド服ならシテがある。執事服も含めて貸してもらひえるか聞いてみよ?」

「またもやラウラ。そしてまた、クラスのみんなは「え?」となる。

「『ごほん。シャルロットが、な』

「え、えっと、ラウラ? それって、先月の…?」

「ああ、夏休みにお前らが一人で むいりあ」  
バイトしてたヤツか。と言おうとしたら、ラウラのACEで黙らされた。  
まあ、そんなこんなで我がクラスの出し物は『『奉仕喫茶』となつた。

「ねーねー黒時君」

「んー?」

一夏は今、職員室へ行つて学園祭の出し物について報告へ。  
俺はクラスの女子達に話しかけられた。

「あ、あのさ…『『奉仕喫茶』の練習しない?」

「練習つて?」

「たつ…例えば! 『お帰りなさいませお嬢様』つて私達に言つて  
みるとか! ?」

「あ、『『奉仕喫茶』つて、そんな事言ひの?」

「あ、それはそうだよ! 『『奉仕喫茶』なんだもん! 」

「そう言つモノなのか…? …ならやってみるか。

「じゃあ… お帰りなさいませ、お嬢様」

「『ココ。作り笑顔120%の営業スマイル。これでいいのか?』

「…………」「」

：周りの女子達は顔を赤くして、黙つておられた。  
何故？

教室を出で、ふらつといでいると

トドロカドロ。

ケータイが鳴る。

「なんだ？」長閑

『おや、兄さんが私の事を名前で呼ぶとは珍しい』

妹の黒時 長閑。何の用だよ。

『樋無さんと何かありました？』

「なつ！？」

『「何故知っている！？」とは話かないで下さい。で？ 今の心境  
は？』

『……何故お前に言う必要がある？』

『はあ……どうせ「なんなんだよ」とか「愛つてなんだよ」とかでし  
ょう？』

何故分かる？

『この際です。』『はいです。黙つて聞いてください。OKです  
ね？』

お、おお・・・・・・

長閑は一息ついて

『答えなんてありません』

「は？」

『それじゃ、失礼しますね。あ、学園祭のチケットを送つてくださいねー』

「はあ！？ ちょっと待ちやが

ブツツ！と一方的に切りやがつた。

「…………」

『答えなんて無い』

その言葉が頭の中で響き渡つていた。

そんな事を考えながらも、放課後の学校を歩き回る。放課後は部活動をする生徒が多く見られる。

偶々、部活動を見て回つていると、畠の道場へと足が向いた。

そこで見た光景は

「楯無さん…と一夏？」

二人は白胴着に紺袴といつ格好で、向かい合つていた。

「お？ 刹那

一夏の言葉に楯無さんも俺に気付く。

「刹那くん？」

「い、こんにちは？」

何だろ？ か、こいつ、言い表せないモノがあるぞ？

「刹那は何やってんだ？」

「ん？ 暇だつたからな…」の辺を歩いてただけだ

「そりなのか」

「つて、お前は何やつてんだよ？ 樋無さんと一緒に

俺が尋ねると説明が始まる。

聞けば、一夏と樋無さんが生徒会室で話をしていたらしい。

そこから よく話を聞いて無かったので覚えて無いが 勝負す

る事になつたらしく。

・・・ふむふむ。

「一夏」

「なんだ？」

「俺が相手をしてやるわ」

「はあ？」

「遠慮はするな。ああ…本気で構えとけよ。じゃないと

脚に力を込めて、踏み込む。

「！？」

「一撃で終わるからな

ド」「オツ！

一夏の腹へと一撃。

「つー？」

「んー？ む？ 耐えたのか？」

「はつ…はつ…はつ…はつ…！」 あ、当たり前だ…。つてか、いきなり何しやがる

「何つて…特訓？」

「訳分かんねえよー？」

いやあ…なーんか、樋無さんとお前が一緒にいるのを見ると、何か

殴りたくなつた。

自分でも何をやつてゐんだらうか、と自分でも疑問に思つた行動だ。

「よし。次は一瞬で終わらせる。痛みは無いと思うから……まあ大人しく気絶してろ。と言いつつ、再度の踏み込み。

「ざけんなつ！」

反撃してくんなつて。俺は樋無さんと話がしたいだけなんだ。

一夏が戦いの構えをとるが、遅い。

俺は一夏の目の前で急ブレーキ、そしてトンツ……。

「…」

首筋へと手刀を打ち込む。

そして一夏は崩れ、墜ちる氣絶する。

「ふう」

「一体、何をしてるの？」

「ちょっと話しません？ 樋無さん」

「え？」

#### 44話（後書き）

「どうしよう…。

自分で何を書いてるのか分からなくなつた。  
恐らく、この話は書き直すかも…。

この先の展開…？ 全く考えて無い。r n  
何かいいアドバイスがあれば教えてほしいです（懇願）

それでは～（：・ー・）

## 45話（誕生日）

おめでとう。

短い！

これが「おめでとう」よー？

ってな訳で、ダメ。

一  
話？

え、ええ…」

ヤハレ、何を話そ？

「あのですね……」

いや、ホントに何を言おうかね？

ほら見た事か。  
沈黙が生まれたぞ。

沈黙が始まって数分。櫛無さんが口を開いた。

卷之三

「なんで

「なんで急に一夏くんと戦ったの?」

えー、うーん、何で、おつか? 俺の意味不明です カジ

「一夏が櫛無さんと一緒にいたから?」

-  
?>

いや、だから、櫛無さんか一夏といたから?」

• • • • •

「俺…何か変な事言いました?」

いいえ？」

ふむ？ ならいいけども…。

「あの、樋無さん」

「？ 何かしら？」

「さつきは何してたんですか？」

「いつも気になってるんですが。  
とっても気になってるんですけど。

「え？ ああ、それは

「

聞けば、一夏の特訓…と書つ事らしい。

「樋無さん、一夏の特訓…俺も混ぜて貰つてもいいですか？」

「ど、どうしてかしら？」  
「…？」

「駄目…ですか？」

「何と無く、だ！」

「だ、駄目じゃなにけれど…？」

「じゃあ、決まりですね」

有無を言わせない様に強引に決めてしまった気がするが…

「まあいいや」

やつと思つておいつた。

一日後。

俺は樋無さんと一夏の特訓を開始した。

が、

「俺は……無力だつ……」

膝について嘆く俺（実際にやつてゐるワケじやなくて心の中では）いや、だつて人にE.Sの事を教えるつて初めてだし？…どうやって教えればいいのかさえ…。

と、こいつ言った有様なので

「一夏くん、スピードが落ちてるわよ。もつと集中しなさい」

樋無さんに任せてしまつ羽田。

現在、一夏が行つてゐる事は、

第一形態移行になり、手にした力 雪羅 を鍛える事。

俺は普段からP.H.Cをマニュアル制御にしてゐるのだが、一夏は違つたらしい。

ので、今は雪羅<sup>カノンモード</sup>を撃つ時の反動を自分で相殺しないといけないらしい。

反動制御は少しのミスで背後に吹き飛ぶ事になる。

格闘戦メインだったヤツがいきなり射撃型の戦闘方法をやれつてのは辛いだろう。

だから

「オッケー。速度上がつてきてるね。 それじゃ、そこで<sup>イグニッシュョンファースト</sup>瞬時加速してみようか」

「え？」

「瞬時加速。ショーター・フローの円軌道から、高直機動にシフト。相手の弾幕を一気に突破して、零距離で荷電粒子砲」

「ちょ、ちょっと待つてください！　いきなり、そんな……」

「急ぐ！」

「わ、わかりましたっ！」

急かされた一夏。……あ、何か、この後の展開が予想できる。

『――――――』

「うわ……」

ショーター・フローを途中で止めたからだろ？。制御を失って壁に背中から突っ込んだぞ。

「こりこり、瞬時加速のチャージしながらショーター・フローも途切れさせないの」

「む、難しいです」

「ダメよ。ちゃんと覚えて。篠ちゃん以外はみんなできるんだから」

「え……？ 刹那は出来るのか？」

・・・失礼なヤツめ。

「何を言つたか。遠距離武器は持つてないけど出来るだ」

「そ、そうだったのか」

何でそこまで『え？ マジで？』みたいな顔をしてやがる一夏め。

「はい、起きて。もう一回」

……櫛無さんの指導は厳しいみたいである。

「刹那くん」

「？」

一夏の特訓が終わり、自室へ戻りつとすると櫛無さんご引止めのひらめきが脳のうに現れた。

「どうかしましたか？」

「その、ね？　この前の事で刹那くんも色々言いたい事があると思つたの」

「はあ……？」

「それに……ちよつと事情があつて、少しの間、一夏くんの部屋に住む事になつたの」

「は？　……それってどういこつ」

俺の言葉を最後まで聞く事無く、櫛無さんは疋早に去つて行つた。

「えーと……」

何故にそんな急な話を……。

んー……？

……あれ？　俺って　櫛無さんに嫌われてる？

「……」

いやいやいやいやいやいやいやいやいや。

それは……嫌だな。

「んー？」

あれ？　俺、今、櫛無さんに嫌われたくないって思ったのか？  
なんだろう？

全然 納得と理解が出来ないまま、俺は渋々と自室へ戻つて行つた。

## 45話（後書き）

「これからは話題をどうぞおつしか…」（思案中）

恐らく次回は学園祭の開始からでしょつかね。

風邪をひいてダウン中なので、更新スピードが落ちます。

感想、その他、待っていますヽ(・・・)ゝ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7087v/>

---

IS～強制の適合者～

2011年11月4日15時27分発行